ピウニー卿の冒険！

オオカミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピウニー卿の冒険！

【Ｎコード】
Ｎ９５８４Ｗ

【作者名】
オオカミ

【あらすじ】
オリアーブ国の騎士ピウニー卿は、人々を苦しめていたグラネク山の魔竜を倒す。だが、魔竜が最後の力を振り絞って吐き出した呪いを受け止めて、彼は果てた。竜殺しの騎士ピウニー卿の死が惜しまれて１年後、ある酒場から物語は始まる。
１人の騎士と１人の魔法使いが織り成す愛とネズミ（キンクマハムスター）と猫（シンガプーラ）と、その他いろいろの物語。

００１．旅は道連れ、世は情け（前書き）

以前こちらで短編の同名小説として掲載していたものを序章とし、長編にしたものです。以前の短編は「ピウニー卿の冒険！（序章あるいは別の物語）」（ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７１９９ｖ／）というタイトルで、現在は検索から外しております。００１～００４までは、こちらの作品を改稿・設定変更したものとなっております。

００１．旅は道連れ、世は情け

魔法と剣の国、オリアーブ。
この国は多くの立派な騎士と、賢い魔法使いで支えられた平和で豊かな国だ。
今でこそ平和を謳歌しているオリアーブだが、１年ほど前、この国は危機に陥った。

グラネク山の山頂に住まう魔竜。この魔竜が、ふもとの村々に姿を現しては、炎を吐き、人々の生活を苦しめていたのだ。オリアーブ国王は信頼のおける１人の騎士に、この竜の退治を命じる。騎士は仲間たちと共に果敢に戦い、この竜を倒した。…だが、魔竜は最後の力を振り絞って、呪いの息を吐いたのだ。１人その気配に気付いた騎士は、魔竜の吐く呪いが麓に届くことを怖れ、その全てを受け止めた。その呪いを受けた騎士は、彼の相棒だった魔法剣と共に、塵となって消えたという。

命燃やした騎士は竜殺しの騎士と讃えられ、その命が惜しまれた。

＊＊＊＊

その日、ピウニー卿は拠点にしている小さな村の小さな酒場で、チーズと果実酒を嗜んでいた。
小さな酒盃に入れた紫色の液体はふくよかな香りで、ピウニー卿は満足気だ。
また、少し青いカビの生えたチーズは、癖があるが果実酒と共に口に含めば、さらに芳醇な味わいだった。
ピウニー卿は最後の一口を煽る。うむ。実に美味い。

「おおおおおう！　ちょっと、誰だ、このボトル開けたヤツ！これは、竜殺しの騎士様がキープしてた自慢の果実酒で…って、うおああああ！　極上のアオカビチーズまで千切って、ちくしょう！誰だ、泥棒か！意地汚い食べ方しやがって！」

なにやら、酒場の奥から店主の騒がしい声が聞こえてきた。まったく、興のない事だ。ピウニー卿は、やれやれと立ち上がる。不意に、ピウニー卿の身体が翳った。

「おい。お前、その入れ物なんだ。」

店主の声が、えらく近くに聞こえた。どうやらピウニー卿に向かって怒っているようだ。

「まさか、お前が開けたんじゃないだろうな…。」

人聞きの悪い。
そもそも自分がキープしていた酒を開けて何が悪いというのだ。ピウニー卿が、ふんと鼻を鳴らすのと、店主が怒鳴るのは同時だった。

「このネズミ野郎がーーーーーーーーーーーーーーー！！おいっ、タマ！こいつを食っちまえ！」

「にゃーん。」

ほほう、猫の分際で私を食らうと？　出来るならば、やってみよ！とう！
ピウニー卿は、隣の戸棚へと飛び移った。
店主の目には、ふもふもした薄い黄色がかった丸いネズミが戸棚に

飛んだように見えた。

＊＊＊＊

「にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃーーーーー！」

猫がピウニー卿を追って戸棚から戸棚へとジャンプする。置いてある酒やら、スパイス瓶やら、漬け物瓶やらが落ちないかと、店主はハラハラものだ。

「お、おい、タマ、待てそっちは危ない、ちょ、わーーーーーーー！！」

「にゃーーーーー！！」

ネズミ、じゃない、ピウニー卿はとーんとーんと、器用にきゅうりの酢漬けの入った瓶から、食用酒の入った瓶に飛び移った。それを追いかける猫が1本目の瓶をするりとかわし、2本目の瓶の脇を通る。その瞬間、瓶の陰に隠れていたピウニー卿が、パプリカの暖簾をかきわけて猫の眼前に現れた。猫がぎょっとした顔で、ブレーキをかける。

スキあり！

「ふにゃーーー！」

ピウニー卿が、（針のような）剣を抜いた。間一髪で顔を背けた猫！　だが、ピッ…と、セピア色の自慢の毛を掠めて、驚いた猫は足を踏み外しかける。

「にゃっ！」

しかし、かろうじて踏ん張った！

「ふしゃーーーーー！！」

そして猫も負けてはいない。シャキーンと爪を出して、ピウニー卿の身体を払う。おおっと！　ピウニー卿は間一髪のところを一歩下がって直撃は免れたが、剣を下げていたベルトが運悪く猫の爪に引っかかってしまった。

「なぬっ！？」

「にゃにっ！？　うにゃうにゃうにゃーーーーー！？」

前足に何か気味悪いものがひっかかった感覚に、猫はパニックに陥り、きゅうりの酢漬けと食用酒、それにパプリカ、吊るしているたまねぎ、各種調味料、食器、諸々巻き込んで戸棚から足を踏み外した。

「うおおおおおお！！　やめてええええええ、タマーーーーーーー！！」

店主の悲痛な声と、ガシャーーーーンガラガラ、という（お約束の）食器やら、ガラスやらが粉砕される音が響く。

ゴン。カランカラン。

最後に金属で出来たボウルが落ちてきて、酒場は静寂を迎えた。

床には、酒と酢と調味料を頭から被って悲惨な状況になった猫と、その猫の前足に引っかかっているネズミが居た。

＊＊＊＊

「まったく、役に立たない猫め！…せっかく綺麗な毛並みだから置いてやっていたものを、ネズミ一匹捕まえられないなんて…。もう二度とうちの敷居を跨ぐなよ！」

店の裏口から放り出された猫とネズミは、ころころと裏路地を転がってぐったりした。

店主の言った通り、元は綺麗だったのだろう、猫のセピア色の毛並みはどろどろで、しょんぼり耳が下がって無残なものだった。猫は、面白く無さそうに前足に引っかかったネズミを払うと、妙に人間くさい、長いため息をついた。

「もう、なんなのよ…。レディにネズミを捕まえようとさせるほうが間違ってるんだわ…。ああ。ほんっとに、どろっどろじゃない。」

「いたた…。おい、猫、投げるな、粗雑に扱うな、もっと丁寧に…ん？」

「え？」

猫の綺麗なグリーンの瞳が、ピウニー卿をしげしげと眺めた。ピウニー卿の艶々したこげ茶色の瞳も、同じように猫をしげしげと眺めている。

そして、同時にこう言った。

「ネ、ネズミがしゃべってるーーーーーーーーーーーーーーー！？」

「猫がしゃべっておるだとーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

「うるさい、近所迷惑だーーーーーー！！」

酒場から、店主のイライラした怒鳴り声が聞こえた。

＊＊＊＊

街道をセピア色の毛並みの猫が歩いていた。その背の上では、薄い金色の毛並みのネズミが髭をゆらゆらと揺らしている。

「いい天気だな。サティ。」

「そうね、ほんっとーにいい天気ね。」

「機嫌が悪いな。人参を食べたくらいで怒らなくてもよかろう。」

「別に怒ってないわよ。」

「いや、怒っておる。」

「怒ってない。」

「最後まで人参を残しておるから嫌いだと思ったのだ。」

「もう、ピウニーうるさい。怒ってないってば！　それより、騎士のくせにレディの背中に乗って移動するのは何事なのよ！」

「歩くのが遅いから乗れと言ったのは、サティだろう。」

ピウニー卿はすとんと降りて、サティの横を歩き始めた。背中から重みが無くなったサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにゆっくりと歩く。

サティの機嫌が悪い原因は、昨日まで滞在していた村の宿屋の娘さんが出してくれた食事のことだ。人の気配のあるところに立ち寄った時は、サティがかわいい猫のおねだりポーズを使って、人間の食べ物をもらっている。それをピウニーと半分こして食べるのが常だ。（騎士であるピウニー卿は、このような形で女性に借りを作りたくはなく、大いに不本意だったのだが、今は非常時であり仕方がない…ということで、サティと協力して、このような体制になっているのである。）

昨日の食事には人参のグラッセが1つだけ入っていた。いつもなら、ピウニー卿に頼んで剣で割って食べるところだったが、「いらないのなら私が食べるぞ。」と言って、ピウニー卿がひょいぱくと1人で食べてしまったのである。人参のグラッセ、甘くて好きなのに！

騎士のくせに！

ピウニー卿いわく、「騎士たるもの、出された食事は全て食べなければならぬ。」というのが信条だそうだ。

それを聞いたサティは、好きなものを最後に残しておくたちだと、大層憤慨した。

酒場を追い出されてから1ヶ月。ネズミのピウニー卿と猫のサティは、こうして2匹で旅をしていた。あの日酒場の路地裏で、お互い人語を解し、話すことのできる猫、そしてネズミとして認識しあった2匹は、互いの身の上を打ち明けたのである。

この2匹には、とある共通の事情があったのだ。

それはこういう話である。

あるところに魔法剣を使いこなす1人の騎士が居た。その騎士は、人々を苦しめているというグラネク山の魔竜を倒したという。そして魔竜が死の間際に、最後の力を振り絞って吐き出した呪いをその身に全て受け止めて、騎士は塵となって消え果てた。

「その話知ってる。竜殺しの騎士って人でしょう。」

「ああ。だがな。」

その物語には続きがあった。

実は、魔竜が最後に吐き出した呪いによって、誰にも気付かれることなく騎士はちいさなネズミへと姿を変えてしまったのである。ちなみに、騎士が手にしていた剣は、律儀にも、主と同じネズミサイズになったという。

「へー。で、それが貴方だと。」

「へーって。おい、サティ。感想はそれだけか。」

「うーん。あのね…。」

そして、もう1つはこうだ。

あるところに古代魔法にも造詣の深い女魔法使いが居た。世俗とあまり関わりたがらない師匠に代わって、オリアーブの魔法師団や魔法研究所からの依頼を引き受けていたという。

あるとき、研究に身を捧げる余り暴走した魔法使いが、死霊術に手

を出した。突如暴れ狂ったその死霊使いを、女魔法使いは力の限りの魔法で応戦した。だが、死霊使いが最後に放った呪いを全てその身に受け止めて、女魔法使いは塵となって消え果てた。

「ほほう…。王都には確かに魔法師団と魔法の研究所があるが、そのような出来事があったとは。」

「魔法研究所は有名だけど、事件があったのは奥の方だし、あまり騒ぎにならなかったのかもね…。…それで。」

その物語には続きがあった。

実は、死霊使いの呪いによって、誰にも気付かれることなく女魔法使いは小さな猫へと姿を変えてしまったのである。
ちなみに、戦いの最中で杖は失くし、杖無しの猫の魔力ではあまり強い魔法は使えない。

「あー。それがお前さん、と。」

「あー、って。ピウニー。感想はそれだけ？」

「うむ。…なんというか、その、似たような話だな。」

「んー…まあ…、そうね。」

そういうわけなので、２匹は同じ境遇として意気投合し、この魔法を解くことの出来そうな人物、サティの師匠であるという理（ことわり）の賢者の元へと共に旅をすることになったのである。
旅は道連れ、世は情け。

００１．旅は道連れ、世は情け（後書き）

ピウニー卿はキンクマハムスター、サティはシンガプーラをモデルにしております。

００２．尻尾の動きがゆっくりになる

「サティ、機嫌は直ったか。」

「だから、怒ってないってば。」

「うむ。」

「何よ。」

「サティは機嫌が直ると、尻尾の動きがゆっくりになるな。」

「もうほんとに、ピウうるさい。」

「名前を略すな。」

「騎士様なら、もうちょっと厳粛に出来ないの？」

「別に誰も聞いてないのに、構わんじゃないか。」

「分かった分かった、ちょっと髭！髭揺らさないで、むずがゆい。」

「む。勝手に揺れるんだ、仕方なかろう。」

夜。街道から少しはなれた森の、木の下で２匹は休んでいた。周囲の様子が分かるほど、月の大きな晩だ。サティは丸くなって、その喉の毛皮にピウニー卿が埋まっている。大体、こういう感じで２匹、ではない、２人身を寄せ合って眠るのが常だった。

サティの毛皮は艶やかで絹のような触り心地だ。いつも河原を見ては水浴びをしているし、猫になっても使うことが出来たという、浄化の魔法で汚れひとつ無い綺麗な毛皮を保っている。ピウニー卿の毛皮もふわふわと柔らかで温かい。サティと比べると身体が小さいから、相手の毛皮を思い切り堪能出来るのは大体ピウニー卿で、それがサティには不満だった。

「おい、サティ、締めすぎだ。ちょっと緩め…。」

「んー、いいじゃないちょっとくらいふかふかしても…」

「…しっ…サティ、静かに…。」

常とは違うトーンになったピウニー卿の声に、サティも声を抑える。前足を少し緩めて、ピウニー卿を解放した。ピウニー卿は腰の剣を抜くと、前方に睨みをきかせる。とても凛々しい姿だが、ネズミである。サティは身体を起こして、自分の身の魔力を集中させた。杖が無ければ使うことの出来る魔法は限られるうえに、猫のサティの魔力はとても低く、初歩の初歩程度の魔法しか使うことは出来ない。だが、無いよりはマシだろう。

グルルル…。

茂みの向こうから聞こえる唸り声。

恐らく、野生の狼か。

「下がっていろ。」

「え。」

「安心しろ。」

ピウニー卿がサティを庇うように一歩前に出て振り向いた。ゆっくりと、頷く。

「サティは、私が守る。」

ピウニー卿のYの字の口元がちまちま動き、その可愛らしい動きに反して重々しい口調で言った。…それは、眼前の敵から必ず守るという、騎士の固い決意だった。小さな丸い耳がぴこぴこと忙しなく動いている。サティのグリーンの瞳が驚愕に広がって、何かを言いかけたその瞬間、茂みの奥から狼が飛び出した。

「ピウニー…！」

とう！

ピウニー卿が大きく跳躍した…！

キャイン…！

狼の吼え声が響く。ピウニー卿の剣が、狼の前足を薙いだのだ。体格差もあってピウニー卿の身体は狼の下を潜り抜ける。…だが、

低！

攻撃の位置低！

とう！…ってかっこよく跳躍したのに、最下段攻撃！

狼の横を前転してしゅたっと剣を構えたピウニー卿の身体を、サテ

ィは咥えて横に飛んだ。もちろん、剣が刺さらないように気を使うのも忘れない。サティは駆けた勢いを殺してターンすると、すぐに止まって眼前の狼を睨みつける。

ぽとりとピウニー卿の身体を落とすと、尻尾を大きく膨らませた。

「…くっ、不覚…っ！」

「ピウ、私も一応魔法使いの端くれなんだから、バカにしないで。」

「バカになどしておらん。」

「だったら1人で突っ込まずに、多少は頼りなさいよ。」

「……。」

前足を傷つけられて、気が昂ぶったのだろう。狼は鼻に皺を寄せ、さらに大きな唸り声でこちらを睨みつけている。ピウニー卿は、むうと唸って髭を撫でた。サティが猫でありながら魔法を使うことができるのはもちろん知っている。軽んじたわけではない。だが、ピウニー卿は騎士なのだ。自分以外の者を守る、それがピウニー卿の騎士としての矜持だった。サティにそんな風に言われるとは、思ってもみなかったのだ。

「…ああ、すまなかった。」

「分かればいいのよ。」

「サティ、魔法で気を引けるか。」

「乗って。」

サティが頭を下ろすと、心得たピウニー卿がそこに登る。

「限界まで近くに行って、魔法で私が気を引く。」

「その隙に私が狼の身体に飛び移って、魔剣の魔力を狼に送り込む。気絶くらいはさせられるはずだ。」

「了解。しっかり掴まっててて。」

サティが、たっ…と地面を蹴ったのと、狼が再び跳躍したのは同時だ。

＜ニータ・ヴィ・ラニマーク！＞

（雷撃の鞭！）

狼の牙がサティに届く前に、サティはもっとも小さな雷撃の呪文を唱えた。バチィ…！と小さな雷の音が狼の足元で響き、その衝撃に、狼がキャイン！と鳴いて、後ろに飛んで頭を低くする。さらにそれを追撃するようにサティが距離を詰めると、狼が顔を上げる瞬間にピウニー卿がその頭上に飛び移った。

喰らえ！

ピウニー卿が思い切り狼の眉間に剣を刺し、カッ…！とそこが光る。その瞬間、魔力が膨らむのを感じた。…これが、ピウニーの魔法剣…！？と、サティがハッとした瞬間。

キャウウウウウン…！

狼が思いっきり頭を振って、ピウニー卿を放り投げた。綺麗な放物線を描いて、ピウニー卿は木に激突し、ずるずると地面に落ちる。その末路を狼は確認しないまま、キャインキャイン…！と鳴きながら、いや、泣きながら、森の奥へと帰っていってしまった。

去った狼にほっとしたサティは、すぐにピウニー卿へと意識を戻す。

「ピウニー…！」

激しく木に叩きつけられたピウニー卿は、地面の上でぐったりとしていた。目を閉じ、かくりと落とされた前足は、剣を握ってはいなかった。サティの小さな胸に嫌な予感がよぎる。

「え…やだ…ピウ…ピウニー…！死んじゃったの？…お願い、目を開けて。」

悲痛なサティの声にも、ピウニー卿は答えなかった。

００３．しょっぱい

サティの前に、小さな金色の毛皮のネズミが倒れている。
あんなに元気に動いていた耳も今は萎れ、髭も揺れていない。

ピウニー…！

綺麗な薄い金色の毛並み、黒に近い濃い茶色の瞳、まるくて小さな耳、ぴくぴくといつも楽しげに揺れている髭、Ｙの字の口元、小さな前足、短い後ろ足、ほとんど無い尻尾、ぴくぴくといつも揺れている髭（２回目）、Ｙの字の口元（２回目）。…もう動かないの？

サティの耳がしょんぼりと寝てしまった。大きなグリーンの瞳からポロリと涙が零れ落ちる。

「ピウニー…ピウニー…、ごめんね。人参取られたくらいで拗ねたりしないから。小さいってバカにしたりしないから。ほほ袋に食べ物入れてみせてよーってからかわないから。足短いって笑ったりしないから。お腹が太ましいとか、洋ナシ体型とか、言わないから。…だから…。」

すんすんと、サティが鼻を鳴らして、ピウニー卿の小さな身体にそっと顔を寄せた。

「だからお願い。…もう一度私のことをサティって呼んで。」

ピウニー卿の口元にサティの口元が触れ、ぺろりと舐めた。

「腹が太ましいとはどういうことだ、サティ。」

＊＊＊＊

「え、ピウニー…？…生きてるの！？」

「私がアレくらいで死ぬものか。」

「…ああ！…ピウ、よかった…！貴方が死んだら、私どうしようかと…！」

サティは、両手でピウニー卿の首に抱きついた。大きく息を付いて、ペロンとその首筋を舐める。

しょっぱ。

ん？

両手で？
首筋を？
舐める？
しょっぱい？

妙な違和感に、サティが眉を潜める。…眉を、潜めるって。猫に眉あったっけ？

「お、おい…サティ、待て、離れろ…サ。」

「え？」

気がつくと、サティの下には鍛え抜かれた男の身体があった。全裸

で。
抱きついているのは、男のものとしか言いようのないしっかりとした作りの首で、確かさっき、サティがそこを舐めたはずだ。いや、はずだ、ではなくて確実に舐めた。だってしょっぱかったし。
そして眼前には薄い金色の髪と、それより少し濃い色合の無精髭を生やした精悍な男の顔。凛々しいこげ茶色の瞳は、今は落ち着かなさげに泳いでいる。

「え、待って、ちょっと、なにこの、」

「サティ、頼むから、動くな。」

ピウニー卿は、一言一言区切るように、ゆっくりと言った。

ピウニー卿の上には、華奢だが細すぎるというわけでもない、まろやかな女の身体があった。全裸で。
抱きついているのは、女のものとしか言いようのないあまり筋肉のついていない腕で、自分の鍛えた胸の上には当然のように柔らかな双丘が当たっている。視線を落せば見えるはずだ。いや、はずだ、ではなくて、今ちらっと見えた。見てはない。見えた。
そして顔を少しずらすと、こちらを見ている大きなグリーンの瞳と目が合った。さらさらと自分の身体の上に零れ落ちるセピア色の髪が、肌を撫ぜてくすぐったい。

「ちょっと、今何見」

「いやいやいやいや、サティ、…だから、今、身体を離すな、見える！」

「見えるって、見ないでよ変態！」

「見えただけだ、不可抗力だろう。人聞きの悪いことを言うな、密着するな！」

「離れるのかくっつくのかどっちよ！」

「いやすまん、ちょっといろいろ事情があって、くっついても離れても男の事情がだな。…とにかく、今は、離れるな。」

「…あ、やだ、ちょ、と、腕、回さないで。」

「支えないと落ちるだろう！」

「誰がよ！」

「サティが、だ！　落ちたら地面だぞ、お前の身体が泥で汚れる。」

「なっ…」

2人の間に沈黙が下りた。思いがけないピウニー卿の言葉に、サティの顔が熱くなる。

「地面には石も転がっているし何があるか分からん。お前の肌が傷つく。だから…」

「ピウニー…。」

「だから、少し落ち着け…サティ。」

そう言いながら、ピウニー卿の逞しい腕にさらに力が籠もった。腕

に絡みつくように落ちるセピア色の長い髪は絹のような手触りで、猫の時のサティの毛並みを思い出させた。男の腕が女の背を撫で、長い髪をゆっくりと梳いていく。それはサティの心を落ち着かせていくようで、落ち着かせて…

「って、この状況で落ち着くかっ！」

「ここは落ち着くところだろう！」

「大体、なんで裸にベルトなのよ！」

ピウニー卿は全裸に帯剣用のベルトのみ着用という姿だった。ベルトも剣に合わせてきちんと大きさが変わっているのがいじらしい。まあ、逞しい身体のいい歳の男が全裸にベルトに帯剣しているのだから、なんとも言いようのない空気であることは否めない。ネズミのときも言ってみれば全裸でベルトしていたから、当然といえば当然だが。

「知らん！…私が聞きた…」

「だって、だ…、」

2人の言い合いが同時に止んだ。

サティの形のよい眉が歪む。それに気付いたピウニー卿は何故か目を逸らした。

「ピウニー。」

「気にするな。」

「気になる。変なとこに何か触ってる。」

「分かっている。とりあえず下手に動くな。生理現象だから気にするな。」

生理現象、という言葉に、サティはなぜかカチンと来た。

「ふーん。生理現象なんだ。」

「なぜそこで機嫌が悪くなる。」

「別に。」

「おい、サティ。何に怒ってる。」

ピウニー卿の腕から逃れようと、サティがガサゴソと動き始めた。

「お。おい、動くな。」

「離してよ。」

「待て。話を聞け。足を動かすな…っ、ど、どこに触っ…」

「どこにも触ってないわよ。なにこれもういやちょっとまたナニかしっかりしてきたし…。もうううう、ピウニーちょっと落ち着きなさいよ！」

「ぐっ、私は何もしていない、サティが動くからであろう！…そもそも、魔法使いなら、服とか出せんのか！」

「召喚魔法は杖が無いと無理…。」

サティの動きがぴたりと止まった。待てよ。杖無しで出来る、召喚魔法が１つあったはずだ。

「ああ！」

今、気付いた…という風に、サティがばっと身体を起こした。起こした途端、髪と身体がふるんと揺れる。ああ…、実にいい眺めだ、大きすぎず小さすぎず適度な大きさで形が。って、おい！

「サティ、身体を起こ」

「うわあああああ、見るなあああああ。」

「見せるな！」

「見せてない！」

「見えるんだ！」

「もう分かったからちょっと黙ってよ、目ぇ閉じてよ！！」

「ああ、そうか！」

その手があったか。

「杖の召喚は杖無しで出来るから、杖さえあればどうとでもできるはずよ！」

サティは、身体を起こしたままぐっと拳を作った。ピウニー卿の目には滑らかな曲線美が写る。長い髪の毛がいい具合に胸の膨らみを隠しており、段差の部分だけがちらりと見える。そんなチラ見えもまた一興。よしきた。

「よしきた、サティ、それでいこう。」

「だから、ピウニー目ぇ閉じてってば！」

「あ、ああ、すまん。」

チラ見えから我に返ったピウニー卿が目を閉じたのを確認すると、サティは呪文を唱えた。

＜イノトゥーモ・サティ・オ・イェート！＞

（サティの杖よ来い！）

…沈黙。

「ピウニー。」

「どうだ。」

「残念なお知らせがあります。」

「…。」

杖召喚の魔法は、残念ながら反応しなかった。召喚用の魔法は作動したが、なぜか自分の元に対象物がやってこない。他の呪文も唱えてみるが、結果は同じだ。

「よく試したのか。」

「試したわよ。杖以外にも、念のため服も本も道具もいろいろ！　全部！　でもダメだった。…ねえ、私達このまま歩く羞恥プレイのまま過ごさないといけないの！？　せっかく戻れたのに全裸だなんて…同じ全裸ならまだ猫とネズミの方がマシよ…。」

「おいサティ…おい、泣くな。」

元来、男というの生き物は女に泣かれるのが苦手だ。ピウニー卿も例外ではない。いつも元気に尻尾をゆらゆらさせているサティが、今、自分の身体の上で泣いている。困り果てたピウニー卿は、がばーっと自分の胸板に突っ伏したサティの髪を恐る恐る撫で、その柔らかな身体が落ちないように気を使いながら自分の半身を起こした。裸の身体を抱き寄せながら、出来る限り優しく囁く。

「お師匠の賢者殿に連絡は出来ないのか。」

「ああ！」

ふたたび、サティがばっと顔を上げた。ゴンッ！

「いだっ！　急に顔を上げるんじゃない！」

抱き寄せられていたため、顔を上げた途端ピウニー卿の顎にサティの額がクリーンヒットした。サティもそこそこダメージを食らう。顔がどんな位置にあったら、額と顎がぶつかるんだ。サティが額をさすりながら顔を上げると、そこには顎をしょりしょりとさすっているピウニー卿の精悍な顔があった。ちっか！　ものすごく近！

しかも、しょりしょりって何！　あんなにかわいかったぴくぴく動く髭が、今はむさくるしい無精髭になっているなんて……あー、うん？　割と嫌いじゃない。いや違う、そうじゃない。

しかも今気付いたのだが、何気にお膝の上にお姫様抱っこ状態になっている。全裸で。

「もう…なんで…なんでこんな状況なのよ！」

「それは…って、動くな。まて、」

「だって、見えるし見ないで！」

「見てないというのに！」

露になったあらゆるところをせめて隠そうと、サティは思わずピウニー卿の方に身体を反転させた。落ちないように慌ててピウニー卿はその身体を支えて、視線をサティから思いっきり逸らす。

改めて考えると、何なんなのこの状況。助けて師匠！

それにまた、何か変な物体があたってる！

「もう、ピウニーまた目ぇ開けてるし！話進まないし！あたってるし！…師匠！ししょーーーーー！！」

『はいはい。久しぶりじゃのう、サティや。死霊使いとの戦いぶりじゃないかのう。』

サティの声に応じたのか、２人の眼前に、デザートを食べている白い長い髭をたたえた優しげな瞳の老人の姿が、ぼんやりと浮かび上

がった。

『かわいい弟子の呼び出しに応じるのはやぶさかではないんじゃが、食後のデザートの時間は避けて欲しかったのう。それに、時と場所を考えねばならんぞ、サティや。わしじゃからまだしも、杖の賢者や剣の賢者あたりが呼び出されたら、大騒ぎじゃろうて。ふぉふぉふぉ…。』

第三者から見れば、２人は、全裸の男の上に全裸の女がお姫様抱っこ状態にしか見えない。
師匠である理の賢者から微妙な指摘をされたサティは、身体が見えないようにピウニー卿に抱きついた。

「この格好には突っ込まないでください。」

『サティよ、まずその格好に突っ込まずして、何に突っ込むのじゃ。』

「おい、ちょっとサティ、それ以上くっつくな！」

「だって、こうしないと見えるし！ピウが変な格好させるからでしょう！」

「馬乗りの方が問題あるだろうが。…くっ、だから動くな、それ以上…っ」

「やだー、ナニかあたってるってばーーーー！」

『ふぉふぉふぉ…馬乗りとはまた盛んじゃのう。わしもあと２００年ばかり若かったら…』

「いやいや、これは、違います賢者殿！」

『かまわんかまわん。多少おなごが積極的なほうが。』

「だから違うんだって、師匠聞いて！」

夜もすっかり更けていた。

００４．世界の願望と夢と希望

サティとピウニー卿は、理の賢者が手配してくれた服を身に着けて、やっと落ち着くことができた。サティの呼びかけがあった箇所に座標を設定し、理の賢者が２人分の服を転送してくれたのである。改めて、自分達のこれまでの状況を説明し終わってみると、人間に戻ってから随分と時間が経っていた。

『ほう。貴殿があの竜殺しの騎士ピウニー卿とはなあ。で、どうやらサティが口元を舐めたら元の姿に戻った…と。』

「はあ。恐れ入ります。」

「それで…ひとまず杖を召喚しようと思ったんですけど、魔法が効かなくて。」

『そりゃあそうじゃろうなあ。』

お髭の賢者は、ふむふむと髭を撫でた。説明のためにしゃべり続けた２人の喉はからからだ。それを気遣ってか、賢者が送ってくれた冷たい水で喉を潤すと、２人は首を捻る。

「どういうことですか？」

『だって、サティの杖折れとるもん。』

「え。」

『先の、死霊使いとの戦いで折れたじゃろ。』

「あ、忘れてた。」

サティがぽんと手を打った。確かに、そういう覚えがあった。死霊使いの魔法を全て封じ込めたほどの魔法は、サティの限界以上の魔力を使った。杖はサティの魔力に耐え切れずに折れたのだ。その後、サティは杖無しで死霊使いの反撃を受けたため、呪いに抵抗出来なかった。

「忘れるな！」

「だって。」

簡単な魔法ならば杖が無くても使うことができるが、魔法陣を伴う魔法や、自分で組んだある種の魔法は、杖で魔力のバランスを安全に取らなければ発動しない。持ち物召喚や転移の魔法は、かなり上級な魔法にあたる。あらかじめ杖に封じた魔方陣や術式が無ければ、簡単には作動させることが出来ないのだ。

「どうすれば…。」

『ふむ。…サティや、とりあえずわしのところに一度帰りなさい。その呪い、詳しく見てみなければ分からんからのう。杖も作り直さんとな。』

「…待ってください賢者殿。…サティと私の呪いは、解けたわけではないのですか？」

『ピウニー卿は分からんが、サティは完全には解けてはおらんみたいじゃよ？　サティの魔力は、いままでの…そうじゃの、３分の１

ほどしか戻っておらぬ。残りは別の魔力に封じられておるようじゃ。まあ、状況からいうてピウニー殿の呪いも解けてはおらんじゃろう。』

サティの呼びかけに呼応出来たのは、3分の1とはいえ、なんとかサティの魔力が残っていたからじゃ、と賢者は付け加えた。座標を設定した際に改めてサティの身体に干渉してみると、その魔力はいつものサティの3分の1。残りは別の魔力によって押さえ込まれているという。

ピウニー卿が顎に手を充てて、眉をひそめた。
自分自身も、先ほど狼に魔法剣の魔力を放ったときは、ほとんど力が発揮できなかったのだ。かつては魔竜の鱗を傷つけたほどの魔法剣の技だが、いくら自分の身体がネズミだとしても、狼を倒すどころか、泣いて退かせる程度にしかならなかった。

「そういえば、私の魔法剣もほとんど役に立ちませんでした。その影響でしょうか。」

『竜の呪いとやらがどういうものかは調べてみなければ分からんが、恐らく、そうじゃろうのう。』

「猫の姿だったときは、浄化の魔法や雷撃の魔法は使えましたけれど、…魔力が封じ込められているのに、どうして使えたのでしょうか。」

『わしらの場合は、魔力超過したときは体力を使うからのう。自分が組んだ呪文も魔力の消費が少ないものであれば、多少の無理は効くじゃろうて。』

「ああ。確かに若干…。」

疲れたかもな…と、サティが考え込んでいると、猛烈な怒りのオーラを隣から感じた。

…ピウニー卿が、猫一匹程度なら視線で殺しそうなほど、睨んでいる。サティが思わずたじろいだ。どうやらその怒りのオーラは、自分に向けられているらしい。

「サティ…。」

「な、なに、なに怒ってんのピウニー。」

「魔力超過したときは体力使うというのはどういうことだ。」

「…どういうことだも何も、その通りで…。」

「サティ！　魔力が無いなら魔法を使うな！」

「なんで、そんなに怒ってるのよ。」

「怒ってはいない！」

「いや、明らかにおこ」

「サティ！」

ピウニー卿はきわめて不機嫌だ。旅をしていたときは、サティはしょっちゅう浄化の魔法を使って自分たちの毛皮を綺麗に保っていたが、それだけのためにサティの体力を消費していたかもしれないと考えると、ピウニー卿はなぜか苛々した。

さらに何か言い募ろうとしたピウニー卿を遮って、サティは理の賢者へと視線を移す。

「師匠。それならば、私達はなぜ元の姿に戻ったのでしょうか。」

『恐らく、3分の1は魔力が戻ったからじゃの。』

「残り3分の2は？」

『戻っておらんのう。』

まだ何か言いたげだったピウニー卿も、2人の会話をおとなしく聞いている。

「師匠。…それならば、呪いの魔力の3分の1が取り払われたのは何故でしょうか。」

弟子の質問を受けて、理の賢者は再びふむりと髭を撫でる。

『古来より、真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心のこもった恋人のチッスはありとあらゆる呪いを解くものじゃろうて。』

「はい？」

「……。」

真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心のこもった恋人のチッス（注：キス）？　それを聞いた、サティとピウニー卿の表情が微妙なものになった。ピウニー卿が、若干気まずげに咳払いをする。

「えー。理の賢者殿、それは。」

「つまり…。」

『元に戻るにはちょっと中途半端なチッスじゃったということじゃの。』

「中途半端…。」

ピウニー卿がなぜか反芻し、サティはなぜかいたたまれない気分になった。えー…っと、呪いが完全に解けなかったのは自分のせいだろうか。でも急にそんな愛とか真心とか言われても…。

「ちょっと待ってください師匠。」

『なんじゃの。』

「その場合、どちらがどちらに…？」

サティの質問を受けて、理の賢者は、長い髭を撫で下ろして楽しげにふぉふぉふぉと笑った。

『そりゃあ、お互いの呪いが解けたということは、どっちからもアレじゃろうアレ。若いもんはええのう！』

「どちらも…ですか？」

ピウニー卿がハッとした顔になった。真面目な表情を浮かべ、顎に手を宛てて何かを考え込んでいる。

一方、サティはブツブツと何事かを呟いている。
そもそも、逆説的に言えば、あのときの2人のあの口元ぺろり。…キスというよりも、舐めたという表現の方が当てはまる気がするが…。そのときの自分の気持ちに、真に元に戻って欲しいという願いと、愛と、真心と、恋人、この中の、何らかの要素があった…ということになる…のだろうか。え？　いやいや。何それ。どうやら中途半端なキスをしてしまったらしい当のサティは、どういう反応をすればいいのかまったくもって分からない。

「それはつまり…。もう一度真に元に戻って欲しいという願いと愛と真心の籠もった恋人同士のキスをすれば呪いが解けるということでしょうか。」

ピウニー卿がやや真剣な顔つきで、賢者に問うた。

その間も、やはりサティは悶々と考え込んでいた。いやいや、でもちょっと待て。確かにあの時は自分の方から積極的に口元ぺろりだった。それは認めよう。主体と対象を見据えれば、サティからピウニー卿への愛だか真心だかのどれかのベクトルがアレしていると判断できるが、サティの呪いも中途半端に解けている事態から見れば、ピウニー卿からサティへの愛だかなんだかのどれかのベクトルが、あれー？

っていうか、ピウニー卿。なにどさくさにまぎれて、その質問。どういう意味？　ワンモアチャンス的な？…現実に戻ってきたサティがうさんくさそうな表情でピウニー卿を見たが、あっさりと、賢者は首を振った。

『いやいや、もう無理じゃ。変化のきっかけにはなるがのう。』

「え。」

「え。」

『え。知らんの？』

3人が3人それぞれ、きょとんとした表情になった。賢者がごく当然のことのようにきっぱりと言う。

『だって、チッスによる呪い解除のお約束は1回じゃもん。』

「なぜですか！」

『当たり前じゃよ。あれは世界の願望と夢と希望で出来た例外処理じゃし。そんな例外が何回もまかりとうとったら、わしらみたいな魔法使いいらんじゃろ。それに呪い解くのに何回もちゅっちゅちゅっちゅしてるところを見たことあるかの？…普通はそんなに何回もかからんじゃろう。1回じゃ1回。それに愛は育むもので、チャンスは1回と相場が決められておるのじゃ！』

「相場だと…。1回きりだと…。貴重なチャンスを…。くう…っ、それが世界の答えか！」

何故か、ピウニー卿が頭を抱えた。

『まあ、一度わしのところに来るがよい。詳しく見てみんことには、分からんからのう…。』

がっくりと2人は気落ちする。って、がっくりじゃないし！　サティは我に返った。元々そのつもりだったし、愛と真心と恋人がどう

のこうのという例外処理がもう通用しないからって、そこにがっくりしてどーする！

『まあ、新婚旅行じゃと思て、ゆっくりわしのところに来るとよかろ。サティや。』

「はい？　って新婚旅行！？」

『自力でおいで。』

「へ？…じりきで？」

『お前さんの座標分かるから迎えに行けるんじゃけど、ついでに杖の賢者のとこで修理中のわしの杖回収して、お前さんの杖作ってもらってからおいで。』

「えええええ！？」

『愛に障害はつきものじゃからのう！ふぉふぉふぉふぉふぉふぉ！』

「ちょ、師匠！ししょーーー！愛って、愛ってなんですか！」

『愛。愛とは試練じゃよ。修行じゃよ。ふぉーふぉふぉふぉふぉ。』

それ以上の説明が面倒になったのか、賢者は消えた。

呆然とそれを見送るサティ。

何事かを真剣に考えているピウニー卿。

やがて、ピウニー卿がぽつりと言った。

「愛、か…。」

「何よピウニー。」

「サティ。」

隣に座っていたピウニー卿の低い渋みのある声が、すぐ耳元で聞こえた。ピウニー卿は若干引き気味のサティの腕をむんずと掴むと、ずいぶん熱の籠もった瞳で見つめてくる。もう片方の手で腰を抱き寄せ距離を詰めた。腕をつかんでいた手を離して背に這わせ、サティのセピア色の髪を梳くように頭を抱きかかえる。

「あのときのサティの口付けは…、元に戻って欲しいという願いと、愛と、真心と、恋人と、どれにあたるんだ…？」

「…は？　ちょっとピウニーさん？　急にどうしました？」

「サティ、私は…。」

ピウニー卿の甘い吐息がサティに降りてきた。色めいたそれはサティにも抗い難く、２人の顔が自然と近づく。

「サティ…。」

「ピウニー…。」

どちらからともなく互いの名前を囁くように呼んで、２人の唇が触れ合

「うきゃ！」

「おうふ！」

2人の唇が触れ合う瞬間。
ピウニー卿の身体は絹のようなさらさらのさわり心地の毛皮に沈み込み、サティの身体に小さなネズミの重みがかかった。今まで着ていた服が、中身を失ってしょんぼりと地面に崩れ落ちていく。

「え。」

「え。」

『あ、言い忘れたんじゃけどもね。』

再び賢者が現れた。

『その洋服とシーツもろもろ、そこに落ちとるネックレスに入れて持っとけるようにしといたからの。』

2人は。…いや、2匹は顔を見合わせた。

「って、師匠。ししょーーーーーーーーーーー！！」

『ふぉふぉふぉふぉ…。愛じゃのう、青春じゃのう。』

「いや、青春っていう年齢じゃないですよこの人どう見てもーーー！」

「おい、サティ、それはどういう意味だ。私とてまだまだ、」

猫とネズミを残して、今度こそ賢者は消えた。

００５．起き抜けなんだから仕方が無い

「う、ん…。ピウ…ひーげ、ひげくすぐったい。」

「サティ、身体を、腕を離せ…。」

「だって、ピウの毛皮がもふもふでー……。」

いや、違う。

全然もふもふしていない。

サティのグリーンの瞳が眠たげに開く。眼前にあるのは少し硬めの色の薄い金髪で、鎖骨辺りに触れているのはしょりしょりした肌触り。そしてサティはふかふかの繊細な毛皮ではなく、妙にがっしりした硬い肩を抱え込んでいた。ちょっと待て。なんで私はこんなものを腕に抱え込んでいるんだっけ。そもそも何このしょりしょり。

我に返った。

「ピウニー！…な、なんで、にんげ、にに、人間に」

「いい加減、落ち着けサティ、ちょっと離れ…」

言われてサティは身体を離す。離れるとサティの身体の曲線がピウニー卿の視界に入った。視界に入れたのではない。入ったのである。

「いや違う、今は離すな、見える。」

「見ないでってば！」

「見てはいない！」

「もう、ちょっと朝っぱらから何か、あた、あたってるから！　ピウの変態ーーー！！」

「おいちょっと待て、そんな格好で人を抱き寄せておいて変態は無…」

「別に抱き寄せてないし！」

「いや完全に抱き寄せていただろう。それに今は朝で、男なんだから仕方が…」

「そっちの言い訳はいいからまず最初に目ぇ閉じてーーーーー！」

「あああああ、そうだったすまん。」

騎士の名に誓って見たのではない。あくまでも、見えたのだ。そもそも人の気配に目が覚めたら、こういう状態だった。それにアレとかソレとかは不可抗力。起き抜けなんだから仕方が無い。これ以上のいわれのない疑惑を防ぐために、ピウニー卿はおとなしく目を閉じた。

＊＊＊＊

「いい天気だな、サティ。」

「そうね、ほんっとーにいい天気ね。」

街道をセピア色の毛並みの猫が歩いていた。首には綺麗なグリーンの石が付いた首輪をしている。その背の上には、薄い金色の毛並みのネズミが乗っていて、小さなベルトに剣を挿していた。ピウニー卿の口元が、不満げにぴくぴくと動く。

「まだ機嫌が悪いな…。寝てる途中で元に戻ったくらいでそんなに怒らなくてもよかろう。」

「怒るわよ。1回呪いが解けたらしばらく戻れないし、戻ってもすぐには人間になれないんだから。もっと計画的に利用しないと困るでしょ！　それに、起きたらはだ…はだ…。」

「はだ…、なんだ。」

「なんでもない！ピウニー、それ以上言うと落すわよ。」

「落すわよ」というサティの声に、ピウニー卿が先制を切ってすとんと降りた。髭をゆらゆらと揺らしながらサティの横を歩き始める。背中から重みが無くなったサティは、ピウニー卿の歩幅に合わせるようにゆっくりと歩いた。怒っているならさっさと先に行けばいいのに、ピウニー卿が降りて歩いているときは、必ずサティは歩幅を合わせてゆっくり歩くのだ。その様子を見ると、ピウニー卿はとてもご機嫌な気持ちになるのだが、言葉にするとサティが怒るので、ただ髭を揺らすだけに留める。

2人が賢者と別れて1週間。こんなやり取りも、もう3回目だ。早い話が、2日に1度、こんなことをやっている。せっかく呪いが解けたと思ったとたん、再び猫とネズミに戻ってしまった2人は、こうして変身を繰り返す度に徐々にその法則性が分かってきた。

1．人間に戻るのは、2人の口元ペロリ…もとい、キスがきっかけ。
2．一度戻ると、1日のうち3分の1（8時間）だけ人間で居ることができる。
3．8時間経過で突然猫とネズミに戻る。
4．猫とネズミに戻ったあと、1日のうち3分の2（16時間）は人間に戻れない。
補足．1日の3分の1しか人間でいられないのは、自分達の体内に魔力が3分の1しか残っていないからだと推測。

自分達の状況を確認していたサティはしょんぼりと耳を寝かせた。調子に乗って人間になれば8時間経過で、どんな状況かなど関係なく猫とネズミに戻ってしまうし、16時間経ってうっかり口元ペロリしてしまうと人間に戻ってしまう。当然のことながら、全裸で、だ。

「大体、あれは私のせいではないだろう。朝、寝ぼけてサティが私の顔を舐めたから…」

「ああもう、ピウニーしつこい。」

「本当のことではないか。」

「そっちだってこの間私の口元に頭突きしてきたじゃない。」

「あ…あれは、寝返りをうっただけだ。それに頭突いてはないから頭突きではない。」

「頭突きじゃなかったら何なのよ。」

「たまたま口元が当たっただけだ。」

ピウニー卿の髭がぴーんと張って、そのあと上下にさわさわ動く。サティはふーんと半眼になった。ピウニー卿は勝手に動いてしまう髭を前足で撫でる。本当は、サティからだけではなく、自分から口元ペロリとしてみても人間に戻れるのかどうかを試したのだが、そんなことサティに言えるわけがない。ちなみに、結果は正、だった。

「む。なんだ。」

「別に。」

サティは前足で自分の顔を洗った。

2人ともこうして出会うまで、たった1人の放浪の旅だった。ピウニー卿は身体が小さいためにそれほどの距離を稼ぐことができず、グラネク山を降りるのすら、かなりの時間が掛かった。サティは王都の地下水路に逃げ込み、激しく道に迷った挙句に王都外れの森に出て街道を歩いているところを人間に拾われた。だが、話すことができる…というのがバレて、海の向こうの商人に売られそうになって逃げ出して以来、ずっと普通の猫のフリをしてきたのである。様々な人に拾われては逃げ出し、逃げ出しては拾われて、を繰り返していた。

つまりお互いこの姿になってから2人旅というのは初めてなのだ。理の賢者に会う…という、はっきりとした目標と、互いの身の上を理解し合う道連れが出来たのはありがたかった。眠るときだって、相手の毛皮があるから寒くない。起き抜けに全裸になるのは困ったものだが。

あれから、2人はひとまず王都を目指して歩いていた。理の賢者の住まいへ向かうのが最終目標だ。だが、途中、杖の賢者の住まいにも寄らなければならず、そもそも猫とネズミのまま歩いていてはいつまで経っても着きそうにない。そこで、馬か何かの手配をするために王都へ入り、事情を話せそうな人物に会うことになった。

だが、ピウニー卿は既に故人になってしまっているし、姿を現せたとしても1日8時間まで。あまり軽々しく生きている…と知られるわけにもいかない。さて…一体誰に相談するか。そこは、ピウニー卿に心当たりがあった。さすがオリアーブ国で王の信頼も厚い騎士をやっていただけある。

それはピウニー卿の弟妹だ。ピウニー卿…本名はピウニーア・アルザス…という。由緒正しい武家、アルザス家の長子だった彼は魔竜退治に出かける前に、覚悟の意味で相続権を放棄した。それに合わせて両親は隠遁し、ピウニー卿の弟、パヴェニーア・アルザスが家督を継いでいる。さらに、ペルセニーアという末の妹も居る。彼女もまた、王宮に勤める騎士だ。アルザス家に戻って彼らに接触すれば、話を聞いてくれるだろうということだった。

「弟さんと妹さんか。どんな人なの？」

「弟は恐れ多くも白翼の騎士団長を務めていて、既に結婚している。私が家を出たとき、妹はまだ結婚しておらんかったな。」

「えっ、騎士団長っ！？　すごくない？」

「恐れ多くも…と言っただろう。…そうはいっても、弟は兄の私から見ても、実力は確かだ。それに白翼は若い人間が集まっているからな。騎士団長も若い人間が選ばれたのだ。」

「そんなに若いの？」

「私より2つほど下だ。」

「…そんなに若いの？」

2回聞いた。

「どういう意味だ。」

別にどういう意味でもないです。

それにしても…とサティは視線を逸らす。視線を逸らすと同時に、耳も逸れた。ネズミと猫の気安さですっかり忘れていたが、ピウニー卿はサティですらその物語を知っている程の偉い騎士様だ。その弟が白翼の騎士団長をやっていても、別におかしくはない。よく考えるとサティにはなじみの無い人種である。こういうことでもなければ関わることもなかった人なのか…などと思うと、なんとなく面白くなかった。普段は憎まれ口を叩いているが、そういう態度を取ったら本当は失礼にあたる人なのかもしれない。でも今更態度を改めるのも違う気がして、サティは「ふーん。」とだけ言っておいた。

ピウニー卿はサティのそんな思いには特に気付かず、全く別のことを口にした。

「そうだ、サティ。弟のパヴェニーアには、気をつけろ。」

「気をつけるって何に。」

「今では落ち着いているとは思うが…。」

「だから、何が？」

「むう…まあ、会えば分かる。」

ピウニー卿が珍しく言葉を濁し、髭がなんとなく警戒するようにゆらゆら跳ねていた。

００６．機嫌よく喉を鳴らすな

とある宿場町。その町一番の高級宿の下っ端料理人は、裏口を出て賄いを食べているときに、セピア色の綺麗な小柄な猫を見つけた。短い毛並みは艶やかで、大きな瞳は宝石のようなグリーンだ。首には、瞳と同じグリーンの石が付いた細い鎖の首輪を付けている。

「にゃーう。」

「どうしたの。迷子かい？」

「にゃうう…。」

料理人の問いに、猫は耳をしょぼんと落とした。

「そうか…僕は住み込みだから、飼うことは出来ないんだけど…。あ！　そうだ、お腹空いてない？」

「にゃう！」

猫はまるで人間の言葉を解したように、尻尾と耳をぴんと立てた。動物好きの人間というのは、大概動物に話しかける。そして、自分の話している言葉が動物達に通じている様子を見ると嬉しく思うものだ。料理人は顔を綻ばせ、「よかったら、これをお食べ。」と言って、自分の食べていた賄の皿の上から、パンに肉の切れ端を挟んだ残りをくれた。

「にゃーん…。」

猫は、料理人の足元にすり…と顔を摺り寄せた。愛らしい顔で料理人を見上げると、「にゃう?」と小さく鳴いて、首を傾げてみせる。「もらってもいいの?」と言わんばかりの猫の表情を見て、料理人は思わずにへら…と微笑み、「よしよし」…と言いながら、大きな手で頭を一撫でして、首をこちょこちょしてやった。

「うなーん。」

猫は瞳を細目てグルグルと喉を鳴らすと、もらったパンをかぷりと咥えて路地裏へと消えていった。

「子供でもいるのかなー。可愛い猫だったな。でも、首輪をつけていたから…だれか飼い主が探しているかもしれないな。」

猫が去っていった方を見ながら、料理人は伸びをした。これから夕食時だ。もう一仕事、残っている。

＊＊＊＊

「せめてご飯食べるときくらいは人間でいたいわよね…。」

「むう…。確かに。だが、先立つものが無くてはな。」

「ああ…そこが問題だわ。」

サティとピウニー卿は、サンドイッチの端っこを囲んでため息をついた。猫とネズミの身体であれば、確かに食べ物は少なくて済んでいる。優しそうな人を見つけてサティがおねだりすれば、大抵の人は人間が食べるものと同じものをくれるし、それをピウニー卿と分けて食べても充分な程度に食いつなげているのだ。だが、やはり元

は人間。特にピウニー卿は騎士なのだ。きちんとした食事をきちんとした代価で食べたかった。

だが、今の2人には金がない。たかだか8時間ほど人間に戻ったところで、それは同じだ。今でこそ、服とシーツをしまっておける旅人必携の4次元ネックレス（理の賢者作成）があるが、それを売り払うわけには当然いかず、そもそも猫とネズミでは稼ぐ手立てが無い。王都に出向けばピウニー卿自身の財産があるから、早いところ旅路を進まなければならんなあと、ピウニー卿はパンと肉を小さくちぎってもぐもぐと頬張った。

「ところで、サティ。」

「ん？」

「さっき、あの男に喉を撫でられて妙に機嫌よく鳴いていたな。」

「え？」

ふん…とピウニー卿は不機嫌そうに、ほほ袋を押さえた。食べ物を租借していると、どうしてもそこに溜めてしまうらしい。

「なによそれ…。だって、噛み付くわけにはいかないでしょう。」

「噛み付けとは言ってない。あまり機嫌よく喉を鳴らすな、と言っている。」

「別に機嫌よく鳴らしてなんかないわよ。」

む…とした口調でサティが耳をぴろんと揺らす。

猫のサティが女性に懐いているのを見ると微笑ましく思うのに、それが男になるとピウニー卿は何故だかイラっとするのだ。しかも機嫌よく喉を鳴らすなど、なんともけしからん。それが猫の処世術だとは分かっていても、ピウニー卿はなんとなく気に食わない。

「とにかくだな…淑女たろうもの…」

「ピーウ！…もう、馬車とか商隊とかの話はどうなったの？　何か分かった？」

「む、サティ、聞いてるのか？」

「聞いてません。」

「聞け。」

「ピウニー…。」

サティは毛を膨らませると、声を低くして顔をピウニー卿に近づけた。一瞬たじろいだピウニー卿は、こほんと咳払いして前足を組む。サティが食料を（もらえそうな人を）物色している間、ピウニー卿は高級宿の厩や食堂などに入り込み、聞き耳を立てて情報収集をしていたのだ。

「明朝、王都を目指す商隊があるそうだ。1隊はヴィルレー公爵領から出ている。それに乗れば安心だろう。」

「公爵家？　そんなえらい人の商隊に乗っていいの？」

「よくはないが、仕方あるまい。荷も大きいだろうから、我ら2人

程度、奥深くに潜れば分かるまいよ。」

それに公爵家直属ともなれば、それなりにしっかりとした警備体制のはずだ。食べ物だけはこっそりと盗まなければならないのが気が引けるが、ここから王都まで馬車で行けば3日もあれば着く。その間、猫とネズミの分の食べ物くらい、拝借しても罰は当たらない…と思いたい。

「公爵様って、ピウも知っている人？」

「いや。知り合いというわけではない。見かけたことがあるくらいだな。私は王宮にはほとんど居なかったし…。野心の無い穏やかな人物だとは聞いている。まだ若いが、宮廷の政（まつりごと）からは一歩退いて、今は王太子の教育係だとか、そういった職についていたはずだ。」

サティ自身はオリアーブの魔法研究所によく出向いていたので、王都に行ったことがないわけではない。もっとも、魔法師団に所属しているのではなく、あくまでも理の賢者の使いとして協力していただけだ。世間話や噂程度なら知っているが、宮廷や騎士団に関わったことがあるはずがなく、ありていに言えば興味が無かったため、さほど宮廷事情に詳しいわけではなかった。

公爵の名前は、ヴィルレー公爵という。サティも、名前程度なら聞いたことがあった。

オリアーブ国は現在、国王のジェレシス・オリアーブによって統治されている。白翼・黒翼という2翼からなる屈強な騎士団と魔法師団で構成された平和な国だ。三方が山、一方が海という立地に恵まれ、他国から侵略の危機に晒されることもあまり無い。もっとも、近年増加した凶悪な魔物の存在によって戦争どころではない…とい

う一面もある。国同士の小競り合いは無いが、騎士団は魔物の討伐に派遣され、魔法師団は有効な魔法剣や術式を開発するために忙しかった。

国内で魔物が出現してもよく統治された騎士団がすぐに駆けつけ、魔法師団の協力によって効果的に魔物を討伐している。先王から仕えている宰相の手腕により、それまで付かず離れずだった騎士団と魔法師団の協力体制が敷かれ、互いに交流しその技術を役立てるようになった。

それに1年前、ピウニー卿の退治した魔竜がグラネク山の麓の村や町を襲った記憶はまだ新しい。あの事件により一層騎士団と魔法師団の結束は固くなり、各地の守りは強固なものになっている。

そのオリアーブ国の現国王の従兄弟に当たるのが、ヴィルレー公爵だ。彼は非常に穏健な人物で国王からの信頼も厚い。歳の頃は４０にも満たず、宮廷に入ってもこれからという若さだったが、妻を亡くしてからというもの、政は宰相に任せて、再婚もせずに静かな生活を送っていた。それでも、国王に請われて領地には戻らず王都に邸宅を構え、国王の息子…ジョシュ・オリアーブの教育指南役という地位に着き、王子付きの教師団を取り仕切っている。王族といえど学校に通い、同じ年頃の子らと共に勉学に勤しむのが本来なのだが、現在国王の息子は病がちで王宮に臥せっているという。このため、ヴィルレー公爵が各方面の信頼の置ける教師を手配し、王子の教育を行っているのだ。

「その馬車に乗っていけば、恐らく王都の公爵宅まで行けるはずだ。王宮にも近いだろう。」

「王宮に近くていいの？　ピウの家は？」

「私の家も遠くはない。武家といえど、一応伯爵の地位をいただいているからな。」

「え。」

「なんだ。」

「世が世なら、ピウニー卿は伯爵様だったの…？」

サティの頭の毛が逆立ち、耳が警戒するように後ろを向いた。

「それがなんだ。」

確かに、竜の討伐がなければ、ピウニー卿が家督を継ぎ、アルザス伯爵となっていたに違いない。だが、ピウニー卿は竜の討伐が決まってから、弟に家督の相続権を譲っているし、自分が伯爵の地位に就いたことはない。身分的には一介の騎士に過ぎない。今更サティに貴族様扱いされて、２人の距離が開くのも気に食わない。ピウニー卿の耳も後ろにぺたりと寝てしまった。だが、サティは何故かフ…と鼻で笑ってぼそりと呟いた。

「裸で抱きついてくるくせに貴族様とか…。」

ぴこーんと２人の耳が同時に前を向いた。

「…だーかーらっ、それは今は関係なかろう！…ともかく、家督はパヴェニーアが継いでいて、私は伯爵なんぞではないのだ。」

ピウニー卿はサティの眼前で短い前足を組んだ。

「そもそも人間になったときに裸なのはお互い様だろう。第一いつも抱きついてきておるのは、サティではないか。」

その言葉に、サティはつーんと顔を逸らす。長い尻尾がきょろきょろと動いて地面を叩いた。

「別に抱きついてないもん。」

「抱きついておる。」

「抱きついてません。」

「ほほう。まあいい。じゃあ、そういうことにしておいてやろう。」

「なによそれ。」

「別になんでもないが？」

何故かご満悦のピウニー卿に、サティはなんだか敗北したような気分を味わった。誤魔化すように頭をふるふると振り、座っていた身体を起こして伸びをする。

「もう、こんなこと言ってる場合じゃないでしょ。早く馬車のところに行くわよ。その馬車どこ？」

ピウニー卿はサティとの変わらぬやり取りに、満足げに髭を揺らしていたが、さっさと歩き始めたサティを追いかけるとその歩幅が緩まった。相変わらず、自分の歩幅に合わせて歩くサティを見るのは、何故か心が浮き足立つピウニー卿だった。

００７．出たとか出ないとか

「おい…。また変な声が聞こえなかったか？」

「気のせいだろう。これは由緒正しいヴィルレー公爵の商隊だぞ？幽霊なんぞ憑いているわけが…。」

野営をしていたヴィルレー公爵付きの商隊の見張りの兵士は、この2日ほど、夜中になると商隊の荷から女の声が聞こえてくるという噂にびくびくしていた。この兵士は、お化けとか幽霊とかそういった話が苦手なのである。今日は最後の夜。幸いなことにいまだに噂の女の声は聞いていない。それなのに、さっきから相方の兵士が聞こえただのなんだのと、恐怖心を煽るようなことばっかり言っているのだ。あーあーあーあーあ。あれは、ただの噂。きっと気のせい。前立ち寄った町までは、そんな噂は出てこなかったし。

だが。

「ほら、また…おい、ヤバいんじゃねーのか…。」

相方の兵士が、隣で緊張する気配が分かる。

「だから、気のせいだって、俺には聞こえな…」

『…うぅ、ん…。』

兵士の耳にも今度は確かに聞こえた。微かだが、若い女のため息のような切なげな声だ。相方が、びくっと肩を震わせ後ずさりする。

「お、…おい、お前ちょっと見てこいよ。」

「…は？　なんで俺が？」

「いいから見て来いって…！」

「嫌だよ！　お前行けよ。」

「…くっそ、じゃあ一緒に…。」

相方は嫌がる兵士を引っ張って、高級な荷物が置いてある幌の帳をそっと開く。

『…ピウー…』

何、今の！

ピウーってどういう意味！？　擬音？　鳴き声？
果たして言葉なんだかよく分からない声が聞こえ、２人は顔を見合わせた。

『…わたしはへんたいではない…。』

今度ははっきりとした言葉だ。だが、先ほどの女の声とは違い、低く渋い声だった。重低音の響きは只者の声とは到底思えない。
兵士は思わず「はいぃ！　変態ではありません！　変態ではないですから許してください！」…と平伏しそうになるのを堪え、２人抱き合ってがたがた震えていると、

コン。

小さな小さな音が響いた。その後、パタンパタンと何かが倒れる音が近づいてくる。公爵の荷馬車といってもそれほど大きいものではない。その音はすぐに2人の側まで来た。その眼前に、どさりと小さな塊が倒れこむ。

「デターーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「ギャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

2人の目の前にかくんと現れたのは、どうやら綺麗な人形だった。平常時なら愛くるしいその姿。だが今はスカートが荷に引っかかって逆さ吊りで、寝かせれば眼が閉じるという（余計な）仕掛けが施されているせいか、逆さまの状態では何故か白目を剥いていた。

＊＊＊＊

3日ほど馬車に揺られると、ピウニー卿とサティは無事に王都に到着した。

その間、2人は実におとなしくしていた。隊員の食料を置いている幌に潜めば食べ物にも事欠かず、寝るときは運んでいる荷物の中でも一番高級な荷に移ると、ほとんど手も出されない。身分の高い家の商隊だけあって、安全な場所も通り護衛もばっちり。休憩も十分に取り、強行軍ということもなかった。寝ぼけて口元ペロリが無いように、お互い離れて眠っていたことも功を奏して、思いがけない場所で人間に戻ってしまう…ということもなかった。途中、見張りが何か恐ろしいものを見たらしく、出たとか出ないとかいう叫び声で眼が覚めたことがあったが、見張りの人の見間違いということで処理されたようだ。

「何か怖いものでも見たのかしら…」とサティが首を捻ってると、
「ううむ。私はそういうものは見ない性質だから分からんな…」とピウニー卿は髭を撫でた。

＊＊＊＊

「荷物が届いたのね！…人形も届けたって。どんな人形かしら。」

「こら、悪戯をしてはいけないよ、セラフィーナ。」

「もちろん分かっているわ、お父様！」

ヴィルレー公爵の邸宅に商隊の馬車が着いたのはその日の午後だ。領地からの交易用の荷はそれなりの場所に送られたが、1台だけ公爵の個人的な荷などが載せられた馬車があり、それは直接公爵の王都邸宅の敷地に乗り入れられた。ピウニー卿とサティは、その馬車に乗っていたのだ。一番高価な荷物が入っているから、恐らくこれで間違いないだろうというピウニー卿の判断による。

息を潜めて外をうかがっていると、小さな女の子の声と爽やかな男性の声が聞こえた。恐らくヴィルレー公爵とその令嬢だろう。幌の布に頭を突っ込み、隙間からそっと外を覗いてみると、そこには薄い赤金色の髪にグレーの瞳を輝かせた少女と、端正な顔に優しい微笑を浮かべた男が荷物を迎えていた。男の方がヴィルレー公爵だろう。彼は、女の子…セラフィーナと呼ばれていた…に目を配りつつ、商隊長からの簡単な報告を受けている。

「幽霊…？」

「ええ。昨日の晩になりますが、女の声と男の声が聞こえたとかで…。」

「この荷から？」

「はい。」

ヴィルレー公爵は、怪訝そうに馬車の幌に目を向けた。ピウニー卿達の視界からセラフィーナが消える。

「こら、フィーナ！　幌に入ってはダメだ、何があるか分からないから…！」

ピウニー卿とサティは思わず顔を見合わせた。それとほぼ同時に、不規則な小さな足音が聞こえてくる。

「まずい、サティ…隠れ」

ピウニー卿は、身体の大きさを上手く生かして荷物の隙間に忍び込んだ。サティも荷物の影に隠れようと頭を下げる。そのときだ。「きゃあ！」という可愛らしい声が聞こえて、サティの身体がふわりと浮いた。

「フィーナ！」

すぐさま、大きな足音が続く。サティを抱き上げたのは公爵令嬢だったらしい。セラフィーナの横に身を低くしたヴィルレー公爵がやってきて、少女の肩を抱き寄せた。サティは、荷物の隙間からこちらを伺うピウニー卿にふるふると首を振る。こんな小さな女の子に、爪だの牙だの立てられるはずがない。

「サティ、私がそちらに行く。」

「にゃう。にゃーーーう。」

ピウニー卿の声が周囲に聞こえないように、サティは鳴き声を上げた。それを聞いてピウニー卿は頷き返し、荷の隙間に戻っていく。

一方、ヴィルレー公爵は腕の中の娘を確認した。自分の方を振り向いた娘の顔は期待に満ちて輝いている。その小さな腕の中では、セピア色の綺麗な小柄な猫が毛を逆立てて、緊張したように四肢を突っ張っていた。

＊＊＊＊

「ねえ、お父様！　この子、飼ってもいいでしょう？」

「いや…こんな綺麗な猫…？しかも、首輪をしているし…。」

セラフィーナとヴィルレー公爵は既に幌から降りている。セラフィーナの腕の中で、猫は相変わらず四肢をピンと伸ばしたままだ。大きなグリーンの瞳はまん丸で、瞳孔は開きっぱなし。相当緊張しているのだろう。だが、暴れてはいない。ヴィルレー公爵は恐る恐る手を伸ばしてみる。「旦那様！」執事が咎める声が聞こえたが、猫一匹のことだ、大人1人が引っ掻かれたとてそれほどのものではないだろう。ヴィルレー公爵が手に取ったのは、猫の首にかかった金色の鎖だ。首輪のようにかかっているそれには、見たことも無い綺麗な、…猫の瞳によく似たグリーンの石がぶらさがっていた。毛並みも美しいし、到底野良猫ではないだろう。だが、野良猫ではないとしたら、誰かの飼い猫ということになる。しかも、一般庶民では

ない、恐らく富裕層が飼っている猫なのではないかと思われた。

「猫？…どこから入り込んだんでしょうか。」

いつのまにか商隊長が近くまで来て、首をかしげている。ヴィルレー公爵、執事、商隊長。大人３人が猫を見て頭を悩ませている様子に、セラフィーナは猫の脇腹を持って手を伸ばした。

「とってもいい子よ、この子！　大人しいもの。」

確かに猫は大人しかった。それでも、いつ爪や牙が娘に引っ掛かるかもしれない。ヴィルレー公爵は猫を捕らえようと手を伸ばした。途端に猫の毛がぶわわと逆立ち、それを見たセラフィーナが、ぷいと他所を向く。

「ダメ！この子、お父様のこと怖がってるわ。」

「フィーナ、待ちなさい。その子は他所の家の猫かもしれない。きっと飼い主が探している。」

ヴィルレー公爵が言った途端、セラフィーナが迷ったように父親を見上げた。

「その子も飼い主のことを探しているかもしれないだろう。返さないと。」

「だったら…だったら、見つかるまでフィーナがこの子のママになってあげるわ！」

「ママになる」という言葉に、ヴィルレー公爵の手が躊躇った。そ

の隙に、セラフィーナがたたたと駆けていく。ヴィルレー公爵は執事へと頷く。執事も心得たように頷いて、セラフィーナの後を追った。

「かまいませんので？」

「あれほどの猫だ。…別の飼い主が探しているというのは間違いないだろう。」

「そのことですが…。」

商隊長が少し考え込んだように言葉を続ける。荷の確認は常に行っているが、荷を全て一度降ろした確認は3日前に立ち寄った大きな宿場町でのことだ。そのときには、猫の姿はどこにもなかった。あのような猫が街道の途中で迷い込むということはないだろうし、恐らくその宿場町で迷い込んだのではないだろうか、と。

話を聞いたヴィルレー公爵は、ふむ…と考え込んだ。

「なるほどな…。仕方が無い。その宿場町に連絡をして、こういった猫を探している飼い主はいないかと聞いてみてくれないか？　もし飼い主が見つかれば、今度の商隊が出かけるときに連れて行ってくれ。もしいなければ、…セラフィーナが気に入っているようだし、うちで世話をしても構わないだろう。」

「…わかりました。」

指示を出したヴィルレー公爵は苦笑して、セラフィーナが走っていった方に目を向けた。

「それにしても、…ママになる…か。」

ヴィルレー公爵が妻を亡くして6年になる。セラフィーナはほとんど母親の姿を覚えていない。公爵家という恵まれた環境で、良き家人に囲まれてもいる。我侭に育ってもおかしくはなかったが、ああ見えて聡い。何故自分に母はいないのかという子供ながらの素朴な疑問も、空気を読んで言わないようになってしまった。その娘が「ママになる」と言った言葉は、何故かヴィルレー公爵の胸に深く残った。

こうして、ヴィルレー公爵家に商隊の馬車が到着したのだが、小さな金色の毛並みのネズミがセラフィーナを追って家の中に入ったのを、見咎めるものは誰も居なかった。

＊＊＊＊

「ねえ、君はなんていう名前なの？」

「にゃ…にゃーん…。」

サティはセラフィーナという公爵令嬢の部屋で、毛並みを撫でられていた。爪を立てればあの場は逃れられたのだろうが、この小さな少女にそんな粗相はできなかった。思わず大人しく連れてこられてしまったが、…ピウニー卿は大丈夫だろうか。隙を見て探しに行かなければ。そう思うのだが、セラフィーナはぎゅっと自分を抱きしめたまま、なかなか離してくれない。

毛皮を撫でられていたサティは、セラフィーナに顔をむに…と両手で挟まれた。セラフィーナはサティのグリーンの綺麗な瞳を覗き込み、うっとりと微笑む。

「綺麗なグリーンの瞳！　貴方のことはグレンって呼ぶわ。」

「にゃ…にゃー…。」

「グレン？　喉が渇いた？　お腹すいた？…何か持ってきてあげるわ、いい子で待っていて！」

セラフィーナはサティをソファに置くと立ち上がり、執事の名前を呼びながら部屋を出て行った。サティはほっと一息つく。だが、すぐさまソファから立ち上がり、床に降り立った。そっと扉に駆け寄り、ぐいと扉を押してみる。幸いなことに、きちんと閉ざされていなかった扉は開いた。柔らかな肢体を隙間にくぐらせ、サティはゆっくりと廊下を見回した。

さすがに公爵家の邸宅となれば広い。ピウニー卿は、「私がそちらに行く」と言っていた。サティは頭をきょろきょろとさせた後、身を低くした。ピウニー卿の姿を探す。いつもは憎まれ口を叩いているが、旅路の間ずっと一緒に居た。その小さな身体が見えなくなるのは、妙に不安だった。

「…サティ…こっちだ。」

サティの耳が声の方向に揺れた。

廊下には誰も居なかったが、掠れたような男の声が聞こえる。サティは廊下の片方に視線を向けた。そこには布を張ったベンチが置かれていて、その足元にちらりと薄い金色の毛並みが見える。サティは迷わず駆け寄った。

腰に佩いた剣が間違いない、ピウニー卿だ。

ピウニー卿は、サティがセラフィーナに連れて行かれたと同時に幌を出て、茂みから茂み、物陰から物陰へと伝い渡り、セラフィーナの後を追いかけたのだ。扉を閉められたのには焦ったが、窓の隙間から身体を潜らせるとなんとか邸内へと忍び込むことができた。後は執事や侍女達の動きを追って、セラフィーナが入っていった部屋を突き止めたのである。皆、セラフィーナとサティに気を取られ、ネズミ一匹の侵入には気付いていないようだった。

「…ピウニー…！」

サティは思わず顔を寄せた。ピウニー卿もその鼻に駆け寄ろうとして、ハッと気がつき思わず避ける。

「ま、待て、ここで変身するのは不味い。」

その声にサティの動きも止まり、仕方なく頭を低くしてごつんと頭突きをした。ピウニー卿のふくよかな体がごろんと後ろに転がる。

「よかった。無事で。…ピウニー…。」

「ああ、サティ…。む、…待て。」

サティの声に思わずピウニー卿の声が熱くなる。だが、すぐさまトーンを落とした。廊下の角からヴィルレー公爵の手を引いたセラフィーナが現れたのだ。後ろには、両手に何かを持った執事がついて来ている。ベンチの足元に顔を突っ込んだサティを見つけたのだろう。セラフィーナが駆け寄ってきた。その距離が詰まる前に、ピウニー卿はサティの口元を前足で撫でて、行け、と押し出す。

「サティが出てきた部屋。あそこに居る。」

サティの瞳が何か言いたそうに揺れたが、小さく頷くと顔をベンチから離した。

「なあに、グレン、何か見つけたの？」

「にゃーん…。」

サティは、セラフィーナがベンチの側に来る前にその足元に駆け寄って、すり…と頭を摺り寄せた。初めて見せる猫の懐いた姿に、一気にセラフィーナの顔が綻ぶ。それ以上ベンチの下を覗き込むこともせず、セラフィーナはサティを抱き上げた。

「ふふ。お腹すいたでしょう。ご飯にしましょう。」

「にゃ…。」

セラフィーナの腕の中で、少しだけ切なげにサティは鳴いた。その仕草にくすくすと笑いながらセラフィーナは部屋に入り、娘の様子に瞳を細めたヴィルレー公爵と執事が後に続く。

既にベンチの足元に、ピウニー卿の姿は無かった。

００８．大人しくしておいてね

夜。どうしても一緒に寝たいというセラフィーナを侍女たちが嗜め、枕元に猫用ベッドをしつらえてくれた。ようやく大人しく眠ったセラフィーナを見て、サティはほっと一息つく。すとんと床に降り立ち周囲をきょろきょろ見渡すと、「…サティ…。」トーンの低い、落ち着いた男の声がベッド下から聞こえてきた。サティは振り向き、そちらへと頭を寄せる。

「ピウニー…！」

「ようやく落ち着いたようだな…。」

「うん。ごめん、なかなかあの子、離してくれなくて。」

「ああ。」

「お腹空いてない？　こっち来て。」

サティが頭を下げると、ピウニー卿がそれに乗った。ベッド脇に置かれたサティの餌箱のところに来て、ピウニー卿を下ろす。サティに与えられた餌は、人間の食べるものとほとんど変わりが無い。さすが公爵家といえるが、味付けは薄かった。サティは自分だけが食事をするのも気が引けて、食べ物をほとんど口にしていない。セラフィーナは心配していたが、猫はこういうものですよ…と執事のフォローで無理やり食べさせられるのだけは避けられた。ピウニー卿は両前足で野菜を持って、もぐもぐしゃくしゃくと食べている。サティはすぐに食べ終わると、ピウニー卿の側で身体を丸くした。食事を終えたピウニー卿は、いささか元気の無いサティの喉元の毛皮

に背中を預ける。その様子に尻尾を振りながら、サティはため息をついた。

「…明日にでも脱出できるかしら。」

「そうだな…。昼間は人の出入りが多いから、明日の晩まではここに居たほうがいいだろう。」

「経路は？」

「私の通れるところは確認できた。ここまで入ってきたところを辿ればサティでも戻れるだろう。」

「分かった。明日ね。」

「ああ。」

「ううん…。」

不意に、小さな子供がむずがるような声が聞こえた。セラフィーナが寝ぼけているのだろう。サティとピウニー卿の耳が、ぴくりと動いた。サティが顔を起こして、ベッドの方を見る。

「セラフィーナ、寂しがるかな。」

「……そうだな。」

セラフィーナはあれからずっとサティにかまいっぱなしだった。どう扱っていいのか分からないらしく、そっと撫でたり瞳を覗き込んだりするだけだったが、サティが思わず頬をすりと摺り寄せると、

それは嬉しそうに微笑む。それを見ている執事や侍女達の瞳も温かく、何よりそんなセラフィーナの頭を撫でるヴィルレー公爵の瞳はとても優しげだった。サティには、それが眩しい。

サティには血の繋がった家族というものが居ない。田舎の小さな教会で、孤児として育てられていた。一番古い記憶が、師匠である理の賢者が自分を迎えに来た時のことだ。あの頃から、理の賢者は優しい髭のおじいさんで、師匠の家には門外不出の不思議な奥方と、生まれたばかりの娘さんが居た。サティはそこで育ったのだ。サティにとって家族というのは、その3人だった。いわゆる絵に描いたような普通の家族がよかったなどと思ったことはないが、どういうものだろうという気持ちもなかったとは言えない。だが、そんな風に思うことは、幸福に育ててくれた師匠に失礼なような気がして、普段は決して表情に出すことは無かった。ヴィルレー公爵とセラフィーナを見ていると、そういう微妙な心の琴線に、触れる。

「サティ？」

しょんぼりと耳を寝かせてセラフィーナを見ていたサティに、ピウニー卿が声を掛けた。

「うん？」

「どうした。ぼーっとして。」

「ん、なんでもない。」

情でも移ったか、と言い掛けて、ピウニー卿は止めた。代わりに別の言葉を紡ぐ。

「完全に人間に戻れたら、」

「ん？」

「訪ねてみることくらいは許されるだろう。」

ピウニー卿の家も伯爵家だ。公爵家とは格も位も違うが、ご機嫌伺いくらいできるだろう。そしてそれくらいのささやかな、貴族の特権を行使する程度ならば、家名を継がないピウニー卿にも許されるはずだ。人間に戻った暁に、死んだはずのピウニー卿の立ち位置がどうなるのかは分からないが、一晩の宿と食事を貰った恩もある。弟のパヴェニーアもそれくらいの世渡りならばできるはずだ。

「早く、パヴェニーア達と合流しよう。」

「そうだね。」

ピウニー卿は、サティがセラフィーナを可愛く思っていることに気付き、どうやら気を回しているらしい。サティは小さく喉を鳴らして、頭をピウニー卿にそっと摺り寄せた。…人間の時には絶対にやらないくせに、サティは猫になったときだけ、このように妙に人懐っこい。

「サティ。私は、あの棚の下辺りに隠れておく。」

「うん。私もできるだけこの部屋から出ないようにするね。」

「無茶はするな。」

「分かってる、ピウも。」

サティはピウニー卿に頷くと身を翻す。とん…と床を駆けてセラフィーナの枕元に戻った。起きていないかな？とサティはセラフィーナの顔を覗き込む。

「…ん、…グレン…遊ぶ？」

セラフィーナはうふふ…と笑って、寝返りを打った。サティは肩まで落ちたシーツを咥えてセラフィーナの首元までそっと引き上げ、前足でてしてしと軽く叩いて調えた。それから用意された猫ベッドで丸くなると、すぐに眠りに落ちていった。

＊＊＊＊

「セラフィーナ、準備は出来たかい？」

「うん。この格好、おかしくない？」

「とってもかわいいよ。」

くるりと一回転してみせるセラフィーナは、小花柄の刺繍を施したアイボリーのジャンパースカートに、生成りのブラウスを合わせている。ブラウスの首周りには、ふんわりと大きなリボンタイが結ばれていて、リボンの端にはチュールレースがあしらわれていた。髪は半分だけ結い上げて、ブラウスのリボンタイと同じ造りのリボンを大きく飾っている。どこから誰が見ても愛らしい公爵令嬢だ。

翌日、朝からサティと遊んでいたセラフィーナだったが、昼が近くなってくると急に身辺があわただしくなり、着替えやらお風呂やらで侍女達に囲まれていた。どうやら、ヴィルレー公爵が王宮へ上が

るらしく、王太子のご機嫌伺いにセラフィーナを連れて行くらしい。サティはヴィルレー公爵と共に、セラフィーナの様子を見ながら、尻尾をぱたんと揺らす。

セラフィーナはサティを連れて行きたがったが、それはさすがにヴィルレー公爵に窘められた。

「フィーナ、今日はジョシュ殿下のお見舞いなんだよ。」

「分かってるわ。ジョシュもきっとグレンを見たら元気になると思うの。」

「…フィーナ、確かにグレンは可愛いからジョシュ殿下もお喜びになるかもしれないね。でも、病気の方のところに動物を持っていくのはよくないな。」

「グレンはとても綺麗なのに？」

「うん。お城にはたくさんの人がいるだろう？　猫が嫌いな人もいるかもしれない。そういう人にグレンが捕まってしまったらかわいそうだ。」

「そうね…。」

セラフィーナはしょんぼりと肩を落とし、ソファでくつろぐサティを振り向いた。その額をくすぐり、寂しげな顔をしている。

「グレン、お留守番しておいて？」

「にゃ。」

サティは返事をしてみせた。その声に、パッとセラフィーナの顔が明るくなる。

「お父様！　グレンは私の言うことが分かっているのかしら。返事をしたわ！」

「そうだね。とても賢い猫かもしれない。」

返事をした…というのは、もちろんヴィルレー公爵には信じられなかったが、それでも愛娘の嬉しそうな顔に思わずつられて微笑んだ。ヴィルレー公爵は、サティの頭を撫でる。

「グレン、大人しくしておくんだよ。」

「にゃーん。」

ヴィルレー公爵の手にサティは再び答えて見せた。その様子を見たヴィルレー公爵は首を傾げている。なるほど、確かに返事をしたように聞こえた。昨日、少し遊んだだけだったが、グレンはセラフィーナにどんなに触られても爪も牙も出さなかったし、本当に賢い猫なのかもしれない。ヴィルレー公爵は立ち上がり、セラフィーナに鞄を渡した。とても大きな鞄で、昨日届いた歴史の本を入れている。王太子に見せると約束をしているそうだ。セラフィーナはいつもこの鞄を誰にも持たせず自分で持っていた。

「さあ、行こう。」

「はい。グレン、また後でね。」

「にゃん。」

サティはほっとした。ソファに立ち上がって、再び尻尾を振る。ヴィルレー公爵に手を引かれたセラフィーナ、そして侍女達も外に出たのを見計らって、サティはすとんと床に下りた。

＊＊＊＊

「ピウニー。」

「サティ、大丈夫か。」

「ピウニーこそ。」

「私は、じっと待機しているだけだからな。」

「私も別段フィーナに構われているだけだから。」

…とはいえ、ずっと猫のフリをしていてサティは若干ぐったりしていた。酒場でネズミ捕りの番をしているときは、特に酒場の主にかまわれるということもなかったので、ここで始終セラフィーナの相手をしているのとは格段に違う。ピウニー卿が潜んでいる棚の足の側で身体を丸めると、尻尾をぱたりと動かした。ピウニー卿もそれに答えるように、サティの丸まった喉元に身体を埋め、そこを撫でてやる。

商隊にくっついて移動しているときと昨晩と離れて眠っていたので、久々に感じるサティの毛皮と喉元の温かさが心地よい。サティもピウニー卿の毛皮のふわふわに思わず瞳を閉じる。だが、次の瞬間２人の身体がぴくりと動き、立ち上がった。

「グレン！」

セラフィーナが戻ってきたのだ。

セラフィーナは棚の足元で丸まっているサティを見つけると駆け寄ってきた。しゃがみこむと、鞄を開け唇に人差し指をあてる。

「静かに。グレン、入って！」

サティの毛皮がぶわわと逆立った。鞄に入るように促され、足を突っ張って踏ん張る。だが、セラフィーナはサティの身体を抱き寄せるように鞄へと招き入れた。セラフィーナが外を窺っている隙を狙って、とっさにピウニー卿が鞄の中に入る。前足を上げて、躊躇うサティへ合図を送った。「ピウ！　本気！？」かろうじて声には出さなかったが、グリーンの瞳で怪訝そうにピウニー卿を見る。ピウニー卿はその瞳を見て、しっかりと頷いた。サティは観念したように鞄に顔を突っ込む。

「フィーナ、忘れ物はあったのかい？」

「はーい、今行きます！　…グレン、大人しくしておいてね？」

恐らく、ひっくり返らないように大事そうに抱えているのだろう。それほど無茶な体勢にならなかったのが幸いした。ピウニー卿とサティを入れた鞄を持って、セラフィーナはヴィルレー公爵の元へ急いだ。

００９．クマみたいな人が追いかけてきてる

オリアーブ王宮の王子の宮で、ジョシュはソファでセラフィーナと並んで座っていた。ヴィルレー公爵は国王と会見するために席を外している。今は侍女も下がらせていた。

「よく来たね、セラフィーナ。」

「ジョシュ、お加減はどう？」

「うん。今日はだいぶ調子がいいんだよ。フィーナ、今日は…」

「あのね、ジョシュ。ジョシュに見せたい子がいるの。」

「見せたい子？」

ジョシュは、自分の学術指南役であるヴィルレー公爵の一人娘、セラフィーナのことをとても可愛がっている。

ジョシュは１２歳。オリアーブの王太子である。そういった身分でありながら、ジョシュは身体が弱い。少し無理をするとすぐ熱を出してしまうし、激しい運動をすると眩暈を覚えた。特に、怒りや不安といった情緒が体調に影響を与えるため、常に気持ちを静めて生活しなければならない。周囲は何も言わないが、恐らく将来は危ぶまれているだろう。…にも関わらず、オリアーブ国王にはジョシュ以外の子が居らず、世継ぎとしての責任は今のところ彼１人にかかっている。

ジョシュは利発で才気溢れる王太子ではあったが、机上の勉学以外

で、剣術や馬術、魔法など、王として必要な訓練を受けることがほとんど出来ていない。まだ子供であると甘えられる年齢もギリギリで、そろそろ王太子として国王の執務を手伝い、周囲に認められなければならない時期だ。だからこそ、周囲の人間は必要以上に厳しかったり、必要以上に腫れ物に触るかのような扱いをしてくる。国王ですら、ジョシュのことをどう扱っていいのか図りかねているようだった。

加えて、現在国王の妃は…ジョシュを生んで以来待望といってもいいだろう…懐妊していた。王妃に男子が生まれ、そして自分の身体が強くならなければ、恐らく自分は王太子ではなくなる。ジョシュは、もし弟ができれば王太子の身分は譲って自分は補佐として立ってもいいと思っているが、周囲はどう思っていることか。身体の弱い自分を傀儡にしたがる貴族は多いだろうし、王太子としては役に立たぬと排斥したがる貴族もまた、いるはずだ。王太子としては繊細すぎ、普通の子供としては高貴すぎるのだ。

気の休まらない毎日の中で、ヴィルレー公爵と過ごす勉強の時間と、時々自分を見舞いに来てくれるセラフィーナとの時間が、ジョシュはとても好きだった。

「グレン、出ておいで。」

セラフィーナがいつもの大きな鞄を開けると、そこから辺りを伺うように、セピア色の小柄な猫が顔を出した。予想外の小さな客人に、ジョシュは思わずセラフィーナと猫の顔を交互に見る。

「猫？」

「グレンというの。」

「フィーナ、ヴィルレー公爵のお許しは貰ったのかい？」

セラフィーナはジョシュの言葉に少しだけ気まずそうに、ふるふると頭を振った。その様子を見て、ジョシュは驚く。

セラフィーナは7歳で天真爛漫にも見えるが実はしっかりした性格だ。自分が教える勉強のこともよく覚えているし、順序よく物事を考えて答えを出すことも知っている。だから、まさかヴィルレー公爵に黙って、自分のところに猫を連れてくるという無茶をするとは思わなかった。

「ジョシュ、ずっと前に小さな動物を飼ってみたいって言ってたでしょう？」

「覚えていたの？」

セラフィーナは頷いた。確かにジョシュは、乗馬などの訓練があまりできず動物に触れる機会がない。雑談交じりに、小さな動物だったら自分にも飼えるだろうかとちらりと言ったことがあるのだ。本当にちらりと言っただけなのに、セラフィーナは覚えていたようだ。ジョシュは苦笑して、猫に手を伸ばした。そっと触れてみると、猫の毛皮は思ったよりもすべらかで心地よい。耳の後ろを撫でてやると、ごろごろと喉を鳴らした。それにしても…、勝手に動物を王子の自室に持ち込むとは、全く褒められたことではない。

しかも今日は…。

「グレン…、しばらくこの部屋で大人しくできるかい？」

「ジョシュ？」

「フィーナ、忘れたの？…今日僕の調子がよかったら、」

コンコン。

ノックの音が、聞こえた。ジョシュは、思わず猫を鞄ごと自分の背に隠す。セラフィーナの体がびくりと緊張したのが分かった。　今日は、ジョシュの調子がよかったら、白翼騎士団の鍛錬場を見に行こうという約束をしていたのだ。女の子のセラフィーナでも楽しめるように、剣と剣の打ち合わせではなく、型通りに剣を振る鍛錬をみせてくれるはずだった。その迎えが来たらしい。

「ジョシュ殿下。鍛錬場の準備が整いましたが。」

「ペルセ、ちょっと待って。フィーナ…？」

「私、忘れてた。…どうしよう、ジョシュ…。」

扉の向こうから聞こえてきた女性の声は、ジョシュの護衛騎士の声だ。ジョシュは、少し考えて…セラフィーナの頭を撫でた。けほんと咳払いをひとつする。

「ペルセ、ごめん。少し休んでから行っても大丈夫かな。」

「ジョシュ殿下？またお加減が！？…失礼します。」

扉の向こうから慌てた声が聞こえ、すぐさまバタンと扉が開いて慌てたように女性の騎士が駆け込んできた。ジョシュはこの騎士が過保護なのを忘れていた。すぐに自分の作戦が失敗したことに気付く。

「ペルセニーアちょっと待って、大丈夫だから…。」

「しかし、殿下…っ…！」

ジョシュが慌てて席を立つ。その途端、くらりと眩暈がして額を押さえた。

「殿下！」

「ペルセ、静かに。」

「ジョシュ…！」

ジョシュの体を女性騎士が支え、心配そうにセラフィーナがジョシュの手を押さえる。

「兄上！」

ペルセニーアと呼ばれた女性騎士が、扉の向こうに声を掛ける。

「ペルセニーア！　ジョシュ殿下は大丈夫か。…失礼いたします。」

茶色が交じった濃い金髪、武張った顔に大柄な身体つきをした、気が立ったクマのような風貌の男が扉で一礼をした。その姿を見て、ジョシュが一喝する。

「ペルセ！　僕は大丈夫だ。パヴェニーア団長、扉を閉め…」

そのときだ。

鞄から、猫がトーンと飛び出して、扉目指して駆け出した。

「…グレン！」

「…猫！？」

「む！？」

セラフィーナとペルセニーアと、…そして、クマのような男、パヴェニーアが声を上げたのは同時だ。

「猫、一体どこから？」

「つ、捕まえて！」

ジョシュの声にパヴェニーアが反応する。だが、猫は既にパヴェニーアの足元をするりと抜けていた。

「兄上！」

「任せろ。」

パヴェニーアが猫を追いかけて、大きな体躯を翻した。

「殿下、どういうことですか？…セラフィーナ嬢…？」

「ペルセ。」

ジョシュはセラフィーナを背に庇った。眩暈はもう治まっている。

何か言いかけたセラフィーナより先に、ジョシュは真っ直ぐにペル

セニーアを見上げて言った。

「あれは僕の猫だ。傷つけないように。」

「殿下。」

「我侭を言ってすまないが、保護して欲しい。」

ペルセニーアはジョシュとセラフィーナを交互に眺めて、観念したように、敬礼を施す。

それにしても、気のせいだろうか。

猫の上に、金色の固まりが乗っていたような気がした。

＊＊＊＊

「サティ…、声を出さないように聞いてくれ。」

ノックの音が聞こえ、慌てたようなやり取りが聞こえる中、再び鞄の中に閉じ込められたサティの耳元でピウニー卿が囁いた。鞄の中で様子は分からなかったが、ペルセニーアという名前が出てきた瞬間、ピウニー卿の髭が緊張したようにピンと張ったのだ。ペルセニーア・アルザス。間違いない。ピウニー卿の妹だ。王太子に近しい騎士として活躍していたとは思わなかった。

「合図をしたら、私を乗せて飛び出してくれ。外を飛び出したら女の騎士が居るはずだ。気を引いて、追いかけさせる。あれは私の妹だ。」

サティはこくりと頷いた。ピウニー卿はサティの背によじ登りしが

みつく。

「しっかり掴まってて」

「ああ。」

ピウニー卿に囁くと、サティは身をゆっくりとよじって頭を鞄の蓋の方に向けた。蓋が閉められていない鞄は、一気に飛び出せば簡単に外に出られるはずだ。そのとき、パヴェニーア団長と呼ばれた男が入り口に控えた声が聞こえた。

「サティ、行け！」

サティは、トン！…と鞄を飛び出した。

＊＊＊＊

「ちょっとーー！、なんかクマみたいな人が追いかけてきてるんですけど！？」

「計画に、変更無し、だ。あれは、私の、弟だ。」

駆けているサティの頭の上で、ピウニー卿の声がかくんかくんと揺れる。

「全然似てない！　クマみたい！」

「そうか？…じゃあ、私は、何に似て」

「え、何その質問。ネズミじゃなくて？」

「おい、追いつか、れるぞ！」

サティは、わざとスピードを緩めると、数本立っている柱をくるりと回ってみせた。追いかけてくるクマのような男はその動きに翻弄され、「うおう」とか何とか言いながらバランスを崩す。だが、そこはさすがに騎士なのだろう、体勢を整えつつサティを捕らえんと手を伸ばしてきた。サティはパヴェニーアの手を誘うように、すぐ側の、えらく高そうな壺の置かれた机に飛び乗って、その後ろを通り抜ける。これにはさすがにクマの身体が躊躇い、動きが止まった。その隙を見計らって再び廊下へ降り立ち駆けていく。

「妹さん、ちらっと見えたけど、すっごい美人だったーー！」

「…そうか？…私は、その、サティの、方が、美…」

「あの角曲がるから掴まってて！」

「…待て、そっちは…！」

サティは下働きの人の多い一角に入りこんだ。今は昼過ぎの中途半端な時間ということもあり、人はまばらだ。…だが、不味いことに廊下は行き止まりだった。

「行き止まりっ！？…ピウニー…。」

「…大丈夫だ、サティ。」

サティが、きゅっ…と身体を反転させて振り向くと、角を曲がるクマの身体が見えた。

「あの部屋へ！」

サティは返事をする前に、すぐ近くの開いていた扉にするりと身体を滑り込ませた。

＊＊＊＊

2人が飛び込んだのはどうやら物置の類のようだ。磨かれる前の鎧や盾などが置かれてあり、猫の姿のままそこに飛び乗るのは、不安定そうで気が引けた。安定しそうなところを探し、サティはとんとんと、上手く部屋の棚の一番上に登る。一番上に到着したとき、扉が勢いよく開いてパヴェニーアが入ってきた。

「確かここに…。猫、おい猫！」

顔も厳ついが、声も厳つい。そういえば、ピウニー卿の声も低くて渋みがあってよく通る。アルザス家の殿方は皆声がいいのだろうか。棚の上で身を低くして構えていると、サティの耳元で、聞き慣れた低い声が響く。これはピウニー卿の声だ。

「『おい猫』とはまた、随分偉くなったものだな、パヴェニーア。」

パヴェニーアの動きが止まった。狭い物置にはもちろん誰も居ない。パヴェニーア1人だ。それなのに、パヴェニーアの周辺が緊張したような雰囲気になるのがサティにも分かった。

「…その声、あ……」

「私が分からんのか、パヴェニーア。」

「…あ、あに…。」

「こっちだというのに、パヴェニーア・アルザス！」

「はっ！　兄上！」

ざざっと、パヴェニーアが直立不動の姿勢を取った。

「こっちだ。上だ。」

「…は？」

パヴェニーアは、鎧下などが置かれた棚の、さらに上を見上げた。パヴェニーア自身背が高いほうだが、物置の棚はそれよりもさらに背が高い。見上げたそこには、棚の端から顔を覗かせて自分を見下ろすセピア色の小柄な猫がいる。その猫の足元から、金色の毛皮のネズミがゆっくりと姿を現した。

010．いい。実にいい。

猫の前足の間からゆっくりと登場した金色のネズミ。その姿に、パヴェニーアは目を奪われた。しばしの間、言葉を失う。状況から言うと、この猫かネズミが兄の声で自分を呼んだとしか思えない。

「猫…と、ネズミ？　面妖な…。」

「兄に向かって面妖とは失礼だな。」

…ネズミの口元が、ふくふくと小刻みに動いている。…ということは、今声を出しているのはネズミということになるだろう。そんな愛くるしい口元から出てきているとは思えない渋い声だった。聞き覚えのあるその声に、パヴェニーアは驚愕の表情を浮かべたまま、恐る恐る問いかける。

「…兄上…？」

「そうだ。とりあえず扉を閉めろ。」

パヴェニーアが扉を閉めたのを確認すると、ピウニー卿は再びもぞもぞとサティの頭の上に乗った。サティはネズミを落さないように、さらに、鎧や兜に触れないように気をつけながら、そろそろと近くの小さなテーブルまで降りる。テーブルにトン…と着地すると、ピウニー卿がサティの頭から降りて、その傍らでふんぞり返った。パヴェニーアの瞳には、どう見ても綺麗なネズミにしか見えない。薄い色合いの金色の毛皮、濃いこげ茶色の愛くるしい瞳。Ｙの字の口元、自慢げに揺れる髭、丸い耳、太ましいお腹、短い手足。腰にはベルトらしきものを身に着けているようだ。

「こ…ここ、こんな可愛らしいネズミが？…そんなまさかっ。」

「え。」

サティがよく見るとパヴェニーアの瞳が妙に熱っぽかった。息が上がり、頬が赤い。餌の足りないクマのような怖い顔から飛び出した「可愛らしい」という言葉に、ピウニー卿の髭が不機嫌そうにピクリと揺れた。

そんなピウニー卿の髭の揺れには全く気が付かず、パヴェニーアはさらに小柄な猫に視線を移す。さわり心地のよさそうな綺麗なセピア色の毛皮、グリーンの瞳、たおやかな尻尾、しなやかな四肢。

「しかも、こ、こんなに可愛らしい猫を従えて…？…ああ！」

パヴェニーアがサティの脇腹をむんずと掴んで持ち上げた。

「うきゃあああああ！！」

「なんて可愛らしい！」

「…なっ、パヴェニーア！」

サティの毛が逆立ち、尻尾の先まで膨らんだ。

しかし、サティの切なる悲鳴も、ピウニー卿の制止も耳に入っていないようで、パヴェニーアは抱き上げた腕を引き寄せて、そのセピア色の毛皮に思わず頬を摺り寄…

てし。

近づいてきたパヴェニーアの顔を拒否するように、サティの四肢が突っ張った。
両の前足がパヴェニーアの頬を押さえつけている。サティはそのままジタバタと暴れた。

てしてしてしてしてし。

だが、このささやかなサティの抵抗がパヴェニーアの心に火を付けた。
パヴェニーアの頬にヒットするのは、ぷにぷにとした感触。猫が軽く暴れた程度、白翼騎士団の団長たるパヴェニーアには何のダメージも無い。いや、むしろ回復する。癒される。ああ…。

「ああっ、この感触はっ…！」

ピウニー卿が両前足を万歳の格好にして伸び上がっている。片方の前足には抜き身の剣を持ち、必死にそれを振っていた。

「パヴェニーア！　止めろ、止めんか！」

「しかし、肉球が！　…あああっ！」

「にっ、にくきゅ…っ、なっ…、なんだとう！…私ですら触れたことがないというのに、…くそうっ、許せん！」

チクンっ！

「いだだっ」

ピウニー卿はテーブルの端に寄って、ちょうど眼前にあったパヴェニーアの腿を剣で刺した。さらにサティが追撃する。

ガリッ！

「あいだっ！」

サティのご自慢の肉球から爪が出て、パヴェニーアの小さな悲鳴が響く。

ガリガリッ

猫パンチ。

猫パンチ。

猫パンチ。
猫パンチ。
猫パンチ。
猫パンチ。
猫パンチ。
猫パンチ。

「す、すみません、すみませ、ちょ、いだっ、すみ、す、ま、」

パヴェニーアは腕を伸ばしてサティを自分の顔から引き離した。頬には鮮やかに数本の筋が描かれている。

「パヴェニーア！　気をつけっ！」

パヴェニーアがサティを持ったまま、ざざっ…と姿勢を正す。その号令に我に返って兄の声に視線を落とすと、金色の毛皮のふわふわしたネズミのピウニー卿が、剣をパヴェニーアに向けている。

「パヴェニーア！　注目！」

言われなくてもパヴェニーアは、サティを持ったまま真剣な様子でピウニー卿を見下ろしていた。…こんなに小さいのに帯剣している…ということか…！？　しかもあんなまん丸の可愛らしい瞳を凛々しく釣り上げて、どうやら自分を睨んでいる。なんという…なんというすさまじい愛くるしさ！　これが、あの竜殺しの騎士ピウニーア・アルザス兄上なのか、こんな可愛い兄上が存在してもいいのか？　いいのかーーー！？

いや…、いい。実にいい。

目の前のネズミが本物の兄なのかどうなのか、どう判別すればよいのか分からない。いや、もう兄でかまわない。むしろ兄であってください。

「いい加減サティを下ろせっ、それから気安くサティに触れるな！…聞いておるのかパヴェニーア！」

「はっ、はい、申し訳ありません兄上！」

ピウニー卿の一喝に、つい「兄上」と返事をして、慌ててサティをテーブルに下ろす。サティはずささっ…とピウニー卿の背後に回り、小さな背中の毛皮に自分の顔を押し付けた。ネズミの背に猫なので、サティの身体はまったく隠れていない。

「…あ、兄上、まことに貴方は兄上なのですか…？」

「信じられないのは無理も無いが、私はまさしくピウニーア・アルザスだ。そしてこっちが、魔法使いのサティ。」

「しかし…。」

剣を鞘に収めながら言ったピウニー卿の言葉に、パヴェニーアの視線が改めてサティに移る。紹介されたらしい猫は、いまだに警戒しているようだ。頭を低くして、頭の毛を逆立てている。ピウニー卿の背中から、ちらっちらっ…と顔を覗かせつつ、渋々応答した。

「…サ、サティ、です…。」

猫から紡がれた綺麗な声に、再びパヴェニーアの瞳が見開かれる。

「しゃべっている…！ということは…意思疎通が？…このような愛くるしい猫と意思疎通が！？」

パヴェニーアの瞳が熱っぽく潤み、大きな手が再びサティに伸ばされた。

「おいこら！　サティに触れるな！」

「しかし兄上！…今度は乱暴はいたしません！…ちょっと撫でさせていただくだけで…」

既に、ネズミのことは「兄上」確定のようだ。それは武家に育てられたパヴェニーアに刷り込まれた「兄」という存在に対する条件反

射なのか、はたまた、こんな可愛いネズミが「兄」だったらそりゃあもう楽しいだろうなあという願望なのか。

「撫でる！？　サティを撫でるだと！？　パヴェニーア、それは聞き捨てならん。どういう意味だ！」

「じゃあせめて肉球だけでも！」

「もっとダメだ！」

「じゃあ撫で」

「だからダメだというのに！」

2人とも毛を膨らませて威嚇している。ピウニー卿などは再び剣に前足を掛けていた。しかし、ああっ…！　なんということだ、それすらも愛くるしい…。パヴェニーアは久々に興奮を覚える。そもそも小さな金色の太ましいふわふわしたネズミが、針のような剣を今にも抜かんとする構えを施し、美しい小柄な猫を守る姿など、愛くるしくないわけがないではないか！　ふわふわした愛らしさを目の前にそれを堪能できないなど、なんという拷問か！

…パヴェニーア・アルザスは厳つい外見に似合わず、愛らしいものが大好きな男であった。

ピウニー卿が「気をつけろ」…と言っていたことを、サティは今更ながら思い出した。

＊＊＊＊

「ともかくパヴェニーア、少し落ち着け。」

「しかし、兄上、これが落ち着いていられますか！？」

「何がだ？」

「兄上がこんなに愛くるしい猫を連れ、こんなに愛くるしい姿をしているというのにっ！」

再び身の危険を感じたサティはそっと退いて、パヴェニーアから少し離れたところへ移動した。ピウニー卿がそんなサティを庇うように右前足を出す。もう、どんな動作をしても可愛く見えるパヴェニーアは、再び頬が染まる。そんな弟を見ながらピウニー卿はため息をついた。

「相変わらずだな、パヴェニーア…。」

「何が、ですか？」

ふん…と髭を撫でると、ピウニー卿は口元をぴくぴくと動かした。

「パヴェニーアが小さい頃、ペルセニーアの持っているぬいぐるみがあまりにも可愛くて自分も欲しいとごね…」

「兄上！」

サティがクフッと噴出した。厳つい顔のパヴェニーアが顔を真っ赤にして拳を握りしめている。

「そもそも小さい頃はぬいぐるみがないと寝れな」

「あああああ兄上！！」

いよいよパヴェニーアの拳がふるふると震えている。やはりこのネズミは兄なのだ。ああ…ならば、ささやかなこの弟の願いを聞き届けてほしい。

「兄上！…しかし、しかしですね、それならばせめて、兄上の腹の毛皮だけでも撫でさせては…」

「…ダメだ！　何が悲しくて弟に腹を撫でられなければならんのだ。」

もっともだ。

「しかしっ」

諦めきれないのか、熱い視線でパヴェニーアが2人の乗っているテーブルへと一歩近づく。気圧されるようにサティが一歩退くと、後ろ足が空を切った。

「おっ…」

ずるん…とサティの身体が傾き、机から落ちる。振り向いたピウニー卿がぎょっとして、思わず助けようと飛び降りる。それが間違いだった。

「サティ…！」

ピウニー卿の小さな身体がサティの顔の上に落ち、2人の口元が触

れ合った。

＊＊＊＊

「うおっ！」

「きゃ、…嘘っ！」

「……！」

パヴェニーアの視界で突如、ふわりと空気が揺らいだ瞬間、

「パヴェニーア！、回れ右っ！」

「はっ！」

これまでにない条件反射でピウニー卿の声がパヴェニーアに回れ右を指示し、脊髄反射でパヴェニーアはその指示に従った。パヴェニーアが変身の瞬間および変身直後の２人を見なかったのは、アルザス家秘伝の修行の成果といえるだろう。

パヴェニーアの背後から何かを打ち付ける音がして、続けざまに男と女の声が聞こえた。やがて、ガタンとかバタンとかいろいろな音が聞こえてくる。

「なんで、何でこんなところで変身…」

「お、落ち着けサティ、とにかく今は服を…」

「分かってる、服着るから、ちょっとどいて…あ、ダメ…どいたら

全身見え…って、前くらい隠してよピウニー！」

「見るな！」

「見せないで！」

「見せてはいない！」

＜エディオディド・エテビューシュ・イハシュ・オ・ト・グレン＞
（全ての持ち物を緑石より出力せよ。）

サティの首輪が魔法の力を帯び、ふわりとシーツが2人に降りる。さらに2人分の下着、服などがばらばらと落ちてきた。突如聞こえてきた呪文に、パヴェニーアが振り向く。

「む、今の呪文は…うをおおおおっ！？」

振り向いたところに見えたのは、裸の女を裸の男が組み敷いている（ように見える）様子だった。シーツが2人の身体を隠してはいるが、男の逞しい肩と肩甲骨は隠しきれておらず、セピア色の綺麗な髪が、男の身体の下からさらさらと流れて広がっている。あたりには脱ぎ散らかされたような男女の下着や、服が散らばっていた。恐らく男は女に体重を掛けないように四つんばいになっているのだろう。

男と女の視線が、固まったパヴェニーアに向けられたのは同時だ。

「…！」

「パヴェニーア、回れ右と言っておる！」

「はっ、はいいいいい！」

パヴェニーアは再び回れ右をした。

011．猫アレルギー

パヴェニーアの背後で、男女の声が響いている。要約すると、「動くから少しずれろ」「早く動いてよ」「これ…か？」「ちょっと下着！　それ私の！」「た、たまたま手に触ったんだ！」「分かったから返して！」とかそういう類の言葉である。ダメだ。深く考えてはいけない。何が行われているか…など、深く考えてはいけないのだ。

…パヴェニーアは邪念を振り払うように、脳裏に焼きついた映像を反芻してみた。とても美しい…いや可愛い…いや愛くるしい…、猫とネズミと会話したのはつい先ほど。ネズミは信じられないことに兄だという。あんなに腹がふわふわした兄がいてもいいのだろうかと思ったが、居てもいいのだという結論に達した。ともかく、兄が居て…そして兄が必死で守る猫が居たのだ。

お分かりになるだろうか。可愛いものが好きな人間の目の前に、意思疎通のできる可愛いもふもふした生き物がいたとしよう。そのときの、その悦びたるや！　ああ、あんなに可愛くて小柄で綺麗な猫…そしてネズミ、思い出しただけで…。

邪念を振り払うためだったのに、さらに邪念が。

忘れそうになった。猫もネズミも、先ほどの一瞬で目の前から消えたのだ。そして、男と女が2人そこに居た。…男のほうは、確かに兄だった。1年前に魔竜と共に果てたという兄…その兄が戻ってきて、共に在る女性。パヴェニーアとて妻帯者である。ピウニー卿の口調や必死さで、あのサティという猫…女性、が兄にとってどのような存在なのかは分かるつもりだ。…わかる、つもり、えっと、兄

の、大切な、女性？　…大事なことを、ひとつ、忘れているような…。

「パヴェニーア。もう大丈夫だ。」

「はっ。」

パヴェニーアが忘れかけている大事なこと…それを思い出す前に、兄の声が自分を呼ぶ。

振り返り、２人を認識する…その瞬間、

コンコン

ノックの音が、響いた。

＊＊＊＊

「パヴェニーア殿はここへ？」

白翼騎士団所属の騎士、ヴェルレーン・サテュルニアは、さらりと前髪を払った。

彼はジョシュ王子を迎えに行ったまま戻ってこない団長を探していたのだ。団長の妹君、王太子の護衛騎士を勤めているペルセニーアに聞いてみると、なんでも王太子の飼っている猫…？が逃げ出したとかで、その保護に走ったとのことだ。訓練の見学は副団長が滞りなく続行しているから問題ないが、猫１匹を捕まえるのにこれほど時間がかかるのはおかしい。ヴェルレーン・サテュルニアという男は猫が苦手だったが、職務に忠実な男なのである。各地に残されたパヴェニーアと猫の足跡を人づてに辿りながら、最終的に王子宮か

ら少し離れた物置部屋に案内された。

「ありがとう。君はもう行ってかまいませんよ。」

ヴェルレーンは僅かに目じりの下がった甘い瞳に爽やかな笑みを湛えて、案内してくれた侍女の髪に遠慮がちに触れた。触れられた侍女は、頬を染めて俯く。「いえ、そんな」とかなんとか言いながら、首を振って一礼した。「あ、待ってください！」身を翻そうとした侍女の腕を、ヴェルレーンが取る。

「…ああ、僕としたことが。…貴女の名前を教えていただけますか…？」

侍女の顔がハッとした表情に変わる。恥ずかしげに瞳を伏せて…、侍女は名を名乗った。その様子に満足気にヴェルレーンは瞳を細め、頷く。

「ありがとうございます。これで今度から…貴女の名前を呼ぶことができます。…さあ、もう行ってください。仕事の邪魔をして、申し訳なかったですね。」

ヴェルレーンはぱたぱたと廊下の向こうに消えていく、侍女の可愛い後姿を見送った。その姿が完全に消えたのを確認すると、そこにある扉を振り向く。

コンコン…とノックをする。

「パヴェニーア団長、こちらですか？」

返事が聞こえる前にガターンと大きな音がした。怪訝に思ったヴェ

ルレーンはもう一度、今度はドンドンと大きくノックをする。

「団長？　開けますよ？」

「その声、ヴェルレーンか、いや、ちょっと待て。」

「パヴェニーア団長？　待てとはどういうことですか。」

「いや、のっぴきならない事情があってだな、とにかく、少し、」

「パヴェニーア団長、何事かあったのですね？…申し訳ありませんが開けさせていただきますよ、失礼しま…」

ヴェルレーンがガチャリと扉を開けると、そこには、いつもの厳つい顔を僅かに焦ったように歪ませたパヴェニーア。そしてその背に庇われるように、セピア色の髪にグリーンの瞳の女が居た。グリーンの瞳は不安げに、揺れているように見える。狭い部屋に男と女。焦った顔の男。これは…。

ふっ…とヴェルレーンが苦笑した。パヴェニーア団長は元来真面目な男だったと思うが、このような一面もあったとは。クマのような厳つい顔をし、それでいて美しい妻を持っているのに、…また別の華を隠していたとは…。

「そういうことですか…、パヴェニーア団長。分かりました。奥方には黙っておきますが、あまり羽目をお外しにならないように。」

ヴェルレーンの言葉を聞いて、驚いたのはパヴェニーアだ。目を丸くして、首を振る。

「な、何を言っているんだヴェルレーン、違うんだ、これは…。」

「いえいえ、いいんですいいんです。分かってます分かってます。ええ、普通こういうときに『ハイ正解！』とは言いませんよ。…パヴェニーア団長、気にしないでください。私の事にもいつも目を瞑っていただいているということで、今回は見逃しますよ。…ただ、」

ヴェルレーンは、パヴェニーアの肩越しにセピア色の髪の女を伺った。部屋に一歩入ると、女の方に近づく。

「…このような美しい女性がこの王宮に居たとは、私としたことが。…お名前をお伺いしてもよろしいですか…？」

「あ…あの、」

ヴェルレーンが囁く声が妙に色っぽい。パヴェニーアが押さえようとした手よりも先に、女の髪に触れる。女の戸惑うような声が耳に心地よく、ヴェルレーンは楽しげな表情を浮かべた。真っ直ぐなセピア色の髪を持ち上げると、そっとそれに口付けを…。

「ふぇっぶしょーーい！」

そのときヴェルレーンがくしゃみをした。それは、ヴェルレーンという線の細い洗練された立ち居振る舞いの男には不似合いな、年齢を重ねた中年親父のようなくしゃみだった。

「ちょ、何か飛んできた…。」

女がぼそりと呟く。だが、ヴェルレーンという男はその程度のことでもげる…ではなかった、めげるような精神力の男ではないのだ。

「失礼…」淑女の前の騎士らしい、一分の隙も無い笑顔に戻ると、今度は女の手を取った。女の手がびくりと震えたのが、ヴェルレーンの手に伝わり、それをなだめるようにもう片方の手をそっと重ねる。

「ヴェルレーン、よさないか。」

女が咄嗟に手を引いたのと、パヴェニーアが咎めるようにヴェルレーンと女の間に入ったのは同時だ。そして、もう1つ。

女の手を掴み、ヴェルレーンから引き剥がした手があった。ヴェルレーンとて、白翼騎士団に所属する騎士である。そのヴェルレーンに直前まで気配を気付かせることない男。そのような存在がもう1人ここに居たことに、ヴェルレーンは眉を潜める。その男に目を向けると、

そこにいたのは、良家の子息が着る様な上質な…だが、シンプルな平服に豪華な兜を被った男だった。

＊＊＊＊

ピウニーさん。

どう見てもそれは怪しいです。

パヴェニーアと話し合っているときに、何の不可抗力でか元に戻ったサティとピウニー卿はあたふたと着替え、やっとパヴェニーアに人としてまともに向かった。その直後だ。コンコンとノックの音が聞こえ、扉の向こうからヴェルレーンと名乗る男の声がしたのは。

ピウニー卿は死んだことになっている。王宮内でこういった形で顔が見られるのは不味いだろう。咄嗟にピウニー卿を奥の死角に押しやるが、サティは間に合わなかった。パヴェニーアに庇われるような位置で、扉が開いたのだ。

サティとパヴェニーアの関係を誤解したらしいヴェルレーンを見て、サティはなんとしてもこの誤解を解かねばならずと思案していたため、髪が触れられたときに反応が遅れた。その後、まさか至近距離でくしゃみをされるとは思わなかった。完全に言葉を失ったサティの、今度は手を、ヴェルレーンは掴む。咄嗟に身を引いた瞬間、サティの身体が別の男に引き寄せられた。後ろから抱え込むように手を引かれ、バランスを崩した背中を逞しい胸が受け止めた。

助けてくれた腕の安心感に見上げた男の顔は、きらっきらした兜を被っていて見えなかった。

……サティの口が開いた。

…が、かろうじて、「何やってんのピウニー」と発声しなかった自分を褒めたい。

確かに、正体がばれないように顔を隠したのは分かる。だが、鎧を着ていない、鎧下でも無い、シャツにズボンというシンプルな平服に兜というコーディネートは、いくらなんでも怪しい。どう考えてもおかしい。いや、おかしいよね。自分の美的センスがおかしいわけじゃないよね。しかもなんでその豪華な兜チョイス。いや、地味だったらいいかとかそういう問題でもないが、目立つ。印象抜群すぎて、逆に忘れられない。

「…君は、何なんだ…。」

普通はそう来る。誰なんだ、ではなくて、何なんだ。

ヴェルレーンは不愉快そうに眉を潜めてピウニー卿を見ている。パヴェニーアでさえ、どうフォローしていいのか分からない顔だ。そもそもピウニー卿はどう見ても素人臭さがない。姿勢も体躯も、鍛えられた男のものだ。発する気配も歴戦の戦士だということが、ヴェルレーンには伝わってきた。

そのとき、なんとか気持ちを持ち直したサティが口を開いた。

「えーと、あ…あの、私が…」

サティがピウニー卿を庇うように手を伸ばし、グリーンの瞳を潤ませた。ヴェルレーンの視線が、ピウニー卿からサティへ移る。

「私が、この方とここでお会いしていたのです。…そこをパヴェニーア様に見つかってしまって…。」

「いやいや、どう考えてもこの服にこの兜って怪しいじゃないですか。ここで、何を…。」

ほらやっぱり怪しいではないか！

サティはピウニー卿の身体を庇う。それを見たヴェルレーンの瞳が潜められ、サティを伺った。途端にサティの頬が染まり、羞恥に視線を逸らす。その視線を見れば、2人が一体ここで何をやっていたか…などはすぐに想像がついた。ヴェルレーンがその表情に気付き、こほんと咳払いする。

「なるほど…、ここで。」

「あの…それは…。」

言い淀んだサティが、身を翻して今度はヴェルレーンへと近づいた。ふわりとサティの髪が揺れ、ヴェルレーンの瞳を覗き込む。綺麗で大きなグリーンの瞳、さらさらとした髪の毛。それが視界に入り、ヴェルレーンは、

「ならばどの所属の、なんという人間…へ…くしょーーーーい！」

ヴェルレーンは再び親父のようなくしゃみをする。再びアタックを受けたサティは、一瞬嫌そうな顔を浮かべそうになったが、かろうじて堪えてもう一歩踏み込む。

「騎士様…どうか…。」

「わ、わかった、ちょっと待って、君、猫か何か…ふぇ…ふぇ…ふぇくしょん！はくしょん！」

眼前のくしゃみに怯むことなく攻め入るサティ。ヴェルレーンはじりじりと後退した。

「き、君猫か何か飼って…ぼ、僕は猫アレルギーで…、へぶしっ、ふぇくしっ！」

いよいよヴェルレーンのくしゃみが止まらなくなった。ヴェルレーンという男。実は猫アレルギーなのである。この大陸には、猫の毛を吸い込むとくしゃみが止まらなくなる…という症状があった。実に珍しいその症状は「猫アレルギー」と呼ばれている。防ぐには、

猫の毛を吸い込まないようにするほか、今のところは手立てが無い。そんなヴェルレーンとサティの間に、パヴェニーアが割って入った。

「あー、ともかく、ヴェルレーン。ここは私がきちんと話を聞いて、始末しておく。お前は早く訓練の元に戻れ。」

「ヘクションっ、ふぇくしょっ…、団長、しっ、しかし猫は…」

「お前、猫アレルギーなのに私を探しに来たのか。無謀にもほどがあるぞ。猫を探す途中で2人を見つけたのだ、分かるだろう。その調子ではお前にここは無理だ。帰ったら報告してやる。行け、命令だ。」

「だ。だんちょ…。」

バタン。

ヴェルレーンのくしゃみを避けるように、扉は閉ざされた。

＊＊＊＊

なんとかヴェルレーンを部屋から追い出したパヴェニーアは、これからどうすべきか思案した。2人を匿うのに物置部屋では不便すぎる。顔を隠してなんとか移動してもらわなければ。そう思いながら2人を振り返ると、不愉快そうに顔を拭っているサティの様子が視界に入り、パヴェニーアははたと気が付く。

忘れかけていた大事なことを、今思い出した。

そういえば、サティのことをさっき自分は撫でたいとか、言っていなかったか。

パヴェニーアはピウニー卿をちらりと伺う。既に兜を脱いでいるピウニー卿は、サティのことを心配そうに見つめながら何事かを話しかけていた。袖の端でサティの頬を拭ってやろうとして、「…大丈夫か？」「大丈夫だってば」などという攻防を繰り返している。漂う雰囲気を見れば、サティという女性を、兄が大切にしていることが一目で分かった。その女性を、いくら猫の姿だったからといって「撫でたい」発言…したか？　気のせい？…いや、気のせいではない。そうだ、気のせいではなかった！　確かにあの猫、あのネズミ…ああ、あの毛皮！　お腹のふかふか！　…せめて兄のでいい、撫で…

ダメだ。嫌な予感しかしない。

だが今は、ヴェルレーンのどさくさに紛れて忘れているようだ。パヴェニーアは2人から視線を外し、小さく安堵の溜息をついた。ヴェルレーンはあのような男だが、今回は感謝せねばならない。いいところに来てくれた。おかげでなんとか誤魔化せそうだ。

「パヴェニーア。」

ピウニー卿の声が低く響く。びくうぅっ…と、パヴェニーアの身体が上に上がる。

「はっ。はいぃっ」

「先ほどまで、サティのことを撫でたい…などと言っていたな？」

誤魔化せてなかった。

恐る恐る振り向くと、今は可愛いネズミの姿ではない、1年ぶりに見る兄の堂々とした姿がそこにあった。改めてみるその兄は、真顔で自分のことを見つめている。1年ぶりに会った弟を見る兄の目とはとても思えない。しかも声が低い。兄の声が低くなったときは大概怖い。恐ろしい。絶対夢に出る。後ろに控えるサティが、「あの、ピウニー、それあんまり蒸し返さないで…」などと言いながらピウニー卿の袖を引っ張っていたが、彼はまったく聞いていなかった。

白翼騎士団団長パヴェニーア・アルザスは、久々に命の危険を感じた。

説教する姿もネズミの姿だったらよかったのに…と遠い目をしていたら、さらに説教時間が長くなったのは言うまでもない。「もう、ピウニーいいからそれ以上撫でるとか肉球触りたいとか言わないで！」…と、サティがピウニー卿の口を塞ぐまでそれは続いた。

012．呪いかこれが

「それで…、先ほどの猫がサティ殿で、ネズミが…ピウニー兄だ…と？」

物置部屋から程近い、今は使われていない侍女部屋にピウニー卿とサティは通された。誰にも見つからずに移動できる距離で、落ち着いて話が出来る場所がここだったのだ。2人を前にして腕を組んでいるのはペルセニーア。猫を探している途中、兄のパヴェニーアに呼び出された。そこでペルセニーアが見たのは、1年前に死んだと思っていた兄だ。薄い色合いの金髪に精悍な顔。濃いこげ茶の瞳はあの頃と変わらず頑固そうで、一見すると誰も寄せ付けない硬派な雰囲気も相変わらずだった。そして、その兄が庇うように身を置く1人の女性。サティと名乗るその人は、魔法使いだという。

パヴェニーアとペルセニーアは、ピウニー卿とサティの事情を聞かされた。なぜ、呪いが解けたのか…という点についてははっきりと教えてくれなかったが、ともかく2人が人間と獣の姿を行ったりきたりしていることは、本当のようだ。

ピウニー卿と魔竜の戦いはペルセニーアとパヴェニーアの記憶に新しい。何よりも2人がもっとも尊敬していた兄の、最期だったから。共に竜を倒しに行き、生きて帰ってきた仲間から話は聞いた。ピウニー卿は竜の呪いを受け止めた後、剣以外の装備を残して消えたという。だが、死体の1つも無く塵になって消えた…などと言われ、誰がその死を信じることが出来るだろう。それでも葬儀を出し、「竜殺しの騎士」という2つ名を冠し、国王からもいくつかの勲章や名誉ある言葉を頂いて、やっと兄は帰ってこないのだという実感が

沸いた。死んだのではない、帰ってこないのだろうという奇妙な諦めだった。

それなのに、今、その兄が目の前に居る。しかも、しばらくするとネズミに戻ってしまうというのだ。…そんな話、今すぐに信じろというのが無理だった。兄が生きていることが…ではない、兄がネズミに戻ってしまうことが…だ。

それに気がかりなのはサティのことだった。話によれば、オリアーブの魔法研究所で、死霊使いがサティに対して戦いを挑んだという。だが、そのような事件は聞いたことが無い。魔法師団とペルセニーアの所属する黒翼騎士団は協力関係にある。魔法師団の後衛施設ともいえる魔法研究所でそれだけの事件があれば、騎士団に知られないなどということはまず無い。そもそも死霊魔法自体が禁じられた、魔法使いにとっても恥じるべき、そして忌むべき魔法なのだ。その死霊魔法が国内で研究されていた…となれば、それは由々しき事態だ。

サティは理の賢者の弟子だという。理の賢者は、オリアーブに3人いる賢者の1人。オリアーブ国王とも親密な関係だが、どれほど請われても国のために自らが働くということはなかった。ただ、魔法師団との関係は悪くなく、研究の要請などがあれば弟子が引き受ける場合もある。サティという名前の弟子が、魔法師団に協力したことがあっただろうか。調べてみる必要がある…と、ペルセニーアは思った。

いずれにしても…。

ペルセニーアは仲良くサンドイッチを食べているピウニー卿とサティを見た。

あと数時間もすれば2人は猫とネズミに変わる。時間的には、夜半過ぎだ。ギリギリ日が変わる頃だろう。人間のまま王宮内を歩くわけにもいかないので、ペルセニーアとパヴェニーアは残業と称して王宮に残り、日が変わる前に2人を連れて裏口から帰宅する算段だった。ただそうすれば、サティを…猫をジョシュに会わせることは出来ない。ジョシュにピウニー卿の事情を話すわけにはいかないが、猫が見つからなかったと報告するのは気が引けた。

「サティ殿…。あと少しすれば、貴方は猫に戻られるのですよね。」

「はい。」

「お願いしたいことが…あるのですが。」

「ジョシュ殿下の元に戻れ、というのですね。」

「…命令ではありません。お願いです。それに、戻るのではなく、少し姿を見せるだけでかまいません。」

サティの言葉にペルセニーアは申し訳無さそうに顔を上げた。

「今の話によればサティ殿は…、セラフィーナ嬢が連れてきたのでしょう。」

サティの表情が、何と言っていいのか分からないような表情になる。ペルセニーアは続けた。

「セラフィーナ嬢は責任を感じて、ひどく気落ちされて帰宅なさいました。ジョシュ殿下が必ず見つけるから…とお引き受けになって。

見つからなかったとしても咎めはしないでしょうが…。」

ペルセニーアはジョシュの護衛騎士だ。ジョシュが懇意にしているヴィルレー公爵令嬢、セラフィーナとも仲がよい。彼女にとって、セラフィーナは歳の離れた妹のような存在であり、ジョシュの大切な姫君であり、小さな友達でもあった。その小さな姫が悲しむのは忍びない。だが、この自分の願いが随分身勝手な我侭であることも分かってはいた。2人は動物になってしまえば非力な猫とネズミなのだ。誰の目にも触れないよう、ひっそりと王宮を出るのが一番安全に決まっている。

「わかりました。」

「おい、サティ…！」

断られても当たり前だと思っていたペルセニーアは、あっさりとしたサティの返答に驚いて視線を向けた。ピウニー卿がサティの隣で非難めいた声を上げている。

「本当に構わないのですか？」

「顔を見せるだけならば、大丈夫だと思います。」

「いや、待て、サティ。見つかったということになれば、ヴィルレー公爵のところにも言い訳をせねばなるまい。どうするのだ。」

「でも見つからなかったって言ったら、セラフィーナが心配すると思う。王子を通さずに公爵のところに直接話に行くのもおかしいでしょう。」

しょぼんとしたサティに、ピウニー卿が明らかに動揺する。

「いや、それは分かる、分かるが…、ヴィルレー公爵にはどう言うのだ。」

「…それならば私が、お三方に話します。実は元々アルザス家で保護していた猫だとでも言えば…。」

「我らは公爵家の馬車に乗ってきたところを見られている。…そんな言い訳が通用するだろうか。」

3人は考え込んだ。…サティがため息をつく。

「…とにかく、王子様に1回会うくらいなら問題ないでしょう、ピウニー。」

「だが…。」

ピウニー卿がサティに向かって、厳しく眉を潜めた。ペルセニーアの眼から見ると、サティとピウニー卿は旅の仲間という以上の、特別な関係に見える。

「…それならば私も…。」

「では兄上も一緒に来てくださってかまいません。ネズミ一匹くらいならば、隠すことは出来るでしょうから。その代わり姿を現さないようにしてくださいね。」

「う…うむ…。」

いずれにせよ、ジョシュは猫について何らかの報告があるまで起きている…と言ったのだ。いつもは聞き分けのよいジョシュがこのような我侭を言うのは珍しい。よほどセラフィーナの事が心配なのだろう。

「ピウ、大丈夫だって。」

サティが若干うんざりと言った。2人の様子を見て、ペルセニーアとパヴェニーアは眼を丸くする。ピウニーアをピウニー、ピウニー卿と呼ぶ人は多いが、ピウと略すのは初めて見た。少し可笑しい気持ちになる。アルザス家でもっとも強い男、父と唯一互角に剣を合わせる男。優しいけれど、武術に関しては常に厳しかった兄が、サティという女性にこのようにおろおろさせられているのを見るのは、不謹慎ながらも愉快だ。

「サティ殿。」

ペルセニーアはサティに向き直ると、その手を取って丁寧に騎士の礼を取った。その凛々しい様子に、サティは少し首を傾げる。気遣わしげにサティを見返す瞳は琥珀色でピウニー卿よりも少し色が薄かったが、意志の強そうなところは似ているような気がした。

「お心遣い感謝します。」

「いいえ、大丈夫です。」

受け負ったサティの言葉に、まだ申し訳なさそうな表情を浮かべたまま静かに頷いて、ペルセニーアはパヴェニーアを振り返った。

「兄上は執務室で待っていてください。お2人は私が。」

「ああ。」

本当はパヴェニーアが2人を連れて行きたかったが、絶対に全員に止められるだろう。パヴェニーアは涙を飲んでその役割を自重した。

「貴方方が猫かネズミの姿に戻るであろう時間に、私達は再び来ます。」

「あ、ああ。」

まだ全然納得していないピウニー卿は曖昧に頷いた。パヴェニーアもペルセニーアも騎士としてまだ仕事が残っている。残業するという旨を部下に伝えなければならないし、パヴェニーアはジョシュを伴うはずだった訓練に立ち会っていないのだ。報告も受けなければならない。

「サティ殿、施錠の魔法をお願いできますか？」

「分かりました。開くときは＜グレン＞で。」

「了解しました。」

「ではまた後で…。」とパヴェニーアとペルセニーアは侍女部屋を辞した。2人が部屋を出ると、ガチャリと音がして施錠されたのが分かった。

＊＊＊＊

「兄上、よかったのですか？…2人が戻るまで一緒に居なくても。」

「何がだ。」

ペルセニーアは少しだけ言葉を濁す。

「その…、私は2人が言葉を解する猫とネズミだった姿を見たわけではありません。」

「信じられない、と？」

「あれははっきりと、兄上だったではありませんか。」

「ネズミだった兄上を最初に見せられた、俺の方が信じられんかったよ。」

「それは…。」

確かにそうかもしれない。ペルセニーアは静かに瞳を伏せる。そんなペルセニーアから視線を外し、パヴェニーアも考え込んだ。

パヴェニーアにとってピウニーアは乗り越えられない強い兄だ。もちろん、パヴェニーアとてアルザス家の男。若くして白翼騎士団団長という身分を頂き、アルザス家の当主になっている。ピウニー卿という常に比較される「竜殺しの騎士」を兄に持ちながら、アルザス伯爵家という武門の名家を支えるのは相当なプレッシャーだ。

ピウニー卿は、魔竜を倒す旅に出る事が決まって、すぐに家督をパヴェニーアに譲る旨を父親に申し出た。それは魔竜という敵がいかに強大で、それに立ち向かう兄がどれほどの覚悟を決めていたのかが分かるものだった。その覚悟を受けてパヴェニーアは家督を継ぎ、

それに伴って父は夫婦で隠居している。もちろん、ひとりアルザス家を支えることになったパヴェニーアは戸惑った。だが、それでもパヴェニーアが当主として立ったのは、兄に認められたいがためだった。いや、違う。兄に認められた証だと考えたからだ。

その兄がネズミになって帰ってきた。戸惑わないわけがないのだ。ネズミ。そう…ネズミ。

…パヴェニーアは、再び恋する乙女のような顔になって、ほう…と溜息をついた。

「まあ、ネズミになった兄上を見れば分かる…。」

パヴェニーアがぽつりと言った。

「…何がです？」

胡散臭そうにペルセニーアがパヴェニーアを伺う。パヴェニーアは厳つい顔に全く似合わない、うっとりとした瞳で言った。

「あの愛くるしさに。」

ペルセニーアが若干冷たい目でパヴェニーアを見た。

＊＊＊＊

侍女部屋で特にすることなく、ピウニー卿とサティは寝台の端に2人並んで座っていた。いつも人間から猫やネズミに戻るのは唐突だ。今までの経験から、大人しくしておいたほうがいい…というのは分かっていた。

「サティ…本当に大丈夫か。すぐにアルザス家に戻れば、王子に会わなくても済む。」

「何をそんなに心配してるの。」

「ジョシュ殿下がサティのことを気に入って、ずっと側に置くと言ったらどうするのだ。」

「そんな我侭は言いそうに無いでしょう。」

「分からないだろう。猫になったサティは…！」

「何？」

突然言葉を止めたピウニー卿を、サティはちらりと伺う。さっきからピウニー卿はずっとこの調子なのだ。それにしても猫になったサティは、なんだというのだろう。

「猫になった私は、何？」

言葉に詰まったピウニー卿に、追い討ちをかけるようにサティは問いを重ねる。今は夜で、念のために明かりの魔法は控えている。明かりといえば、僅かに窓から零れる星明り程度だ。

「猫になったサティは…その、愛らしいだろう…。」

「……。」

その言葉を聞いて、サティはなぜか、はあ…とため息をついた。

「ネズミのピウニーだって似たようなもんでしょう。」

「そういう意味ではない！」

「じゃあ、どういう意味なの。」

「それは、サティが…。」

ピウニー卿は再び言葉に詰まった。サティはそれを聞きながら、全く別の話題を口にした。

「ねえ、ピウニー。」

「なんだ。」

「弟さんはまあ…なんかちょっとアレだけど、妹さんとか、いい人ね。」

サティはパヴェニーアとペルセニーアの2人を思い出しながら言った。髪の色合いも瞳の色合いも、少しずつ違うがよく似ている。何よりも3人に共通するのは、凛々しい、頑固そうな瞳だ。血縁者というものがいないサティには、それがとても新鮮に見える。

「ん？」

「しかも、ピウニー、『兄上』って呼ばれてた。」

ピウニー卿が「兄上」と呼ばれていたのを思い出すとおかしくなって小さく笑った。自分がいつも「ピウニー」と呼んでいる人が、「

兄上」と呼ばれているのを見ると、なんだか自分には馴染みの無い単語でくすぐったい気持ちがしたのだ。

「どうした？」

「なんでもない。兄弟ってちょっと羨ましいなって。」

サティは多分２２、３歳くらいだ。教会で見つけられたときを１歳と数えて、そのくらい。特に子供という年齢ではない。それなのに、兄弟が羨ましいなどという、子供のような言葉を口にしてしまうのは、今が多分夜だからだ。少しだけ物憂い気分になってしまう。

「サティは、…兄弟などは居ないのか？」

「あー…、妹みたいなのは居たけど…。」

「妹みたい？」

「妹弟子？…家族とかそういうのは元々居なくて、…その、ずっと師匠と師匠の家族と一緒に過ごしてたから…。」

なんとなく言い難そうな口調で、サティが隣で身じろぎした気配をピウニー卿は感じる。

「サティ…。」

「あの、別にさびしいわけじゃなくて、どういうものかなって思っただけで…。」

「ああ。」

そういえば、ピウニー卿はサティの身の上話を聞いたことが無かった。理の賢者…という高名な賢者に弟子入りするほどの女性だ。まったく紆余曲折を経ていないわけではないだろう。深く聞くのは躊躇われたが、今はただ、隣で物思いにふけっているサティの横顔が、僅かに寂しそうで目が離せなかった。夜目にもそれと分かるほど、2人の距離は近い。ピウニー卿は、思わずサティの頬に触れた。触れた頬はピウニー卿の手にしっとりと優しく、いつまでも触れていたかった。そして、そう思ってしまう自分の気持ちを自覚しながら、ピウニー卿は身を寄せる。

「ピウ？」

「サティ…こっちを向いてくれ。」

「…え。」

急に吐息交じりの低い声が耳元で聞こえ、大きな手が頬に当てられて引き寄せられる。突然の艶めいた雰囲気に、サティの顔が上気したように赤くなる。夜だから赤くなったなどと分からないだろうが、熱は伝わるかもしれない。しかも、ピウニー卿の声で（人の姿で）囁かれると、魔力に絡められたようにサティは動けなくなった。裸で人間に戻ったときですらこんな風に動けなくなることは無いし、悪態だって付ける。それなのに、服を着ている今、動けなくなる自分の身体は一体どうしてしまったのだろう。

「ね、待って、ピウ…ちょっ、と、」

「…サティ、俺は…。」

何故かサティの心臓が跳ね上がり僅かな抵抗も出来なくなった。ピウニー卿がサティの直ぐ側にもう片方の手を付く。ギシ…と腰掛けている寝台がきしみ、熱い吐息が感じられるほど、ピウニー卿の顔が近付いた。頬を触れていた大きな手が、サティの首筋をなぞるようにうなじに回される。その感触に思わずサティから溜息が零れ、支えられた手の力で逃げることも敵わない。…今にも唇が触れてしまう。

だがしかし、唇が触れる代わりにピウニー卿の身体はサティの猫の体に沈み込み、サティは自分の身体に覚えのある重みがかかったのを感じた。2人の上に、着る者を失った洋服がはらりと掛かる。

「くそっ…またか、またこのパターンか！　全く同じではないか、呪いかこれが！　呪いでなければ納得できん！」

ピウニー卿が騎士らしからぬ独り言をぶつぶつ言いながら、サティの喉元で悔しげにもぞもぞ動いている。
サティは喉元で動くピウニー卿の体温を感じながら、ホッとしたような切ないような、なんともいえない気分になった。

０１３．えーっと…君だね？

ジョシュの元に猫が戻ってきたのは、日が変わる直前だった。侍女や護衛達に窘められたが、ジョシュは起きて待っていた。ペルセニーアは見つかっても見つからなくても必ず報告に来るはずだ。夜着に着替え、ソファで頬杖を突いて考えるのはセラフィーナのことだった。

まったく。どうしてあんな無茶をしたのだろう。いくらジョシュが小さい生き物が飼ってみたいと言っていたといっても、セラフィーナらしくない行動だった。

ジョシュの母は今、懐妊している。ジョシュが生まれてから１２年。待望の第２子だ。つまり、弟か妹が生まれるのだ。ジョシュとて１２歳で、もう王太子としての教育も始まっており、それがどういうことかは分かっていた。だが、不安も大きい。生まれる子が弟でも妹でも、可愛がりたい。守りたい。でも、１２歳で、病気がちで、魔法も剣もほとんど出来ない自分にできるだろうか。それが不安だった。今の自分が、王として立てるとはとても思えない。周囲の貴族達も、生まれる子がどちらかによって、対応を変えてくるだろう。ジョシュはまだ１２歳、だがもう１２歳なのだ。それらへの立ち回りも、うまくやらなければならないというのに。

ここのところ身体の調子が悪かったのは、不安が蓄積している結果だと自覚している。ジョシュの体調は、なぜか気持ちの昂ぶりや不安に左右される。ジョシュの調子が悪いときはジョシュの気持ちも沈んでいるのだ。セラフィーナはそれに気付いている。…だからかもしれない。彼女があんな無茶をして、小さな生き物を連れてきたのは。

…小さい生き物。グレンと名前をつけていたあの猫。ヴィルレー公爵の商隊に紛れ込んでいた、という。出来れば、セラフィーナに返してあげたい。そして、グレンの話をセラフィーナからたくさん聞きたい。ジョシュはそう思っていた。

コンコン…と、控えめなノックの音が聞こえて、侍女がペルセニーアの来訪を告げた。

＊＊＊＊

サティはペルセニーアの腕に抱かれ、ピウニー卿はベルトにつけたサイドバッグに入れられている。

あの後、2人が変身したであろう時間きっかりに侍女部屋に迎えに行ったペルセニーアの目に入ったのは、星明りにうなだれるネズミの姿とそれを見下ろす猫の姿だった。いや…正直ネズミに詳しいわけではないので、あのときのネズミの背中が果たしてどういう感情だったのかは知る由も無いが…あんなに小さな兄の背中を見たのは初めてだった。

ネズミが言葉を話すという事実、さらにその声が兄のものであることを認めれば…この小さなネズミが兄だと思わざるを得なかった。ネズミであっても、この雰囲気と声で「ペルセニーア！」と一喝されれば、「はい、兄上」と答えてしまう。

（なぜか）うなだれている兄をそっと手ですくって、ベルトに取り付けたサイドバッグに入ってもらった。手に触れた毛皮はふわふわと繊細で柔らかく、冷静なペルセニーアにも心地よさが理解できる。なるほど…これは、パヴェニーアが冷静でいられなくなるはずだ。

あの兄は、小さい頃から可愛らしいものが好きだった。アルザス家は、武術の強さと礼儀にだけは相当厳しかったが、それさえ守れば個人の趣味には決して煩くなく、自由に育てられた。ペルセニーアは女だからと多くのぬいぐるみや人形を持っていたが、それらのうち、可愛らしいぬいぐるみに関しては、パヴェニーアがいつも恐る恐る撫でていたのをよく覚えている。

ピウニー卿は宮廷における武官としての役割に興味は無く、多くの騎士達を育て王宮を守る仕事ではなく、国を飛び回る職務を選んだ。彼の職務は国王の親衛隊としてある程度の自由を与えられ、国中の魔物を調査する…という、最前線の中でも最も未知なる戦いに晒される危険なものだった。堅実と言われているアルザス家だが、個人の気質についてはそういった自由で奔放な人間が多い。

とはいえ、兄2人はどちらも真面目で堅物だ。ピウニー卿は国を飛び回り、パヴェニーアは男らしからぬ趣味を持っているが、それだけである。

そんな兄2人を見ながら育ったペルセニーアは、なぜか真面目だけが取柄の性格になってしまった。自分でもつまらぬ性格だな…と思う。こういった性格が災いしてか、縁談も…無くは無いものの特別感情を許したいと思う男もおらず、いい歳になった今でもなんとなく未婚のままだ。自分は騎士であるし、継ぐ家があるわけでもなし、未婚のままでも忠義を守り、国に仕えて生きるのも悪くない…と思っている。そう思うこと自体が、つまらぬ性格だと自嘲する。

ペルセニーアはサティを「失礼いたします」…と優しく断りを入れて、そっと抱き上げた。両手で抱えると猫だから当たり前だが、軽く温かい。

「疲れませんか？」

「大丈夫です。」

「疲れたら、言ってくださいね。」

腕の中のサティを見下ろして、気遣わしげに首を傾げた。サティが腕の中で自分を見上げ、「大丈夫です。」と答えれば…確かに頭を撫でたくなる。ペルセニーアは小さく笑った。そして思う。

ペルセニーアでさえ頭を撫でたくなる猫のサティ。だが、サティを守りたいと一番思っているであろう兄は、今は非力なネズミだ。正義感が強い騎士が、今は守るべきものを持っていたとして、だがその姿はネズミ。騎士としてその胸中は…。

ペルセニーアは2人に心から元に戻ってほしいと願わずにはいられなかった。

＊＊＊＊

「夜分までかかり申し訳ありません、ジョシュ殿下。」

「かまわない。我侭を言ってすまなかった。見つかったようだね。」

「はい。」

控えているペルセニーアをソファに座るよう促して、ジョシュも向かいに座った。ジョシュは真面目なこの護衛騎士が、誰よりも優しく、誰よりも周囲に細やかに気を配っていることを知っている。その優しさに甘えて、見つかるまで待機する…と言った自分が少し後

ろめたい。

「ジョシュ殿下、その猫のことですが…。」

「ペルセニーア…、この猫は…。」

「はい。セラフィーナ嬢が連れてきたのですね。」

「知っていたの。」

「なんとなく、ですが。」

「そうか…。セラフィーナが次に来るまで、僕が預かっていてもかまわないかな。」

ジョシュがそう言った瞬間、びくりとサティが震えた。手に伝わってきたその反応に、ジョシュは猫の顔を覗き込む。苦笑して、少し寂しげに指で喉に触れた。

「早く、セラフィーナのところに帰りたい…？」

「にうぅ…。」

ジョシュの指が触れたとき、サティが低く唸った。ペルセニーアはその声色の変化に気付き怪訝そうにサティを見下ろしたが、話しかけるわけにもいかず、ジョシュに視線を移す。

「ジョシュ殿下。…この猫ですが、他に飼い主がいるのではありませんか？」

「ペルセもそう思う？」

「ええ。…よければ、アルザス家で預かり飼い主を探したいのですが…。」

「それならば、ヴィルレー公爵もそのように手配していると言っていたよ。」

「ヴィルレー公爵にもお話されたのですか？」

「フィーナがね。」

ジョシュは、正直にヴィルレー公爵に猫を連れてきたことを打ち明けたときの、セラフィーナの様子を思い出しながら小さく笑った。

「ならば、ヴィルレー公爵にお伺いしてみます。」

「うん。そうしてくれるかい。…面倒なことになってしまってすまない。」

「とんでもございません。」

内心しまった…と思っているペルセニーアには気付かず、ジョシュはサティの頭を再び撫でた。

「でも、今日は一晩預かってもいいかな？」

「え？」

「え？」

「にゃー！」

男の声が聞こえた気がして、ジョシュは顔を上げてきょろきょろと周囲を見渡す。

「今、何か聞こえなかった？　…ちょっとグレンの鳴き声が邪魔で、よく聞こえなかったけど…。」

「い、いえ、聞こえませんでしたが、何か？」

「気のせいかな…。」

ジョシュは首を捻りながら、話を戻す。

「今日だけでいいんだ。セラフィーナが折角連れて来てくれた猫だし。…ダメだろうか。」

「それは…。」

「しかしだな！」

「うにゃあああああ！」

またも男の声が聞こえた。ジョシュは再び首をかしげる。

「…やっぱり何か聞こえなかった？」

「いえ、気のせいではありませんか？」

「そうかな。」

ジョシュが首を捻っている間に、サティがふんふんとペルセニーアの脇腹に顔を突っ込んだ。ピウニー卿を入れてある辺りだ。何事か…とペルセニーアが上着を開けようとしたが、はたと気が付き、上着に包むようにサティを隠した。ペルセニーアが珍しく声を高くする。

「えーーー、それはですね。ジョシュ殿下。侍女の方々がいい顔をなさらないでしょう。陛下の耳にも入るでしょうから後から知ればなんと言われるか分かりませんし…」

「それは大丈夫。父上には僕からきちんと話すよ。」

「それならば…。」

「にゃ。」

…相談が終わったのか、サティが上着の中から顔を出した。一体どのように話がまとまったのかペルセニーアにも聞き取れなかったが、何かしらの結論が出たようだ。問題はそれをペルセニーアにどう伝えてくれるか…だ。ペルセニーアが…そしてジョシュが、サティをじっと注目している。サティは「にゃあ」と一声鳴いて、とん…とジョシュの座っているソファの上に飛び乗り丸くなった。その様子にペルセニーアは一瞬だけ瞑目し、ジョシュに頷く。

「それならば、明朝兄と共に迎えに来ます。」

「パヴェニーア団長と？」

「ええ。実はあの兄が…、あんな厳つい顔をして大層猫好きでして。えー、その、猫を気に入りまして。」

「ああ、だから、アルザス家で面倒を見たいと…？」

くすくすとジョシュが笑った。ペルセニーアは澄ましている。「あんな厳つい顔」というが、ジョシュにとっては頼もしい実直な騎士団長だ。剣術を充分に習うことはできていないが、騎士の心得を教えてもらったことが幾度かあった。

「分かった。パヴェニーア団長が来たら、通すように手配しておくよ。」

「ありがとうございます。」

ペルセニーアがほっとしたようにジョシュに頷いた。…顔を引き締めて敬礼すると、ちらりとサティに眼を向けた。サティはグリーンの瞳でペルセニーアの琥珀色の瞳を見返した。小さく頷き、尻尾をぱたんと揺らす。

＊＊＊＊

一晩一緒に居たい…と言ったのは、やはり猫がとても可愛かったからだ。一度触れた温かい体温は手に心地よく、離れ難かった。毛が付いてしまうと侍女がいい顔をしないだろうから、ジョシュは室内にいくつか置いてある大き目のタオルを枕元に敷いて、そこに猫を置いた。頭をそっと撫でて、自分も寝台に潜り込む。じっと猫を見つめていると、ぱたんぱたんと尻尾が揺れた。ぽんぽんと自分を寝付かせようとしているかのように、長い尻尾ですぐ近くのシーツを叩いている。思わず笑って、背中を撫でると、猫は、くか…と欠伸

をした。今度は少し近づいたジョシュの肩を、尻尾で叩き始めた。その尻尾の揺れを見ていると、ジョシュもだんだんと眠くなってくる。そして、いつの間にか、眠ってしまったのだ。

ジョシュの目が覚めたのは、空が少し白み始めたときだった。

「…あー…、なんかやっかいごとに巻き込まれそうな気がする…。」

寝台の下からそんな女の声が聞こえてきたのだ。寝台でビクリと身体が震える。硬直していると、すとんと寝台が揺れた。ジョシュの開いた瞳と、猫の綺麗なグリーンの瞳が…パチリと合う。途端に猫の頭の毛がぶおおおおと逆立ち、瞳孔全開で、ジョシュを見つめていた。

「…今の、君かい…？」

ジョシュの驚いたような声に、猫の耳がぴっとひっくり返った。

「にゃ…にゃーん…。」

「えーっと…君だね？」

ばれた。

＊＊＊＊

サティがジョシュの下に残ったのは、気になることがあったからだ。

サティは、ペルセニーアのマントに隠れてピウニー卿に「ごめん、一晩だけ殿下のところに行く。」…と伝えたのだ。当然、ピウニー

卿は猛烈に反対した。だが、「ちょっと気になることがある。」と言って聞かなかった。さすがに今回はピウニー卿は一緒には無理だ。姿を現すなとペルセニーアから念を押されているし、上手く隠れることが出来たとしても、その後気付かれずに脱出できるかどうかは微妙なところだ。

サティは、無理を押しても少し調べてみたいことがあった。ジョシュが寂しげにサティの喉下に触れたときに、奇妙な魔力の流れを感じたのだ。なぜか、ジョシュから、魔力を無理矢理押し込めて歪めているような…そんな気配がした。もしかしたら、ジョシュの体調が不安定なのはこの力の流れのせいなのではないか…そんな気がしたのだ。

サティは魔法使いだ。こうした魔力の揺れや歪みにはやはり興味があった。それがジョシュの体調に影響しているとなれば、なおさらだ。だから、ピウニー卿に無理を言った。かならず明日には戻るから…と言って、半ば無理矢理残ったのだ。

通常、魔力というのはどの人間にも宿っている。だが、その量は人によって様々だ。もちろん、血統などによっても左右される。量が多ければ魔法使いに向く…と一般的には言われているが、基本的には素質は量だけとは限らない。魔法はさまざまな系統に分かれているが、魔力も系統ごとに得手・不得手がある。たとえば、ピウニー卿は剣を媒体とした破壊魔法は使えるが、他の魔法系統は全く使うことができない。サティは身に宿る魔力が人より多く、物理的に使いこなせる系統が多方面に向いている。ただし、本来はサティのように多くの系統に向いた魔力の方が、珍しい。

サティのように魔力を豊富に持つ人間は、バランスを崩しやすい。満ちたコップを揺らせばすぐに水が零れてしまうのと同じで、こう

した魔法使いは、魔力を体内から零さないようにバランスを取りながら生活する必要がある。もちろん小さい頃からそれを訓練し、サティも息を吐くように魔力の均衡を保っている。魔法使いが杖などの安定した魔力の媒体を持つのは、そういう意味でも必須なのだ。

幼い頃に魔力を上手く発動することが出来ず、身の内に無駄に魔力を溜め込んだり、不意に揺らされて壊れたり…ということは多い。もっとも、それほどの魔力の持ち主は滅多に生まれることは無い。それなりの魔法使いの系統に、たまに生まれるかな…という程度だ。だからこそ、ジョシュにサティが感じている魔力の歪な流れは、速く対処しなければならないとサティを焦らせるには充分だった。

ただ、ジョシュの魔力の流れは、どこかおかしい。別のところからコントロールされ、押さえつけられているような感覚だ。どこからか…。サティは、自分の身体に3分の1だけ戻ってきている魔力に集中した。ジョシュの魔力が歪められている圧力…寝台の下。そう感じたサティは、ジョシュを起こさないようにそっと床に下りた。猫の小さな身体で寝台の下に潜り込む。

一番弱い光の呪文を唱えて、寝台の下を覗く。

…サティがそこに見たのは、ジョシュの魔力が出来る限り発動しないように封じ込める複雑な術式だった。

０１４．理の賢者の弟子

「もしかして、寝台の下を見た？」

ジョシュが身体を起こし、サティに向かって首を傾げた。グリーンの瞳の瞳孔が開き、毛が逆立つ。尻尾が膨らみ、耳が裏返った。その様子を見て、くすくすとジョシュは笑う。ふ…と、ジョシュの瞳に１２歳らしからぬ、どこか達観した光が揺らめいた。

「…誰にも言わないで？…グレン。寝台の下を見たのでしょう。…魔力を封じる、魔法陣。」

「あ、あれは。」

サティが観念したように口を開いた。

「うん。」

その声を聞いて、ジョシュは満足気に頷く。

「君は、この魔法陣を書いた人？」

ジョシュの瞳が、…悲しそうに沈んだ。その瞳を見て、サティは慌てて頭を振る。

「違います、ジョシュ殿下。」

「本当？」

「本当です。…ジョシュ殿下、殿下はあれがどのようなものか…ご存知なのですか。」

「うん。…少しだけ、こっそり勉強したから。」

ジョシュは知っていた。幼い頃から、自分の身体を巡る特殊な力。自分の体内にある、不思議な力が「魔力」というものであること。その魔力が、魔法使いたちによってどのように使われているかということ。とても幼い頃だったが、理の賢者という人に1度だけ習ったことがあったからだ。理の賢者はすぐに王宮から居なくなってしまったため、その力の使い方まで学ぶことは出来なかった。…そして、学ぶことも許されなかった。魔力を扱うという力の流れを認識すると同時に、ジョシュは身体を壊したのだ。6歳の頃、ジョシュは初めて倒れた。その後は、魔力を自分でコントロールしようとすると無理矢理引き剥がされるような感覚に陥るようになった。そのせいで、眩暈を覚えたり熱を出したりしたのだ。

魔力を意識できるようになった人間は、自身の魔力の系統によっては魔力の流れを知ることができる。ジョシュは部屋の1点から自分を押さえる特殊な力の流れに気付き、寝台の下に潜ったのだ。そして気付いた。自分の魔力を抑える為に、記述された魔法陣の存在。最初はもちろんそれがどういったものかは分からなかった。だが、図書室などで独学で魔法語を勉強をするうちに、なんとなくだが、その内容がどういったものかが分かるようになった。あくまでも独学だ。詳細なところまでは分からない。ただ、自分の魔力を封じ込め、時折揺らしている。そういった内容だった。

最初は正体の分からない魔法陣が怖くて、その効果が分かったときにはそれが知れたときに宮廷に及ぶ効果を図りかねて、…ジョシュはずっと黙っていた。父にも、母にも、医者にも、誰にも言ったこ

とは無い。王宮の人達は、皆、自分が６歳の頃に体調を壊し、原因不明の熱や眩暈で体が弱いと思っているはずだ。

そんなジョシュの見解にサティは内心舌を巻いた。確かにジョシュの認識している通りだ。あの術式は恐らく術者のオリジナルで、ジョシュのために組んだものだ。サティも一見しただけだったが、ジョシュの魔力に合わせ、ジョシュ自身の魔力を押さえ、揺らすように組まれていることが分かった。範囲は王宮全体を薄く覆う広いもので、そして、恐らくその目的は。

「ジョシュ殿下。」

「うん。」

「あの術式の目的はお分かりですか？」

「…いや…何をしているかは分かったけれど、目的までは分からない。グレン、君には分かるの？」

サティには…分かった。あの術式の目的は、ジョシュの身体を壊さないようにしているのだ。ジョシュの魔力の発動を抑え、発動を抑えることよって偏ってしまう魔力を時折揺らして分散させる。その度に体調は悪くなるだろうが、ジョシュは魔力の暴発によって死ぬことは決してないだろう。…恐らくそういう目的だ。サティも幼い頃にそういう類の術を施されていた時期があった。だから分かる。

魔力が強くそれを正常に操ることができなければ、子供の頃は、魔力を暴発させたり、体力ごと一気に枯渇させたりして、命を落としてしまうことがある。だから、命の危険があるほどの魔力の大きな子供が生まれれば、必ず魔法使いの手に預けられ処置が施されるの

だ。小さい頃に一度魔力を抑え、徐々にそれを緩めていくのが定石だ。ジョシュは、魔力の暴発によって万が一が起こらないように、綿密な魔方陣が練られていた。だが、ずっとこのままでは、ジョシュは魔力の使い方を知ることの無いまま病床で過ごさなければならないだろう。…一体誰が何の目的で、このような術を施したのか。さまざまな可能性が考えられる。ジョシュに大きな魔力を持ってほしくない人、ずっと病気のままにしておきたい人、あるいは、ジョシュに絶対に、万が一が起こってほしくない人。

サティは頭を振った。ジョシュはどこから見ても利発的な王子だ。ちゃんとした教育を施せば、このまま立派な王太子になれるだろう。だが、魔力を抑えられている。放っておいても彼は死ぬことは無い。だが、それは王太子として必要な力と身体を、持てないことを意味していた。

「ジョシュ殿下。」

「うん。」

「私の名前はサティといいます。」

「サティ。」

「はい。」

サティ。…ジョシュが、口の中で何度か反芻して、嬉しそうに微笑む。

「そうか、サティ。」

「私は、理の賢者の弟子の、サティです。」

ジョシュの瞳が大きく見開かれた。

＊＊＊＊

翌朝、ジョシュの部屋にペルセニーアとパヴェニーアがやってきた。サティとすっかり仲良くなったジョシュが、応対する。

「おはよう。ペルセニーアもパヴェニーア団長も、昨日はありがとう。」

ペルセニーアとパヴェニーアが敬礼を施す。その様子にジョシュが頷いて、椅子を勧めた。二人は腰を下ろす。ジョシュはサティの頭を撫でながら、切り出した。

「この猫のことなんだけど…。」

「ジョシュ殿下、あの。」

「うん。ペルセ、大丈夫。」

何か言いかけたアルザス家の2人を遮って、ジョシュは頷いた。

「この猫は、サティといって理の賢者のところの猫だそうだ。」

「…はっ…。は？」

思わずペルセニーアとパヴェニーアはサティを見た。サティはそ知

らぬ風を装って、尻尾をぱたぱたと揺らしている。

「理の賢者の使いで杖の賢者のところに出向くはずが、道に迷ってしまったらしい。」

「…は、あ。」

「僕が王宮の人間を動かすわけにはいかないから、アルザス家で杖の賢者のところまで送り届けてもらえないだろうか。」

「それは、かまいませんが。」

「それから、ペルセニーア、パヴェニーア団長。」

ジョシュが、低い声で2人の忠義な騎士の名前を呼んだ。その声は12歳の少年の声ではなく、威厳の込められた王太子のもので、思わず2人は背筋を伸ばす。

「猫が迷い込んだことは知れているけれど、理の賢者のことについては、君達2人と僕とサティしか知らない。セラフィーナのこともあるからヴィルレー公爵には話すけれど、…それ以外には他言無用だ。いいね。」

「はっ。」

座したままではあるが、騎士の一礼を施した2人に、王太子の態度を崩してジョシュは微笑んだ。

「ありがとう。ヴィルレー公爵には僕から伝えておく。それで…もしよかったら、送り出す前にセラフィーナのところに寄ってもらえ

ないかな。」

「恐れ入りますが…殿下、その、猫のことをどこで？」

ペルセニーアの疑問には、微笑んだままジョシュは片目を瞑った。

「それは秘密。」

「秘密…ですか？」

「うん。ね、サティ。」

サティが顔を挙げ、すり…と顔をジョシュに摺り寄せた。

「さあ、サティ。理の賢者によろしく伝えておくれ。」

「にゃーん。」

ジョシュがサティから手を離すと、サティは両手を広げたパヴェニーアを無視してペルセニーアの膝の上に乗った。パヴェニーアは行き場を失った両手を落とし、がっくりとうなだれる。

「ありがとうございます、ジョシュ殿下。今から少しお暇を頂いても？」

「今日は君達は非番と聞いている。アルザス家に戻ってもらって構わないよ。ヴィルレー公爵は今日も来る予定だから、サティのことはそのときに伝えておく。」

「分かりました。それでは。失礼いたします。」

アルザス兄妹が立ち上がり、ジョシュに再度敬礼を施した。ペルセニーアは片方の腕にサティを抱えている。2人の様子を見てジョシュも立ち上がって頷く。ジョシュは、ペルセニーアが抱き寄せるサティの右前足を取った。

「またね、サティ。」

そうして、ちゅ…と、サティの右前足にキスをした。サティは、ジョシュの腕にすり…と擦り寄る。

「サティ！」

「うおおおおっふぉん！」

突然、低く響く声がサティを呼んだような気がしたが、パヴェニーアのやたら大きな咳払いが被る。

「…パヴェニーア団長？」

「いえっ、なんでも。」

微妙に怪訝そうなジョシュの表情に、ペルセニーアが助け舟を出した。

「兄は、サティのあまりの可愛らしさに平静を失っているようですね。」

「ああ、サティはとっても可愛いものね。」

「ペ、ペルセニーア！」

ジョシュはくすくす笑いながら頷いて、ペルセニーアとサティから一歩離れた。ダシにされたパヴェニーアは顔を真っ赤にしながら、ペルセニーアに抗議しようとするが、妹は何食わぬ顔をしていた。

それにしても。

ピウニー卿は12歳の子供が猫のサティ（の前足）にキスしたくらいで動揺するような男だっただろうか。まこと恋とは人を変えるものだな…と、ペルセニーアは思ったが、言葉にすることはせず、己の身の内に止めておいた。

もっともそれが恋なのか何なのかは、本人に聞いたわけではないから知る由も無いが。

＊＊＊＊

ピウニー卿はサティを連れて、アルザス家に戻ってきた。

無事連れて帰った後、パヴェニーアが何に触発されたか、「改めまして、アルザス伯爵パヴェニーアと申します。」…と、パヴェニーアがサティの右前足を取ろうとしてピウニー卿にみっちり怒られるという出来事があったが、概ね無事に移動することが出来た。

あらかじめ、執事と侍女頭、そしてパヴェニーアの妻であるセシルにのみ事情を説明しておき、2人は他の家人の目に触れないように、客人として離れで過ごしていた。1年ぶりのピウニー卿の帰郷はネズミの姿だったため容易には信じてもらえなかったが、人間に戻って見せればなんとか信じてもらうことが出来た。執事も侍女頭も泣

いて喜び、なぜかサティも「あのピウニーア様が女性と共に！」などというよく分からない歓迎を受けて、久々に人間の姿で一休みすることが出来たのは幸いだった。

サティはアルザス家ではもちろん、客人として扱われている。正直こういった場所でどのように過ごせばいいのか分からず戸惑っていたが、パヴェニーアの妻セシルやペルセニーアが何かと世話を焼いてくれるので、暇ということはあまり無かった。

最初にピウニー卿とサティ、そしてセシルが顔を合わせたとき、2人は猫とネズミの姿だった。セシルは目を丸くして、「まあ…」と感嘆の声を零す。

「あのピウニーア様がこのような可愛らしい姿でこのような可愛らしい女性を連れて帰ってくるなんて。」

そして恥らいながら、こう言った。

「あの…お2人にその、触れてもかまいませんこと？」

ピウニー卿の髭がピーンと張り、後ずさる。サティの毛皮がぶわわわと逆立った。セシルは期待に満ちた目でこちらを見ている。その表情を受けたピウニー卿が困ったように咳払いしていると、不意に頭上が陰った。

「あー…セシル殿？…むほっ！？」

…なんだ…とピウニー卿が見上げたと同時に、ばふ…と暖かな毛皮に包まれた。サティがピウニー卿の上に乗っかったのだ。お腹の毛がふかふかしていたため、つぶれたりすることは免れたが、微妙に

苦しい。そして暑い。

「ちょ、サティ、何だ。」

「…。」

ピウニー卿が毛皮を掻き分けて喉元から這い出てきた。すると、サティが前足を組んで顎を置く。完全に出さないようにしているらしい。どういうつもりかとピウニー卿がもぞもぞしていると、そんな2人を見てセシルが笑った。

「まあ…。」

セシルが頷き、サティの頭にそっと触れる。

「サティさん、わたくしとしたことが出すぎたことを申し上げてしまいましたわ。」

「あの…。」

そういって、そっと身体を低くするとサティに目線を合わせてくれた。

「もしよければ、ご一緒にお茶にしましょう。冷たいお茶をお淹れします。…お義兄様はパヴェニーアに任せて。」

「セシルさん…。」

「はい。」

「あの、失礼なことをして…すみません。」

「まあ。いいのですよ。こちらこそ、不躾なことを申し上げてしまいましたもの。本当に、ごめんなさいね。」

ちょっとだけ悪戯っぽく笑ったセシルの表情を見て、サティは前足を組んでピウニー卿を閉じ込めたまま、しょんぼりと耳を寝かせた。なんだかすごく子供っぽいことをしてしまった気がする。「いくら毛皮に触れたい」と言ったとしても、自分の実家に帰ってきたピウニー卿を、その家の人から隠してしまうなんて大人気ない。パヴェニーアの様子とは違ってセシルはとても控えめだ。動物に触りたい…と思う人間はサティだってこれまでたくさん見てきているし、それに擦り寄って餌を貰うという処世術だって使ってきた。セシルだって悪気が無かったわけじゃない、思わず言ってしまったのだろう。すぐに手を引っ込めてくれたし謝ってもくれた。でも。

でも、ピウニー卿の毛皮が他の女の人に撫でられるのは…何故か、なんとなく、嫌だったのだ。

そんなサティの気持ちを汲み取ったのか。それからセシルは何かとサティの世話を焼き、短い期間の内にすっかり仲良くなった。

ちなみにやっとこ這い出てきたピウニー卿が「サティ、どうかしたのか？」と聞いて「別になんでもない。」…と、つーんと顔を逸らされ、訳が分からずあたふたしている様子を見て、セシルの顔はさらに綻んだという。

＊＊＊＊

その夜。

サティがピウニー卿を誰の目にも触れさせないようにお腹に包みこんだあの様子について、「とても可愛かったわ…」と散々、夫パヴェニーアに自慢し、それを聞いたパヴェニーアが「…それはっ、それは可愛かっただろうな！　分かる！分かるぞセシルよ！」…と力強く同意し、「まあ、あなたならきっと分かってくれると思ってたの！　」…とセシルが夫の手を取り、うふふあははと、それはご機嫌だったとか。

アルザス伯爵夫妻は、愛らしいものが好きな夫妻であった。

０１５．髭を剃れということか

ピウニー卿は人の姿に戻ってから、パヴェニーアやペルセニーアに請われて地下の訓練場で剣の手合わせをし、馬の手配、荷造りなどの作業をしていて、サティとの時間はほとんど取れていなかった。一日のうちの３分の１しか人間に戻れない…というのは存外不便だ。人の姿で在るうちにやっておきたいことはたくさんあるが、それらを全てこなせば大体いい具合に８時間が過ぎてしまう。そんな風に２日程過ごして、そして今、やっと２人きりなれた。家人達は２人に変な気を回して、猫とネズミに戻るまでは離れに近づきませんから…とかなんとか言っている。

ピウニー卿はサティが座っている隣に座った。

少し伸びた薄い色合いの金髪に、時折剃ってはいるものの、再び伸び始めた無精髭はそのままだ。それでも騎士然としているのはさすがだろう。精悍で頑なそうな表情は変わらずである。

サティは人間に戻ってから、ずっとなにやら魔法陣や魔法語のようなものを書きとめていた。ジョシュの部屋で見た魔法陣を、頭の中で整理していたのである。大方の事情を聞いているピウニー卿はそれを覗き込んだ。

「理の賢者殿には連絡が取れそうか。」

「呼びかけてはいるよ。多分大丈夫だと思う。」

ピウニー卿は頷く。王太子の事情については、国王にも話さないで欲しいというのがジョシュの意向だった。とはいえ、ずっとこのま

まにしておくわけには当然行かない。サティは理の賢者に話を通すことを約束し、…同時に、ジョシュの身体が心配だったサティは、彼に近しいアルザス家の兄弟にのみ話を打ち明けた。

「解けそうか？…私には魔法は詳しくは分からんが…。」

「そうね。…時間をかければ大丈夫だと思う。問題は…」

問題は、解いた直後だ。何の手も施さずに解除すれば、急に解放された魔力を制御しきれない危険性がある。特に１２歳…ということは、成長に伴い魔力が増加している途中の時期のはずだ。それを制御するのは、慣れるまでジョシュにとってかなりつらいものになるだろう。

「私も小さい頃に魔力抑制されてたから分かるんだけど…。」

「サティも？」

「うん。」

サティは思い出す。魔力を抑制されている状態で魔力を使う訓練。大きすぎる力に振り回されないように、自身の耐性を強くする訓練。手足を鍛える為に重りを付けて生活するようなものだ。小さい頃はそれがつらかった。

「つらかったけど、魔法使いになりたいと言ったのは自分の癖に、訓練がつらいと思う自分が一番情けなかったな…。」

そういって、サティは苦笑した。

それでもなんとか解いてあげたい。自分の力を持て余す不安さを、サティは痛いほどよく分かる。ジョシュは体調を犠牲にして、それを押さえ込んでいる。しかも、1人で事態を抱え込んで、不安でつらいに決まっているのだ。

ピウニー卿がそっとサティの横髪を梳いた。

少しだけ不安げなサティの横顔を見て、ピウニー卿は再び自分の心が疼くのを感じていた。人間に戻ることができるようになってからではない。サティと過ごすようになってから、ずっと心が落ち着かないのは、予想以上に自分でももてあまし気味の感情だった。だが、心地よい。悪くは無い。ピウニー卿はセピア色の髪に手を差し入れ、髪を掛けるように耳をなぞった。その感触にサティの肩が揺れ、驚いたような表情でこちらを見返した。

「ピウニー？」

「サティ、どうかしたのか？」

「なにが？」

「不安そうな顔をしておったぞ。」

ピウニー卿の言葉に、サティの瞳が大きくなった。元々大き目の綺麗なグリーンの瞳でピウニー卿を見つめ返し、突然ふい…と瞳を逸らす。頬が僅かに染まっているようだ。そんな風に視線を逸らされると追いかけて、触れたくなる。

「サティ。」

小さく名前を呼んで、伸ばした手で顔を強引に引き寄せる。「ピウニー…、どうし…。」

『ふぉーーーーふぉふぉふぉ。おうおう、久々じゃのう、サティ！
呼びかけてくれとったのに、さっさと出てこれんと悪かった悪かった。…おっとっと、これはお邪魔じゃったかの？』

サティの戸惑うような言葉の途中で、理の賢者が長いお髭を撫でながら薄ぼんやりと現れた。今にもサティに顔を寄せんとしていたピウニー卿は、サティの顔を引き寄せた姿勢のまま理の賢者と瞳が合う。

「こっ、ここここっこ理の賢者殿っ」

『ほうほう。お久しぶりじゃのう、ピウニー卿。いやはや、もう少し待ったほうがよいかの。』

「そうですね、あともう少し待っていただければ…」

「いーーえっ、そんなことないです、今で大丈夫です。」

『これこれサティや。そんな心にも無いことを言うんじゃないぞ。』

「こっ、心にも無いってどういうことですかっ！？」

『あと5分待てと顔に書いて…』

「師匠！」

なぜか問答無用で迫ってくるピウニー卿を押しやりながら、サティ

は賢者に向き合った。

「師匠、何故いままで何回も呼び出したのに呼応してくださらなかったのですか！？」

『だって。』

理の賢者は相変わらず、ふぉふぉふぉと笑いながら髭を撫でている。

『古のことわざにあるじゃろう。人のなんとかの邪魔をするものは馬に蹴られると。』

「なんとか！？　なんとかってなんですか師匠っ！」

『なんとかはなんとかじゃよ。のう、ピウニー卿。』

サティに押しやられたピウニー卿は、「くっ…一体誰が私の味方なんだ…！」…などと呟いていた。

＊＊＊＊

『ふむ…ジョシュ殿下がのう。』

「はい。師匠はご存知でしたか？」

『わしがジョシュ殿下にお会いしたのは7年ほど前じゃ。そのときはまだ、魔力もそれほど成長しておらんかったのじゃろう。上質な魔力じゃとは思うとったが。』

理の賢者はふむ…と何事かを思案していたが、不意にピウニー卿に

目を向けた。

『アルザス伯爵はどのようにお考えなのかの？』

「理の賢者殿に相談し、一任する…とのこと。それ以上のことはせず、他言も致しません。」

理の賢者の言葉にピウニー卿が答えた。パヴェニーアは今この場に居ないが、伯爵家の意図としてはその通りで間違いない。

『ふぉふぉふぉ…肝心なところはワシ任せじゃのう。』

相変わらず飄々と笑っている理の賢者だったが、ふと真顔に戻って首を傾げた。

『…サティや。』

「はい。」

『件（くだん）の魔法陣をまとめたものは、用意できておるか。』

「こちらに。」

サティは、先ほどまで纏めていた魔法陣の術式と魔法語を記述した紙を自分の目の前に持ち上げた。それをまじまじと見つめながら、理の賢者は若干厳しめの瞳を見せた。

『ふむ…。よかろう。お主らがこちらに来るまでの間に、解析をしておこうぞ。』

「ありがとうございます。もうよろしいですか？」

『うむ。概要は覚えたぞ。…サティも覚えておるのじゃろう？』

「ええ。」

魔法陣や術式を記憶するのは、サティの得意とするところだ。魔法陣などに限ってだが、大体1度見て内容を掴めば、記憶することができる。これは理の賢者にも、もちろん言えることだ。

「師匠。」

『ふむ。』

「この魔力抑制は何のために行われているのでしょう。」

『ふうむ。殿下を魔法使いにしたくない、もしくは、殿下を危険な目に合わせたくないか…のどちらかじゃろうのう。』

ピウニー卿が怪訝そうな顔をする。

「しかし…後者であるならば、サティのように徐々に訓練をするなどの方法があったのでは？」

『それでも絶対に大丈夫じゃとは言い切れんのじゃよ。ピウニー卿。サティとて同じじゃった。』

「え？」

理の賢者がさらりと言った。思わずピウニー卿がサティの横顔を見

たが、サティは「そうなんですよね。」と言っただけで、特に何の感慨も浮かべていない。

『さて、ワシはそろそろ戻るとするかのう。』

「…賢者殿…」

ピウニー卿は思わず理の賢者を呼び止めたが、何を聞けばいいのかも分からず、口を閉ざした。サティが少し首を傾げてピウニー卿を見たが、その視線には気付かず、難しい顔をして黙ったままだ。理の賢者は2人を眩しげに見つめる。

『ピウニー卿、サティをよろしく頼みますぞ。』

「は？…はっ、必ず守ります。」

「はい？　何それ。」

『ふぉふぉふぉふぉふぉ、ではさらばじゃ。』

慌てて理の賢者の声に答えた騎士と、怪訝そうに首をかしげる弟子を残して、賢者は消えた。

＊＊＊＊

「一体どういう意味なのよ師匠。」

「サティ。」

ピウニー卿が少し強めの口調で呼んだ。

「何？」

「その…絶対に大丈夫とは言い切れない…というのはどういうことなのだ。」

「それは…そのままの意味だよ。」

本当に、そのままの意味だ。たとえ魔力を抑制していたとしても、それを徐々に弱める過程で絶対に綻びは生まれる。抑制を弱めた直後は特に顕著だ。急に重りを外せば手も足も勢いよく動き出す。それと同じで、急に緩くなった枷の反動に戸惑うことも多い。だからジョシュの魔力抑制も、解除していくときが一番難しいはずだ。絶対に大丈夫だと言い切れないからこそ、心配なのだ。

サティの肩が、突然抱き寄せられた。バランスを崩したサティの身体が、ピウニー卿の腕に包み込まれる。「絶対に大丈夫とは言い切れない」訓練を、小さい頃に施されたというサティの話と、それを淡々と話す表情が、思いのほかピウニー卿を切なくさせたのだ。一瞬、どうしても目を離したくない、どうしても離れたくない…という思いに囚われる。いつに無い強引な行動に、サティが僅かに焦ったような顔でピウニー卿を見上げた。

「…何、ピウニー？」

「サティ、お前が…。」

「ちょっと、ちょっと待っ…て、…ぅ…」

サティは、きゅ…とピウニー卿に抱き寄せられていた。熱い吐息が

髪の毛に掛かり、どうやら唇が髪の毛越しにサティのこめかみに押し付けられたようだ。サティを求めて徐々にそれが下がってくる気配と、ごつごつとした大きな男らしい指が髪を掻き分けてくる感触が熱い。触れ合っているのは小さくて柔らかなお腹とふわふわの毛皮ではなく、自分よりもはるかに逞しくて力強い男の身体だというのも落ち着かない。

胸が詰まるような心地をサティは覚えた。最近、人の姿で2人きりになると唐突に色めいた雰囲気になって、それが心地よいようなむずがゆいような気がするサティは、素直にそれに身を任せることができないのだ。だが、こんな風にピウニー卿に包み込まれていると、「やめてよ」…と退ける一言がどうしても言えない。

サティは逃げることにした。

「あの、ピウニー…」

「なんだ。」

「私、お風呂入りたい。」

「あ?…あ、ああ。」

抱き寄せてサティに触れていると、名前を呼ばれた。ピウニー卿はサティの身体を少し離し、そのグリーンの瞳を見下ろす。するとその口から発せられた、突然の風呂発言。何故かピウニー卿の顔が赤くなった。えー、あー、この状況で風呂…か…。人間に戻ったあと、すぐに風呂を使っていたと思うが…このタイミングでそれを言い出すということは、つまりどういう解釈が当てはまるのだろうか。ピウニー卿は腕を緩めて、「あちらだ」と、部屋の奥を指した。汗を

流す程度の簡単なものならば、部屋に付いている。

「ありがとう。」

ピウニー卿の腕を抜けると、サティはそそくさと立ち上がり部屋の奥へと駆けていった。ああ、そんなに慌てると転ぶぞ。セピア色の揺れる髪を瞳を細めて見送りながら、何故かピウニー卿も立ち上がる。今はサティとこの小さな離れに2人きり。ピウニー卿は無意味に部屋をうろうろした。

少しばかり待つと、本当に汗を流しただけなのだろう、サティが風呂から出てきた。セピア色の濡れ髪をタオルで拭きながら、先ほどまで着ていた服を着崩している（ように見える）。妙に色っぽいサティの腕を強引に引くと、湯で上気した肌がほんのり温かくピウニー卿の腕に伝わってきた。もう片方の腕を背に回し、腰まで這わせる。その感触がサティの身体をぞくりと揺らしたのが、ピウニー卿にも分かり、こうしていると自分の息が上がる。ピウニー卿はそっとサティの名前を呼んだ。

「サティ…？」

「あああ、あのっ…。」

サティが腕を突っ張って身体を離してきた。妙に緊張している様子が可愛らしく、ピウニー卿も思わず腕を緩める。

「…ピウニーも入っとく？」

「え？」

「ピウも、お風呂に入っとく？」

「ええ？」

「入らないの？」

「いや、あ、ああ…。」

一緒に？…いや、ない。既に入っている現状から分析してそれはない。…ということは、暗に風呂に入れといわれている…？　しかし自分はそんなに汗だくだっただろうか？　汗臭かっただろうか？　ピウニー卿はいささかショックを受けたが、腕の中で上目遣いに言われたら流石に嫌とは言えなかった。騎士たるもの、淑女をその腕に抱くのに、汗だくではいかんだろう。…いや、もう一度聞くがそんなに汗だくだっただろうか。待てよ、これか！髭か！髭を剃れということか！…旅立つ前に一度くらいは剃っておかないといくまいな。浮上してくる様々な思いを口にすることはなかったが、ピウニー卿は顎を撫で「じゃあ、入るか」などと言いつつ、風呂に向かった。

ピウニー卿が浴室に入った直後。

「ふおおおおおおおっ！」

男の悲痛な叫び声が聞こえる。

時間切れだった。

サティは扉を押して浴室に入り、水浸しの床に転がっているピウニー卿を口で咥えて救い上げてやった。ふかふかタオルを用意して、

その中にピウニー卿を落とすと、前足でちょいちょいと転がしながら拭いてやる。

「ごめん、あの…どうしてもお風呂入っておきたくて…ピウニー大丈夫？」

獣になる前に人の姿で風呂に入っておきたい…というのは、ささやかな女心だ。

「いや…この程度。」

わざとか？　わざとなのか！？　…ピウニー卿は動揺を悟られないように髭を撫でて平静を装った。

もちろん風呂だけではない。

女心というのはもっと複雑でもっと可愛らしいものだ。

ただ残念なことに、ピウニー卿は剣の筋は分かっても女心には疎かった。

サティはため息をついた。

自分がどうしても、こうした雰囲気を誤魔化したくなるのは…。

016．あのね、だから。

ヴィルレー公爵の屋敷で、ペルセニーアとヴィルレー公爵は向き合っていた。ヴィルレー公爵の隣にはセラフィーナが座り、その膝の上ではサティが喉をごろごろと鳴らしている。セラフィーナはどことなく、寂しそうだ。

ペルセニーアは理の賢者と猫の関係のみをヴィルレー公爵に打ち明け、ジョシュが魔力抑制を受けていることについては秘しておいた。信用が置けない…という問題ではなく、まずは理の賢者に相談したい…という、それはジョシュの意向だとサティから聞かされた。サティはあの夜、ジョシュに魔法の内容の概要を伝え「必ずなんとかする」と約束したそうだ。ジョシュ自身がどう考えているかは、ペルセニーアは伺い知ることは出来なかったが、サティの話が本当であれば、ジョシュは将来有望な魔法使いになる可能性がある。ジョシュに掛けられている魔力抑制が、それを阻止しているのか、それとも純粋にジョシュのために施されているのか、目的が異なれば、術を施した人間も異なるだろう。…可能性としては、ジョシュの身体を守るために、国王自身がそれを行っているかもしれないのだ。サティからその可能性を示唆されたときに、まさかとは思ったが、それほど、ジョシュの魔力というのは大きく不安定なのかもしれない。

そのような事情もあったし、何よりサティがアルザス家を信用してくれたからこそ、こうした秘密を共有しているのだ。その信用を裏切るわけにはいかない。ジョシュの魔力抑制については、いくらヴィルレー公爵であっても秘密を貫き、より一層、かの王子の身を守ろうとペルセニーアは誓っている。

「じゃあ、グレン…んーん…サティは、家では飼えないのね。」

セラフィーナの寂しげな声が聞こえた。その声を受けた、ヴィルレー公爵がゆっくりと娘の頭を撫でる。

「探している人がいるのならば仕方がない。きっとその人もサティに会いたがっているよ。」

「そうね…。」

ヴィルレー公爵は、ペルセニーアから事情を聞く前に、あらかじめジョシュから話を聞いていて大方の事情は知らされていた。ジョシュははっきりと「猫が話す」とは言わなかったが、理の賢者の話が出てきたということは、そういうこともあるのかもしれない。ジョシュはそのような嘘をつく人間ではない。いずれにせよ、人語を解する猫が王宮に紛れ込んだとなれば、どこぞの誰の間者かと騒ぎだてるものも居るだろうし、知っている人間がごく限られた…しかも、ヴィルレー公爵も信用できる人物であったことには安心していた。

アルザス伯爵家は、堅実な武門の名家として知られている。国王の覚えもめでたく、次男のパヴェニーアは若くして白翼騎士団の団長に、長女のペルセニーアはジョシュの護衛騎士となっている。長男ピウニーア…ピウニー卿はほとんど宮廷に関わっては居ないが、それというのも、国王の命によって、国の要所に出没する魔物を討伐・調査する任に着いていたからだ。籍は国王の親衛隊。国中を動いていたため意図して役職を与えられてはいなかったが、国王の信頼厚い騎士として宮廷では有名だった。そのピウニー卿も1年と少し前、魔竜の討伐に出向いて亡くなっている。

もともと文官の出だったヴィルレー公爵とアルザス家は交流がある

わけではなかったが、ペルセニーアがジョシュの護衛騎士になり、王宮でよく顔を合わせるようになると、言葉を交わすようになった。ジョシュやセラフィーナがよく懐いているペルセニーアも、その関連で顔を出すパヴェニーアも、人柄もよく野心も無く、武人らしい率直な態度をヴィルレー公爵は快く思っている。

「もとよりこちらで保護した猫です。…ヴィルレー家でも何かさせてもらえないでしょうか。」

「いえ…そこまでしていただくわけには。お気持ちだけで結構です。」

「しかし…。」

サティを撫でていたセラフィーナが顔を上げた。

「ねえ、お父様。私、いつかまたサティに会いたいわ。」

「ああ。…それならば…。」

ヴィルレー公爵は優しげな眼差しで、セラフィーナに抱かれているサティの頭を撫でた。セラフィーナに全ての事情は話していない。ただ「飼い主が見つかって、寂しがっている」と言っただけだ。

「サティ、いつか君の主と共に、セラフィーナに会いに来てくれるかい？」

人語を解するならば、自分達の会話も聞こえているのだろうか。

「にゃあ。」

サティの返事に、セラフィーナの顔が綻んだ。

＊＊＊＊

「猫が迷い込んだ？」

「はい。ヴィルレー公爵とそのご息女がご訪問されたときに、迷い込んだ…と。早々に捕獲し、ジョシュ殿下の下で一晩過ごした後にアルザス伯爵が引き取ったそうです。」

「ジョシュが、一晩預かった…と。」

「ええ。ヴィルレー公爵と殿下のお2人からお伺いしましたので、間違いありません。侍女や護衛の者達も、そのように申しております。」

「ジョシュに変わりは？」

「特に問題は無いようです。本日、お伺いしてみましたが、お顔の色も優れており、いつになくお声もしっかりとなさっておられました。」

「そうか。」

オリアーブ国王の執務室で、国王は宰相バジリウスから報告を聞いていた。

穏やかな、落ち着きのある声は、そのバジリウスのものだ。先王の下では魔法使いとして名を馳せていたが、その手腕は政治にも発揮され、現国王が即位したときから宰相を務めている有能な男である。

今では魔法使いとしては現役を退いている。しかし、その経験からか魔法師団と騎士団の協力の必要性を訴え、実証してきた。彼のおかげで、国内で勃発する魔物の討伐が迅速、かつ最小限の被害でとどまっているといってもいい。内政手腕においては国王の意図をよく汲み、騒がしい宮廷からも一目置かれている。

それにしても、猫…か。

国王の1人息子のジョシュは、12歳になるというのに勉学以外の…剣や魔法などについては、ほとんど基礎しか教えることが出来ていない。いずれ王太子として国王を補佐する身でありながら、そのような事態に陥っているのは、父王たる自分の責任でもあった。あれは聡明だ。今からでも強く鍛えることができれば、立派に王太子を勤めるだろう。だが、今のままでは到底、無理だった。

それに、長く次の子が出来なかった王妃が、やっと第2子を懐妊したことも、喜ばしいことではあるが、恐らく悩みの種なのだろう。聡いジョシュのことである、宮廷の力の均衡にまで気を配り、どういう立ち位置に立つべきかを思案しているに違いない。…そしてそれらは、アルザス伯爵やヴィルレー公爵には相談しても、恐らく、父王の自分には、一言も相談することは無いだろう。ふ…と、国王は苦笑した。

「ジョシュの件は承知した。不問とせよ。もう下がってよいぞ。」

「はっ。」

バジリウスは深く一礼して、執務室を辞した。入れ替わりに、1人の騎士が入ってくる。

その騎士の姿を認めた国王は、「ああ、ここにも懸念事項があったか」とため息をついた。

騎士から提出された報告書に一通り目を通し、国王は瞳を上げた。

「この報告書の内容はどれほど信用できる。」

「半々…と言ったところでしょうか。」

「お前自身が作ったものだろう。」

「私とて半信半疑です。…陛下、調査の続行を許可いただけるでしょうか。」

蜂蜜色の髪に目尻が下がり気味の、甘い面差しの騎士だ。彼は少しばかり口元を緩めた。騎士としての礼節は保っているが、漂う気配がどことなく軽薄になってしまうのは彼の性分なのだろう。そうした雰囲気を特に気に留めることなく、国王は頷いた。

「許す。」

「そう言っていただくと甲斐があります。」

「これは余の個人的で、面倒な仕事だろうに。それでも、続けたいか。」

「もちろん。…こんな面白いことはありません。」

「そうか。」

「もし王都を離れることになっても、パヴェニーア団長には、融通を？」

「お前が余の使いで出向する…という旨は通達しておこう。」

「お願い致します。」

騎士が一礼して立ち去ったのを見届けると、国王は執務机から立ち上がり、窓の外を見た。ジョシュの件にしろ、この件にしろ…自分という男は国王でありながら、頼りないことよと思わざるを得ない。待つとか、見守るとか、…そういったことしかできぬ自分が恨めしかった。

＊＊＊

「ピウ、よかったの？」

「何がだ。」

「もう少し実家にいても、よかったんじゃない？」

「かまわんさ。またいつでも戻ればよい。」

顔を隠すほどマントを目深に被ったピウニー卿に、サティは話しかけた。2人が騎乗しているのは、青毛の馬シャドウメア。今はゆっくりと歩かせているため、かぽかぽと一定の足音を刻んでいる。

シャドウメアはピウニー卿の愛馬だ。魔竜討伐のときにも連れて行った彼は、ピウニー卿のことはもちろん覚えていたが、それ以上にサティに懐いた。驚いたことに、シャドウメアはネズミや猫になった2人の言うこともきちんと聞いた。

サティがヴィルレー公爵家から帰ると、２人はすぐに出発した。ジョシュの魔力抑制についてはひとまず理の賢者に任せ、当初の目的であった杖の賢者の下へと向かう。理の賢者の杖を引き取り、サティの杖を新しく作ってもらうためだ。

昼間は人間に戻りシャドウメアで駆け、必要があれば街で買い物をする。夜間は鞍に乗ったまま、街道から外れたところを歩いた。足が強く賢いシャドウメアだからこそ可能な旅路だ。魔物が出そうなとこは避けて通っており、今のところ特に問題は無い。

ピウニー卿は後ろからサティを抱き寄せるように、馬に乗っている。

「それに、とりあえず早く呪いを解きたいからな。」

「あのさ、ピウニー」

「サティは、そう思わないか？」

「うん、それは思うんだけど。」

「呪いを解いたら…。」

「あの、」

「サティ…。」

サティを抱き寄せる腕に力が込められ、不謹慎な色を帯びた声がサティの耳元で囁かれた。そのとき、シャドウメアがいなないた。かぽかぽと街道から離れていく。

「む？　シャドウメア？　どうしたのだ。」

「あのね、だから。」

たったった…と、シャドウメアが駆け足になった。

「ああ…。」

「ね。」

ピウニー卿は深く溜息をついた。いつもサティと話していると時間を忘れる…などというのは陳腐な言い訳であると分かっている。そうか。時間か…。早くサティをこの腕で思う存分…。ピウニー卿が騎士らしからぬ不埒なことを考えていると、シャドウメアの足が一層速くなり、森に飛び込んだ…と、同時。

シャドウメアの足が止まり、その背中から人が消え、ふわりと2人分の旅装が鞍の上に落ちた。

シャドウメアはとても賢い馬だった。

「いいかげん、覚えたほうがいいよね…。」

「そうだな…。」

鞍の上で、サティはピウニー卿のマントに頭を突っ込んだ。ぶるる…とシャドウメアが鼻を鳴らしている。マントの中でサティはピウニー卿を見つけて、その毛皮をぺろりと舐めた。

［小話］　戦え！ピウニー卿！（前書き）

※あまり詳細な描写はしていませんが、虫注意。
ダメな方は、「＊＊＊＊」まで飛ばしてお読みください。

ピウニー卿とサティが、最初の宿場町に着くまでのお話。

［小話］　戦え！ピウニー卿！

「いやあああああ、無理、もう無理ぃいいいいいいいいあああああああ」

「サティ、私を降ろせ！」

「だってやだ止まるの無理いいいいいい」

「サティ、私が必ずお前を守るから！」

「…ピウニー、ほ、本当に？」

「大丈夫だ。必ず守る。」

「うう…。」

頭の上から聞こえるピウニー卿の声に恐る恐るサティは止まると、そっと頭を降ろした。背後から迫る足音に、震えながら振り向く。ピウニー卿はサティを小さな背に庇い、金属の擦れる音を響かせて剣を抜いた。

近づいてくる敵。

ありえぬほど成長したそれは、まさに悪魔。黒い悪魔のごとき姿。

眼前に現れたのは、人の世の台所でよく見かける黒い艶光する羽を

持つ、アレだった。

それはおよそ見たことの無い大きさだった。恐らく大将級であろう大きな悪魔と、両脇に従える少し茶色に近い脂ぎった小さな悪魔。おぞましい。こんなおぞましい姿、サティは見たことが無かった。否。

見たことはある。そして、その姿に対峙するのをいつも怖れていた。それが現れると、隠れ、震え、嵐が去るのを待っていたのだ。だが、今は、ピウニー卿がいる。頼もしいふわふわの毛皮の背中。彼は竜殺しの騎士なのだ。

ゆらり。

両脇の小さな茶色い悪魔が中に浮く。それを睨みつけながらじり…とピウニー卿が殺気を濃くする。背にひらめく薄い羽を動かし、こちらを伺ってはいるが、あれが恐ろしい機敏さで動くのをピウニー卿は知っている。しかもなぜかあの動きは…予測不能だ。いや、違う。予測不能ではない。あれは、人のおびえる心を…負の心を嗅ぎつけて、もっとも人の恐怖心を煽る行動に出るのだ。女子供を嘲笑うかのように…。それならば、次の動きは。

ぴ…っと茶色い悪魔が動いた。

「サティ、怖いなら目を閉じていろ。」

トン…とピウニー卿は後ろ足で床を蹴った。狙うのは…動かなかっ

たほうの悪魔だ。一歩詰めて一気に距離を縮め、剣を横に薙ぐ。剣が触れる瞬間、ぐ…と魔力を放出すると、ジュウッ…と焼け焦げるような音が聞こえ、眼前の悪魔は胴から2つに分かれた。

しぶとく断末魔の動きを見せる切って捨てたほうの悪魔は無視し、す…ともう一匹の茶色い悪魔に視線を移す。思った通り、もう一匹は壁際に貼り付き、サティの頭上を狙っていた。ピウニー卿の髭が戦いの緊張感でぴりぴりと張り、真っ直ぐになった。

「サティ、頭を借りるぞ！」

いまだ目を閉じて、ふるふるしているサティの頭に駆け寄ると、それを足場にジャンプする。壁に張り付く悪魔に剣を向けると、それはヴ…と羽を震わせて、一度ピウニー卿の身体の上へと逃れる。だが、その動きは予測していた通りだ。ピウニー卿は自分の頭上を通りすぎる瞬間、その腹に向かって剣を突き通す。獲物を剣に刺したまま、すとん…とサティの毛皮の上に降りると、ていっ…！と剣を振って悪魔の身体を投げ飛ばした。悪魔が剣を抜ける一瞬に魔力を込める。バシュウ！…と身体から煙を吹きながら、悪魔は地面に叩きつけられ、動かなくなった。

…最後は、大将級…一匹である。

ピウニー卿はサティの頭から降りると、ずっとおとなしくしていた…いや、こちらの動きを伺っていた黒い悪魔の前に立ちふさがった。

じっとりとした重い空気。張り詰めた緊張感が2者の間に落ちる。

均衡を破ったのは黒い悪魔だ。ピウニー卿の耳がぴくりと動き、悪魔の動きに合わせて身を翻す。

黒い塊がふっ…と宙を舞った瞬間、ピウニー卿の視界に茶色い悪魔の下半分がうごめいたのが見えた。そちらに一瞬だけ、本当に一瞬だけ、気を取られた。その隙に…！

「い。」

「しまっ…」

「いやあああああああああああああ！！！！！」

あろうことかサティの方向に、黒い悪魔が飛んできたのだ。サティの頭を黒い悪魔が掠める。目を閉じていても分かる、その風圧のなんというおぞましさ。サティの毛皮がこれまでにない勢いで膨らみ、四肢を突っ張り垂直に跳んだ。その動きにたじろいだのか、黒い悪魔はサティを避けるように地面に降り立ち、ピウニー卿の方にカサカサと近づいてくる。いまだ！…ピウニー卿が前足の剣を構え直し、敵へ跳躍した。

＜ニータ・ヴィ・ラニマーク！＞（雷撃の鞭！）

「えええ」

バチーン！

黒い悪魔とピウニー卿の間に、小さな雷撃が落ちた。

＜ニータ・ヴィ・オーン！＞（炎の鞭！）

「あの、サティ」

ジュウ！

黒い悪魔に赤い熱線が走り、ピウニー卿の足元が焦げた。慌ててピウニー卿はサティの足元に駆け寄る。

＜オーン・エ・カシュリク！＞（炎の刃！）

「サティ、ま」

＜オーン・エ・ラュカ・セオーム！＞（炎よ燃えさかれ！）

「お、サ、」

＜ラニマーク！ラニマーク！オーン！ラニマーク！＞
（雷とか雷とか炎とか雷とか！！）

「あぶな、」

雷撃やら炎やら、小さいながら、すごい数の魔法弾が打ち込まれて黒い悪魔は跡形も無く消え去った。ようやく静かになり、サティはぜえはあと息をつく。

「サ…サティ…？」

ピウニー卿の呼びかけに、ぎぎ…っ、と首を傾けたサティが、半眼でこちらを見ている。ピウニー卿の髭が再びピーンと緊張し、ふかふかの毛皮が倍くらいに膨れた。怒られる。一匹サティのところに逃した罪で確実に怒られる。ピウニー卿は覚悟を決めた。この女魔法使いに、逆らっては、いけない。

だが、サティの行動はピウニー卿の予測を超えた。

かぷっ。

サティはピウニー卿の身体を咥えると、一目散に走ったのだ。

「な、待て、サティ、サティーーーーーーーーー！！」

＊＊＊＊

バシャバシャバシャ…。

小さなセピア色の猫が、せせらぎに顔を突っ込んでいる。

「うっうっ…」

「あの…サティ、もう多分綺麗になったと…浄化の魔法も使ったんだろう？」

「そうだけど、そうだけど違うの！　そういう問題じゃないの！　ピウ…頭もちょもちょして！」

「もちょもちょ？…あ、ああ。」

サティはずずいと濡らした頭をピウニー卿に差し出す。差し出されたピウニー卿は、人間の髪を洗うように、そのセピア色の毛を前足でもちょもちょと撫でてやった。ピウニー卿の身体は小さいので、前足が毛に埋まる。もちょもちょが終わると、サティは再び頭をざぶんとせせらぎに突っ込み、ぷるぷると振る。

「ピウ！」

「お、おう。」

再び、ピウニー卿はサティの頭をもちょもちょと撫でた。終わると、再び頭をざぶんとせせらぎに突っ込み、顔を上げるとぷるぷると頭を振って水を飛ばす。

「…もう、大丈夫か？」

恐る恐るピウニー卿がサティを覗き込むと、明らかに耳をしょぼんとさせて、せせらぎから少し離れたところに丸まった。

「あんな…あんな、もうお嫁にいけない…。」

「よ、嫁っ？」

すんすんと涙声のサティ。サティは虫が嫌いなのか…。まあ、あの悪魔は虫の中でも魔王もかくやと謳われた嫌われ者だから仕方がない。とはいえ、こんなに弱ったサティを見るのは初めてで、ピウニー卿はサティの頭に近寄ると、よしよしと頭を撫でてやった。ピウニー卿は前足を口元にあてて、コホンと咳払いをする。

「あー、サティ？　嫁なら私が…。」

がばっ！…とサティが起き上がる。

「ふ、ふおおお！？」

勢いあまってピウニー卿が後ろに転がった。

「古のことわざで、１匹見たら３０匹って言うのよ確か。」

「あ？…あ、ああ。だがアレだけ走れば大丈夫だろう。…それよりも嫁の話だが、」

サティは、ピウニー卿の言葉は聞かず、その小さな身体をパクリと咥えた。

「サ、サティ？　サティーーー！！　落ち着けーーー！！」

サティは猛烈なスピードで駆け出した。

ピウニー卿は風を切りながら決意する。

サティに虫ダメ、絶対。

［小話］　戦え！ピウニー卿！（後書き）

もちょもちょする。
…って、何…？
という質問は受け付けておりません！

017．逃げろ！

街道から大きく外れた荒野を一匹の猫が駆けていた。四肢を懸命に伸ばし、何かに追われるように走っている。頭の上には金色の毛並みのネズミが振り落とされないように捕まっていた。

「サティ、一瞬身を翻せるか？」

「どうする？」

「私があれの後ろに飛び移る。」

「…危ないよ！…私の魔法で何とか…。」

「サティの魔法の威力だけでは無理だろう！…サティ…！」

「…分かった。掴まって！」

サティは、ずさ…と身を翻してターンし、眼前の敵を睨んだ。迫り来る敵…、人間の膝くらいの高さがあるだろうか。巨大なネズミともモグラともいえぬ、醜悪な動物が不恰好にこちらに迫っていた。ぶよぶよとした皺のよった皮にはまばらに毛が生え、瞳は退化してしまっている。…魔物化した凶暴なモグラネズミ。普段は地下で大人しくしている彼らは、時に魔と化して、こうして地上に出て、見えない瞳で無差別に生き物に牙を向くことがある。

口からは大きな長い牙が2本飛び出していて、飛び掛られれば人であっても脅威だろうが、自分達が人の姿であれば、歴戦の騎士であるピウニー卿や、古魔法に精通しているサティならば、ものの数秒

で蹴散らすだろう。だが、なにせ今2人は小さな猫とネズミの力で、使うことの出来る能力にも限りがあった。…そして、シャドウメアとも、はぐれていた。

荒野は広く水も少ない。出来る限り川や森の側を歩いていたピウニー卿達は、その日河原で野宿をしていた。そして朝出発しようとしたときに、モグラネズミの集団に襲われたのだ。シャドウメアが一声甲高く嘶き、モグラネズミの集団の真ん中へと躍り出てそのまま走り始める。一瞬追いかけるべきかと思ったサティに、ピウニー卿は「逆に走れ！」と言ったのだ。サティはピウニー卿を乗せて、シャドウメアが走った方向とは逆に走り始めた。大半は大きな足音を立てるシャドウメアを追いかけたが、一匹だけ、2人を追いかけてきたモグラネズミが居た。

「サティ、今だ…！」

ピウニー卿の声に弾かれるようにサティの身体が跳躍した。モグラネズミは眼はほとんど見えず、気配と音だけでこちらを追いかけてくる。身を翻したサティの動きに咄嗟に反応できず一瞬出し遅れた牙が、交差するサティの身体を掠めた。ピウニー卿が、サティの頭の上からモグラネズミの上に飛び移る。

モグラネズミは背を這う奇妙な感覚に、ギャッギャッと小刻みな鳴き声を上げながらロデオのように体をくねらせ始めた。ピウニー卿は落ちないように、皺になった皮膚を掴み、モグラネズミの尻に剣をちくんと突き刺す。

ピギャーーーーーーー！

不愉快な声を上げてモグラネズミが走り始めた。ピウニー卿は身体

を反転させ、モグラネズミの寄った皺にしっかりと掴まる。今度は身体の少し左に剣をちくり。

ピィイイイイギャアアアアア！！

モグラネズミのスピードが上がり、走る方向を少し右に修正する。その眼前には、白い岩がすぐ側に迫ってきていた。

ドゴン！

眼の見えないモグラネズミは、思い切りその岩にぶつかった。ぶつかった振動でピウニー卿は振り落とされそうになるが、なんとか剣を刺して支え、やり過ごす。…ドサリとモグラネズミの身体が地面に横たわり、あたりは静かになった。

ふ…と安堵のため息をつく。サティがこちらに向かってきているのを確認して、剣を抜こうと柄を握り直した。そのときだ。

ピイイイイイィィィィーーーー！！

動かなくなったと思ったモグラネズミが、突然声を上げた。ピウニー卿は剣を抜いて頭へと駆け上がる。両手で持ち直し、渾身の力を込めてモグラネズミの眉間に剣を突き刺した。思い切り魔力を込める。…ギャッ！…と短い断末魔の声を上げ、今度こそモグラネズミは動かなくなったようだ。…ピウニー卿は剣を抜くと腰に納め、サティを振り返った。

「サティ、足は大丈夫か？」

「ピウニー、大丈夫？　怪我は無い？」

２人が同時に聞いて、顔を見合わせた。どうやら大丈夫そうな互いの様子を見て、ほっとため息をつく。サティが地面に降りてきたピウニー卿に顔を寄せると、ピウニー卿はその頭をそっと撫でた。

「しばらくどこかに身を隠して、人間に戻ったらシャドウメアを呼ぼう。」

「分かった。…じゃあ、ピウニー、乗っ」

乗って…とサティが頭を低くした。そのときだ。

サティとピウニー卿の耳がぴくりと動いた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ。

…地鳴りのような音が聞こえる。地面も僅かに振動し、明らかに様子がおかしい。サティがピウニー卿を乗せて立ち上がり、頭を上げた。荒野の向こうに見えるのは…。

「なにあれ…。」

荒野の向こうが黒く染まっている。何か獣の集団が、こちらに迫ってきているようだ。…迫って、きている？　地面の高低差によって、その獣の集団に気付いたのは、かなり距離が迫ってからだった。

「…これ、不味くない？」

「不味い…な。」

「ピウニー、しっかり掴まっててて…。」

「うむ。サティ…」

「逃げろ！」…ピウニー卿の声が聞こえると同時にサティは走り出した。

＊＊＊＊

後ろから聞こえてくる地鳴りから逃れるようにサティは駆けた。轟音は少しずつ、近づいてくる。ピウニー卿はサティに掴まりながらそっと後ろを伺ってみた。そこには、先ほど自分達が対面していたモグラネズミが集団となって、こちら目掛けて突進してきている。朝、シャドウメアが蹴散らした数とは比べ物にならない。…そして、その集団の前に、２頭の馬が居た。

１頭はシャドウメア、もう１頭の馬上には何者かが乗っている。

「シャドウメアか。…もう１頭は、何者だ。」

サティも大分疲れてきたのだろう。段々、足が重くなってきた。ピウニー卿は、今ほど自分のネズミの姿が忌まわしいと思ったことは無かった。自分はこれほどにも小さく、移動も戦闘もサティがいなければ何も出来ないではないか…！　自身の無力さに歯噛みしながらも、ピウニー卿は剣を抜いて、それを掲げた。

＜イラキュヒ・エーク・オ・ピウニーア！＞

（ピウニーアの剣よ発光せよ！）

ひら…と小さな光がピウニー卿の剣に灯った。

「サティ、　少しスピードを落とせ。」

「でも、」

「シャドウメアが来る。大丈夫だ。」

ピウニー卿の落ち着いた声はサティを少し安心させた。それを聞いて、サティは少しずつスピードを落す。ピウニー卿が剣を掲げたまま後ろを振り向くと、大分距離を詰めてシャドウメアがピウニー卿の剣の光を目指して駆けてくるのが見えた。もう1騎も軌道をこちらに向けているようだ。

スピードを緩めた猫の足にシャドウメアが追いつくのはすぐだ。徐々に歩を緩めてくるシャドウメアが、サティの身体をつつくように鼻面を下げた。サティが思い切ってそこに身体を乗せると、シャドウメアは、ぐ…と頭を起こして2人の身体をたてがみに落とす。ずるずるとシャドウメアの首に沿ってサティ達の身体は落ちていくが、さほどスピードが出ていなかったので、上手く鞍にたどり着くことができた。

再び馬のスピードが上がった。だが、獣姿のピウニー卿とサティにシャドウメアの速さはかなり不安定だ。手綱は人間サイズのもので、サティは必死でそれを口に咥え、ピウニー卿も小さな前足でそれを抱えているが、今にも振り落とされそうだ。

「こちらへ。」

隣で走らせている1騎から男の声が聞こえた。ピウニー卿がそちらに視線を移すと、目の細い大柄な男がシャドウメアに並ぶように馬

を走らせている。大きな手がこちらに伸ばされた。何者か、ピウニー卿の全く見たことの無い顔だ。だが、迷っている暇は無い。

「シャドウメア、身体を寄せるんだ。」

ピウニー卿の声に呼応するように、シャドウメアが少しずつ隣の馬と距離を詰める。その間にも、後ろからモグラネズミの集団は迫ってきている。

「3つ数えたら飛べ、サティ！」

そんなこと出来るわけがない！…サティは一生懸命ぷるぷると頭を振る。しかし、

「…そのまま鞍を蹴って手綱を放せ。受け止める。」

もう1人の男の声だ。片腕で手綱を握り、シャドウメアに触れそうなほど、もう片方の腕を伸ばしている。
ピウニー卿がサティの首元にしっかりと掴まった。

「…サティ、何が起こっても私は一緒にいる…！」

小さな自分に出来ることはそれくらいだ。失敗しても成功しても私がいる。そう言ったピウニー卿の言葉に後押しされるように、サティは意を決した。

「3…2…1…！」

ピウニー卿の声に合わせて、サティが手綱から身体を外して鞍を蹴る。カクン…と、馬から身体が離れる感覚は一瞬だ。次の瞬間には、

何者かの手にピウニー卿ごとサティの身体がすくい上げられた。そのまま男の腹に抱えられ、マントがふわりとかけられる。

２頭の馬はスピードを上げ、荒野を斜めに走り抜けた。森に飛び込み荒野から逃れるとモグラネズミの集団の軌道からも外れ、やっと助かったと認識したときには、人も馬もネズミも猫も、疲労困憊だった。

＊＊＊＊

男はモグラネズミの集団が通り過ぎたのを確認すると、ピウニー卿とサティを抱えたまま馬からそっと降りた。手近な木の根元に胡坐を組んで座ると、マントを広げる。

自分を見下ろす細い目をピウニー卿は改めて見上げた。…そして、もぞりと腹を曲げた。首と胴の境目があまり無いので、お辞儀も分かりにくい。

「かたじけない。貴殿のおかげで助かった。感謝する。」

男はピウニー卿を見下ろすと、ゆっくりと頷いた。彼はピウニー卿が話すことを、別段不思議にも思っていないようだ。ピウニー卿も、話すことが出来る…という事実を、この男に隠すのは礼に反すると思ったのだ。だからこそ、自然と騎士の一礼を取った。

やがて男の視線がサティに移った。それにつられるように、ピウニー卿もサティに視線を傾ける。

サティのグリーンの瞳が今にも零れそうなほど、大きく見開かれていた。

「サティ？」

ピウニー卿が首を傾げた。…サティの尻尾の先がトントンと動く。

「…つ、杖の賢者？」

「え…？」

ピウニー卿は、サティと男の顔を見比べる。

「杖の賢者…？」

ピウニー卿が確認するように、こげ茶の瞳を向けた。それを見下ろしながら、細目の男は頷いた。

０１８．いや、なんでもない

「…ということで、師匠の杖を引き取りに来たのと、私の杖が壊れたので新しいのを作ってもらいたいのです。」

思いがけず、旅の道中で杖の賢者と出会った2人は早速事情を話した。呪いがどのように解けたか…という点については、うやむやに誤魔化しておく。杖の賢者と呼ばれている男は、杖の魔術を極めているという割りに戦士のような体格で、人間に戻ったピウニー卿よりも少し背が高いくらいだった。ひどく無口でほとんど話さないため、こちらの事情を信じているのかは分からなかったが、少なくとも、サティの正体については疑ってないようだ。

サティは杖の賢者に幾度か会った事がある。理の賢者の杖は、杖の賢者が作っていて、その関係で、よく理の賢者の元に来訪していたのだ。自分が魔法使いになったころにも、杖を作ってもらった。杖を作ってもらうのは初めてで、どういう注文をつければいいのか良く分からず、材質だけ伝えた覚えがある。どちらかというと内弁慶だったサティは、無口な杖の賢者は苦手だった。ちなみに、杖を作ってもらうとき以外で言葉を交わしたことはほとんど無い。

杖の賢者に出会った荒野から1日ほど進むと、杖の賢者の館にたどり着いた。

杖の賢者の館は2つほどの工房が連結したかなりの規模の館だったが、杖の賢者のほかに人はいないようだ。いくつかの部屋があり狭くはなく、その部屋のどこにも、１ｍ～１．５ｍほどの様々な木の棒、なぜか剣や槍などの多くの武器が置かれていた。

そして現在。ピウニー卿とサティは、猫とネズミの姿のまま杖の賢者に対峙している。テーブルの上に案内され、お行儀がいいとは言えないが、案内されるまま座った。

杖の賢者は、サティの話を聞くと大きく頷いて、席を立った。部屋の片隅に置いてある１．５ｍほどの木の棒を手に取り、２人が座っているテーブルの上に置く。サティはふんふんと鼻を寄せ、前足でちょいとつついた。

「ナナカマドに赤い絹の飾り紐。黒水晶の根付。…確かに師匠のものです。受け取りました。」

サティが何事か呪文を唱えると、理の賢者の杖が、ふ…と消えて、一瞬だけサティの首に下がっているグリーンの石が小さく光った。サティはその様子に一息つくと、再び杖の賢者を見上げる。

「…それで、私の杖なんですが。」

サティの言葉が言い終わる前に、杖の賢者は腕を組んで首を振った。それを見たサティの毛皮がぶわと逆立ち、一瞬で退く。その様子を見たピウニー卿が、抗議の表情をネズミの顔に浮かべ、サティを庇うように立つ。

「杖の賢者殿、サティの杖は…。」

ピウニー卿の眼前で、杖の賢者が指でトン…とテーブルを弾いて鳴らした。

「休め。」

杖の賢者の細い目は相変わらず無表情だったが、その声は落ち着いていて、穏やかだった。ピウニー卿は、「ああ…」とこげ茶色の瞳で杖の賢者を見上げた。その表情を束の間見据えて、溜息を吐くように髭を撫でる。ピウニー卿は頷いて、サティを振り向いた。

「…でも！」

「サティ、落ち着け。」

ピウニー卿は、思わず声をあげたサティの前足をそっとさすった。そうだった。サティはモグラネズミの集団から逃げた後、耳も尻尾もしょんぼりと萎れ、元気が無かった。毛皮だけは浄化の魔法で綺麗にしていても、疲労を拭いさることは出来ない。サティの疲れた身体を抱き上げて運ぶことの出来ない非力なネズミの心苦しさに、ピウニー卿の胸が痛んだ。

「ここは賢者殿の言う通りだ。…いずれにしても、杖はすぐに出来るものではないだろう。」

サティががっかりと頭を落とし髭が下を向いてしまったが、それ以上強情を張るつもりはないようだった。サティは起こした身体を、お座りの格好に戻して大人しくなった。

＊＊＊＊

サティとピウニー卿は、杖の賢者の家で2日ほど滞在して身体を休めていた。出来る限り人間の姿に戻り、戻ったときには賢者の家の用事を済ませる。サティは家事を、ピウニー卿は馬の世話や剣の手入れなどをしていた。杖の賢者自身は、作業場に潜って食事の時間しか出てこない。弟子もいないようだし、1人の時は一体どうして

いるんだろうと、ピウニー卿は首を捻った。

そんなピウニー卿の疑問に、サティがさらりと答える。

「杖の賢者、奥方がいるから。」

「ええっ」

あの無口な杖の賢者に奥方がいるというのは衝撃だった。だが、居るとしたら、一体どこにいるのだろう。再び首を捻る。ただ、サティは杖の賢者の奥方には会った事が無かった。その話は師匠である理の賢者から、イヤというほど聞かされていたが。

「知らない？　杖の賢者の奥方は…。」

サティのその言葉が言い終わる前に作業場の扉がバタンと開いた。細い目の男は、サティの方を向いて口を開く。

「材質を。」

今は猫のサティの尻尾がピン…と立った。耳が杖の賢者の方を向く。杖の賢者の言う一言は短く、しかも返答のチャンスを逃すと次の機会がいつ来るかは分からないというスリリングさがあった。サティは、即答する。

「トネリコで。」

それを聞いた杖の賢者の細目がクワッ…！と見開いた。サティとピウニー卿の毛が一気に逆立つ。部屋に一気に落ちた謎の緊張感に、歴戦の戦士であるピウニー卿もさすがに動揺した。杖の賢者と見え

たことがあるだろうサティも、毛皮が膨らんだままだ。サティは思わず尻尾でピウニー卿の身体に触れた。

「雷に打たれて折れたトネリコで。」

杖の賢者が目を見開いたまま、サティをじっと見つめている。…サティも毛を逆立てまま、杖の賢者に瞳を合わせる。別に取って食われるわけではないのだろうが、取って食われそうな雰囲気が部屋の中を支配している。重苦しい。杖の材質についてピウニー卿は詳しいわけではないが、ここまで緊張感を演出する必要があるのだろうか。得体の知れない敵と対峙しているような強張りは、杖の賢者の瞳が細目に戻ったところで解かれた。

「無い。」

「え。」

「森へ。」

「…取りに行けば作っていただけますか。」

杖の賢者はゆっくりと頷いた。

「サティ、トネリコでなければならないのか？」

「ピウニー！」

「え？」

ばっ…！とサティがピウニー卿を振り向いた。サティの瞳が輝き、

ピウニー卿に触れていた尻尾が、ぱたんと元気よく動く。

「うん！　以前はアオダモだったんだけど、折れた感触だと私の魔力の負荷に耐えられないみたいだった。トネリコはアオダモに近いし魔力の蓄蔵がより強いから、一度作ってみたかったんだよね。」

サティがうっとりと話し始める。杖の賢者がなぜか、ふむふむと頷いている。

「それにね、ピウニー、雷で分たれたトネリコの木は、それだけで高い魔力の媒体になると言われているの。私が作ったら芯になる魔法の属性は全種類網羅くらいはいっときたいし、１００種類くらいは古魔法の基礎入れたいでしょ？　」

「あ、ああ。なるほど…？」

「分かる？　やっぱり？　…でね、あと、元々入れてたやつには自家製魔法陣がやっぱり１５０種類くらいは入ってたんだけど、今度はもうちょっと魔法陣を頼るんじゃなくて、イメージを元に魔法が形成されるような術を形成してみたいのよ！」

「あの、サティ」

サティの熱弁にピウニー卿は後ずさった。どこかいいところでとめないと、いつまでも続きそうだ。

「そうなると、魔力の負荷がかなり杖にかかってくるの！　だから、アオダモだと若干耐えられないかなって思うのよね…。それにやっぱり、しなり具合もトネリコの方が高いし、何より柔軟なのね。柔軟っていうことは、術者のイメージに対する対応力も高いってこと

で…。」

「サティ、分かった。分かったから。…そのトネリコの木材を取りに行くのだな、私も行こう。」

「本当に？　ピウニーも一緒に来てくれる？」

「当たり前だ。サティ１人で行かせるわけにも行かないだろう。」

「ありがとう、ピウ大好き！」

サティの言葉に、収まりかけていたピウニー卿の毛皮がぼふん…と膨れた。杖の賢者はそれに気付いたが、眉を少し動かしただけである。ごろごろと喉を鳴らしながら、サティはピウニー卿の丸い身体に顔を摺り寄せる。トネリコの木の話に夢中になったテンションそのままにさらりと言ったが、サティは自分の言葉がもたらす効果は全く考えていなかった。ただただ、なんてピウニー卿は優しいんだろう！…と、サティはご機嫌だ。　残念なことにピウニー卿が期待しているような意図はその声色には無く、それが一瞬で知れてピウニー卿は複雑な気分だった。

「よし、それなら行こう今すぐ行こう。黒の森に確かありましたよね？」

サティは瞳を輝かせながら、トン…とテーブルを降りた。タタタと床を駆けて、扉の前で振り向く。

「おい待て、サティ。」

準備があるだろ準備が…と言いかけて、止まる。大柄な杖の賢者が

黙ってサティの身体をすくい上げたのだ。杖の賢者は片方の手でやすやすとサティを持ち上げ、すとんとピウニー卿の隣に運んだ。それを見ていたピウニー卿の胸が再び騒ぐ。…自分の身体が呪いによってネズミになり、満足にサティを守ることが出来ていない現状は、常に棘のように心の奥に刺さっていた。小さなネズミの身体は、しなやかなサティの猫の身体に比べてとても小さく非力に思える。ああやってサティを止めたり守ったりする手が、なぜ自分ではないのだろう。

早く呪いを解いて元の姿に戻らなければ。…ピウニー卿は髭を落しかけたが、ふる…と頭を振って、己を叱咤した。

「杖の賢者殿。…準備が出来たら、サティと共に黒の森に行ってきます。…それから、サティの杖を作ってもらっても？」

ピウニー卿の問いに杖の賢者は再びゆっくりと頷いた。そして、黙って部屋を出ていった。

サティの耳が落ち込む。ピウニー卿はそんなサティの前足を撫でた。

「部屋に戻るか。準備は明日にしよう。」

「うん…。」

…ピウニー卿がそう言うとサティは渋々返事をして、頭を低くした。だが、ピウニー卿は一瞬そこに乗るのを躊躇った。

「ピウ？どうしたの？」

「いや…。」

こんなところでつまらない意地を張っても仕方が無いと分かってはいる。ピウニー卿はサティの頭の上に乗った。自分の思いがどうあれ、乗り馴れたサティの頭の上は温かく、毛皮はふわふわとしていて柔らかい。

サティはピウニー卿が乗ったのを確認すると、トントン…とテーブルを降りて、寝床をしつらえている部屋へと戻った。

＊＊＊＊

サティは籠にクッションを敷いている寝床に入ってからも、ずっと身体を起こして窓の外を見ている。よほど杖の材料を取りに行きたいのか…と、ピウニー卿は苦笑した。

「よほど、トネリコの素材がよいのだな、サティ。」

「トネリコじゃなきゃダメ…っていうわけじゃないんだけど、どうせ作るならいい材料で作ってみたいの。…我侭かな。」

「いや、我侭ではなかろう。私も剣を作るときには、随分と我侭を言った覚えがある。杖の賢者殿もかまわないと言っているのだ。どうせなら思うままの杖を作ったほうがよかろう？」

「うん。ありがと、ピウニー。」

礼を言われて、ピウニー卿はむずがゆい気持ちになった。人間であれば照れた表情がバレたかもしれない。ピウニー卿はサティの前足に触れたまま、身体を丸くする。

「サティに杖か…。」

「何？」

「いいや。一層、サティの魔法に磨きがかかりそうだと思っただけだ。」

「…な…、そりゃ、杖があったら元通りの魔法が使えるもの。今なんて、ちょっとしか魔法使えないし。」

「そうか？」

サティの声にピウニー卿が首をかしげる。

「ピウは、剣があるじゃない。人間になってもネズミになっても使えるなんて、正直すごいと思う。」

「そうなのか？」

「そりゃそうよ、質量を変えてるのよ？　どういう仕組みになってるのか、すごく気になる。」

言われてみればその通りだ。自分の大きさに形を変えるこの剣は、確かに特殊な出自の剣ではあったが、身体の大きさに合わせて質量を変える…などという効果があるとは聞いたことが無い。だが、ピウニー卿は魔法にはあまり詳しくは無い。何故なのか…などは、あまり気にしたことが無かった。

「お前もきちんと魔法を使えているだろう。」

「でも、致命傷を与えているのはピウの剣だよ。…私、虫見るとダメだし、大きな魔物になったら私の魔法じゃ、変に魔物を刺激するだけだわ。」

それは確かにそうだった。そう幾度も無い襲撃で、大体止めを刺すか、追い払う一撃になるのはピウニー卿の剣だった。やはり、剣を刺し込み魔力を通す効果が高いのだろう。また、ネズミのサイズであっても、急所に剣を刺せば敵を動けなくすることは出来る。一方、サティの魔法は見た目は派手だが、ほとんど敵に致命傷を与えることは無い。一度、虫相手に効果的面だったことはあるが、それが精一杯。このため、サティは自分の魔法が浄化の魔法くらいしか役に立っていないことに、いつも引け目を感じていたのだ。

ピウニー卿はサティの前足を撫でてやった。

「それを言うなら、私は身体も小さいし、いつもサティに乗せて運んでもらっているではないか。」

サティは寝床に丸くなると、自分の足元に来ているピウニー卿が首元の毛皮に埋まる。ピウニー卿を前足で囲い込むと、その毛皮のふわふわを堪能した。

「でも私がもう少し小さかったらピウの毛皮堪能できるのに…。」

「サティが小さかったら？」

「そうよ。ピウニー卿と同じくらいだったら。」

ぶつぶつとサティが何事かを言い始めた。…ピウニー卿が大きかったら、ではなく、同じくらいだったら。ピウニー卿はこそばゆい気

持ちになった。

「ピウ…ひげ、ひげ揺らさないでくすぐったい。」

「勝手に揺れるんだ、仕方が無いだろう。」

「いい歳なんだから落ち着きなさいよ。」

「落ち着いておる。」

「ふーん。」

「サティ。」

「ん…？」

「人間に戻ったら…、俺はサティと…。」

…言い掛けて、ピウニー卿は気付いた。

「サティ？」

「ん…。」

サティの声はとろとろとまどろんでいる。ピウニー卿が喉元にいる体温に安心しているのか、喉がごろごろと鳴っていた。

「いや、なんでもない。おやすみサティ。」

そう言って、ピウニー卿はサティの毛皮をふかふかと撫でた。

０１８．いや、なんでもない（後書き）

アオダモ、トネリコ。
…元ネタが分かる方はいるでしょうか。

019．別の存在

「大丈夫か、サティ。」

「うん。」

杖の賢者の屋敷から、1時間ほど馬を走らせたところに目的地の黒の森は存在する。

だが、黒の森には多くは無いが人を襲う魔物が生育する森でも有名だ。

魔物は討伐の対象とされているが、全てが悪…というわけではない。動物と同じで、基本的に普段は人間に危害を加えることなく大人しくしている。だが、魔物は動物とは異なり、多くの魔力を有している。そのため魔力のバランスに影響を受けやすい。人の子が魔力のバランスを崩して身体を壊したり、魔力を暴発したりするのと同じように、魔物は魔力のバランスを崩すと凶暴化してしまうのだ。魔竜のように人間を越えるほどの知性を持つ者も確認されていて、そういった存在が魔物にさらに影響を与えて別の魔物を生み出す…という事もあった。

黒の森には、杖に素材に向く植物が通常の森よりも多く、それを求めて魔法使いが出入りするため魔力がより蓄積されている。杖の賢者が出入りするたびに、その魔力を沈静化するように術を施しているらしいが、それでもさまざまな系統の魔力を持った魔法使いや冒険者が立ち入れば、それだけ魔力のバランスは崩れる。この森で魔物が凶暴化するのは仕方がないことでもあった。

先ほどピウニー卿が切って捨てた魔物も、そういった類の者だろう。今は人間になっている2人の足元には、猿の体に鳥のくちばしのような口を持った魔物が息絶えている。襲撃はそれほど多くは無いが凶悪なものが多く、ネズミと猫では苦しい戦いになっただろう。今はシャドウメアも連れてきてはいない。

ピウニー卿が足場の悪いところを通すために、サティに手を伸ばした。こういう場所を行き来するのは慣れないサティは、その手に大人しく掴まる。足場が悪く、バランスを崩しかけたが、ピウニー卿はその身体を軽々と抱き止めた。

「あ、ありがとう。」

「ああ。」

サティは、すぐさまピウニー卿から離れた。猫の時にネズミのピウニー卿を抱えるのも擦り寄るのもなんとも思わないが、こうして人間に戻ったピウニー卿に抱えられるのはこそばゆく頬の温度が上がる。

最近、人間に戻ったピウニー卿を見ているとサティの心は落ち着かない。普段は歴戦の騎士らしく（サティの目には）落ち着いている（ように見える）ピウニー卿が、時々、自分を熱っぽく見つめてくる視線も、隙あらば距離を詰めてこようとする態度も流石に気付いている。…だが、その視線の意味を計りかねて、サティ自身にそれを受け止める素直な勇気は無かった。

サティは、人の姿に戻った瞬間ピウニー卿の厚い胸板に自分の身体が落ちるのも、その身体が落ちないように逞しい腕に身体を支えられるのにも、いまだに慣れない。ピウニー卿は、最近では落ち着い

たものだ。きちんと猫の身体をシーツでゆるく巻いて人の姿に戻し、ぐるぐる巻きの状態で人に戻ったサティを支えながら身体を起こして頭を撫で、もうひとつシーツを引き寄せて自分を隠し、最後によいしょと隣にサティを降ろす。最後のよいしょ…の時など、軽々と自分の身体を横抱きに抱えるのだ。そして、早く着替えろ…と後ろを向く。一連の動作には、当初はよく見られた慌てふためいた様子など微塵も無く、一部の隙も無い。…落ち着かないのはサティだけのようで、それが悔しくもあった。ああもう、ほんっと、自分だって猫の毛皮にネズミが落ちてくるのは全然気にならないのに！

「サティ、手を。」

「え？」

「足場が悪い。」

「大丈夫よ。」

「大丈夫ではない。早く貸すんだ。」

サティは少し躊躇してみた。だが、ピウニー卿は問答無用でサティの右手を取る。その強引さにサティが、思わず身を引いたときだ。

「サティ。」

ピウニー卿が再びサティを呼び、手を掴んだまま自分の背に隠した。すぐさまサティはピウニー卿から意識を離し、周囲へと気を向ける。ピウニー卿は既に周囲の気配に耳を澄ませていた。サティを庇ったまま、剣の柄に手を掛ける。

ガサガサ…！

遠くから素早く茂みを掻き分ける音が聞こえ、それが徐々に近づいてきた。魔法の気配を感じ取ったサティは、怪訝そうに眉を潜める。魔物にも魔力の気配は感じられるが、この気配は魔物ではない。カチャリ…と、ピウニー卿が剣の柄を持ち上げた。

気配がすぐ側に迫り、茂みの揺れが目に見えるほどになった。何者の影が見える…、そう認識した瞬間。

「悪く思うなーーー！！」

ドーン！

轟音と共に足元に転がってきたのは、先ほどピウニー卿が倒した魔物と同じ種類の魔物だった。その魔物を転がしたらしき人が、同じ方角に立っている。

なびく髪は亜麻色で、片方の手にはピウニー卿が持っているものよりも一回りは大きいだろう剣を持ち、背には数本の剣を背負っていた。攻撃直後のポーズだったのだろうか。膝を曲げたままの状態で片方の足を前に突き出し、足の裏を見せたまま、顔をこちらに向けた。

「ああん？」

声は、女性の声。

ピウニー卿は剣から手を離し、まじまじと女性を見ている。サティは事態がよく飲み込めず、首をかしげていた。恐る恐る…と言った風に、ピウニー卿を口を開く。

「…貴女は、…まさか、剣の賢者？」

剣の賢者…と呼ばれた女性は秀麗な眉を潜め、切れ長の瞳でピウニー卿に視線を向ける。たちまちその表情が、驚きの色に変わった。

「そういうあんたは…おいおい、もしかして…ピウニーアかい！？」

「え？」

今度はサティが驚いた。剣の賢者…？

剣の賢者って…。

サティには、彼女が剣ではなくてキックで魔物倒してたように見えたが、とりあえず突っ込まないでおいた。

＊＊＊＊

「いやー、まっさかあのピウニーが生きているとはね。死んだっつー話しか聞かなかったからさ。」

「はあ。」

「まあ、塵になって消えた？　とか言われても…信じられるわけないよ、あのピウニーが。」

「…あのピウニー？」

あっはっは…と豪快に笑っているのはピウニー卿が「剣の賢者」と

呼んだ女性だ。くるりと豪奢に巻いた亜麻色の髪に、切れ長の瞳。少し大きく魅力的な唇。引き締まった肢体の美しい女性だった。サティはとても小さい頃に先代の剣の賢者に会ったことはある。だが、今代の剣の賢者には会った事が無い。今代の剣の賢者が女性だということは知っていたが、まさかピウニー卿とも知り合いだったとは意外だった。

「そうさ。もうこっちが恥ずかしくなるくらい熱い坊主でね。…どうしても、あたしに剣を作ってほしいってごねてさ。」

「ご…ごねてなど…！」

「ごねてたさ。あたしは、そのときまだ剣の賢者を襲名してまだ2，3年で、変な矜持っていうかねえ…自分の作る剣は屈強な歴戦の戦士に…ほら、どうせならアルザスの先代当主とかさ、そういうのに持ってもらいたかったの。それなのに、王都の伯爵家の若いペーペーの長男様に譲れなんて、笑っちまうだろ。だから断ったんだよ。」

「若い？」

サティが興味津々な顔で瞳を輝かせた。

「ああ。もう15年くらい前になるかね、なあ、ピウニー？」

「剣の賢者殿…もう、そのへんで…。」

「だけどさ、『自分は絶対にアルザスの名に恥じない騎士になる男です。ですから、貴女の作った剣で魔法剣を極めたい』って、そういうから、根負けさね。」

あのピウニー卿にそんな熱血な時代があったのか。サティが楽しげに剣の賢者の話を聞いていると、その瞳を見て、ニッ…と笑った。

「そのピウニーが、ネズミ？しかも、愛玩系の？…やだーもー、すっごい見たいわー。」

「かわいいですよ。金色の毛がふわふわしてて。」

「おい、サティ！」

ピウニー卿の顔が若干赤くなっている。普段は落ち着き払っているピウニー卿の慌てた姿を見るのは、なんとなく面白い。そんなサティを見つめていた剣の賢者は、瞳を細める。

「あんたもね、サティ？…理の賢者んところの弟子だろう？…こーんなちっちゃかったのに、いつのまに大きくなったのやら。」

「え？」

「覚えていないかい？　あたしが、剣の賢者を襲名するときに、理のじーさんに連れてこられたことがあったろう。」

「ええ？」

あはははっ…と、剣の賢者は再び笑った。サティには全然記憶に無い。…多分、４，５歳の時だったのだろう。正直、その頃は完全に封じた魔力を少しずつ解放する訓練をしていて、身体も心もつらかった頃だ。つらい修行を強いられているように思えて、当時の自分は大層無口で無愛想だった記憶しか無い。今にして思えば、可愛くない子供だったに違いない。何か粗相でもしたのかと、心配になっ

た。そんなサティの表情を汲んだのか、剣の賢者は優しい微笑みになって、大きな手でサティの頭を撫でた。

「あんときもたいした子供だったけれど、立派になったじゃないか。理のじーさんもさぞ鼻が高いだろう。」

「そ、そんなことありません、私なんてまだまだで。」

「そんなことはない。」

ピウニー卿が被せるように即答した。

「サティは、古の魔法にも通じているし、魔法陣も術式も多く生み出せるのだろう。」

「でもっ」

「まあまあ、あまり見せ付けないでくれよ。」

なんですかそれどういう意味ですか！？…とサティが反論する前に、ニヤニヤ笑っていた剣の賢者は表情を引き締めた。

「…で、2人はトネリコの木を見つけたのかい？…確かにこの奥に、トネリコが余っていたと聞くが…」

「あ。」

「ああ。」

ピウニー卿とサティは顔を見合わせた。…2人には時間制限がある

のだった。急いで立ち上がる。

「こうしている時間は無いのでした。…剣の賢者殿、恐れ入りますが私達は…」

…ピウニー卿が一礼する。その慇懃な態度に、苦笑しながら剣の賢者は言った。

「いや、それは構わない。…あたしも一緒にいくよ。」

「え？」

「なんだい、文句あるのかい？」

「…い、いえ。」

文句などはあるはずが無い。心強い味方だった。…ただ、若干その迫力に押され気味のピウニー卿と、なぜか剣の賢者を憧れの瞳で見つめるサティとは、少しばかりテンションの温度差があったのは、否めない。

＊＊＊＊

「…ふむ…それで、ネズミになってしまった後も、剣が使えている…となあ。むう…。」

剣の賢者と共に森の中を進みながら、話はピウニー卿の剣が、体のサイズに合わせて伸び縮みする…という話題になった。やはり剣の賢者は自分の作った剣が気になるのだろう。だが、そういった事象は聞いたことが無い…と首を捻る。

「剣を構成する物質の網目の中に魔力が入り込んで、それらが作用しているのではないかと踏んでいるんですけど。」

サティの言葉に、うーん…と唸った。

「確かに、魔法剣の場合はそういうこともありうるがなあ…。だが、あれは私が最初に作った魔法剣用の剣だ。ネズミと人間くらいのサイズに伸縮するとなると、素材の比率を極限まで抑えた上で、残りは自身の魔力を最初に投入して…できるかどうか。…そもそもあの剣は、そんな風に作ってはいない。使いこなしている内にピウニーの魔力が素材に浸透した…としても、ピウニー自身の魔力はそれほど多いわけではないしな。…うーん」

「…ということは、別の魔力が介在している、ということですか？」

魔法剣というのは、その名の通り、剣に魔力を帯びさせる魔法だ。込める魔力によって、耐久力を高めたり、殺傷能力を上げたり、属性を付けたりする。ピウニー卿の場合は、呪文不要で魔力を剣に通し、殺傷能力を上げるという戦法を得意としていた。

魔法は、通常、金属との相性が悪い。魔法や魔力という柔軟な力に対応するには、頑なで頑固な素材だからだ。魔法使いが金属製の鎧を身に付けないのは、そういう理由もある。そういう相性の悪い金属を魔法の媒体にしよう、というのが、魔法剣という研究だ。魔力の鎖によって素材同士を結合させることによって、その網目にさらに魔力を注ぎ込むのが基本だ。金属を打つときに特殊な魔力を注ぎ込んだり、あるいは、比較的柔軟性の高い素材で作った剣に魔力を少しずつ込めたり、手っ取り早く魔力をチャージした魔法石を柄に埋め込んだり、様々な手法がある。注ぎ込む魔力は、金属を媒体としやすい属性が必要だから、個人の資質も重要だった。物質の隙間

に魔力が介在しているから、その比率によっては大きさが伸縮することも可能性としてはある。武器の形状を変える魔法も存在する。

ピウニー卿が手にしている剣は、剣を打つ段階で剣の賢者の魔力を注ぎ込んでいる。それをピウニー卿が使い込む内に、魔力が入れ替わっていく計算だ。だが、それと言っても、騎士剣から針までのサイズに変わる柔軟性を帯びるなど、聞いたことがない。剣の賢者は立ち止まり、一番後ろを歩くピウニー卿を振り返った。

「おい、ピウニー、ちょっと剣を見せてくれないか？」

「分かりますか？」

「さあなあ。…私としても、そういう話はあまり聞かない。…だが、手にとれば、作ったときと今の剣と、違いは分かるさ。」

ピウニー卿は頷いて、剣を抜いて柄を渡した。剣の賢者はそれを受け取り、まじまじと見つめる。

そして、見つめる表情が徐々に険しくなってきた。

「ああん…？」

物騒な声を上げる。

「どうしました？」

何かあったのかと、ピウニー卿が眉を潜めた。

「どうしたも、何もないよ、これ。…あんた、この剣で何をやった

んだい。」

「…どういう意味ですか。」

「この剣に込められた魔力は、ピウニーのもんじゃないね。そっくりそのまま、別の存在に入れ替わってるよ。」

「別の、存在？」

「別の魔力」…とは言わずに「別の存在」…と剣の賢者は言った。…全員の足が止まり、その言動に注視する。サワ…と風が吹いて、周囲の気配が変わったような気がした。その雰囲気にピウニー卿がぴくりと眉を動かすものの、魔物の気配は無い。それでも自然、サティの背中を包み込むような位置に立つ。

「そうだ。別の存在…心当たりがあるんじゃないか？…ピウニー。」

ピウニー卿の表情が硬くなった。サティにも分かる。ピウニー卿の剣がこういった状況になったきっかけ。いや、そもそもピウニー卿の身体をネズミに変える大きな呪いをかけた、あの存在。

「ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ…？」

…サティが思わずその名を口にした、瞬間。

グオオオオオオオオオオン！！

「くっ…！」

剣の賢者が持つピウニー卿の剣が咆哮し、その手を離れた。咄嗟に

ピウニー卿がサティの身体を抱き寄せ、セピア色の髪を抱える。剣の賢者の手を離れた剣は、地面に勢いよく突き刺さり、その剣を中心に今まで感じたことの無い魔力が渦巻いた。

…いや、ただ1人、ピウニー卿は感じたことのある魔力だった。これは…。

「…魔、竜か…？」

『いかにも。』

グルル…と唸り声にも似た、重々しい声が響く。

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ！』

バキバキと周囲の木をなぎ倒し、再び大きな咆哮が轟く。

3人の眼前に現れたのは、

狼くらいの大きさの竜？…だった。

０２０．魂が抜けかかった

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ！』

現れたのは、狼ほどの大きさの竜？だった。その竜？の身体は、黒光りする鱗に覆われ翼は厚い。前足には鉤のように鋭く曲がった爪が五爪。足はどっしりと地面を踏みしめ、ふしゅう…と吐く息は焦げ臭く、魔力が満ちていた。だが、竜としては…なんというか、ピウニー卿の記憶にあるそれよりも遥かに小さい。全員がその存在を見下ろせる位に小さい。

竜？は、微妙な空気を読まず、むふうーと鼻から息を吐いた。魔力はとても濃く、油断なら無い脅威なのは分かる。だが恐ろしい雰囲気はなぜか感じられない。本当に、これがオリアーブ国の国王を立ち上がらせ、ピウニー卿の身体を呪った竜なのだろうか。

『ふっふっふっ…驚いて声も出せぬか。…さもありなん。ピウニーよ、そなたのことはずっと見ておったぞ。妙ちくりんな虫を斬ったあの剣筋は見事であったな。しかし、人参のグラッセは半分に分けるべきであった！』

「え…あの。」

もはや記憶の彼方にあった人参のグラッセのことを蒸し返され、ピウニー卿の表情がますます微妙なものになった。

『そしてサティよ！』

「あ、え、は、はい。」

『そなたは、よくぞ我の名を呼んだ。さすが古の魔法に精通しておる、食えぬ魔法使いよの。』

「はあ。まあ。」

…確かに、サティはオリアーブ王国に古くから住まう魔物の名や、固有名詞、伝説なども研究の一環に取り入れている。魔竜の名前もそういう伝承によって伝え聞いたものだ。

『そなたが魔力を込めて名を呼んでくれたおかげで、我は剣の形から自分を解放し、こうして元の姿に戻ることが出来たのじゃ。礼を言うぞ。』

「元の姿…？」

怪訝そうな声を上げたのは、剣の賢者だ。元の姿…というのはありえない。せめて、この５０倍くらいは大きくなければ、元の姿とはいえないことくらい誰にでも分かる。だが、そんなことはお構いなしに、竜？はふんぞり返った。

『そして、そなたは剣の賢者じゃな？　先ほどから聞いておったわ。そなたが作った剣は我の魔力にも耐えうるほど筋のよい剣であった。だからこそ、我は剣が吸った血と魔力に己を閉じ込め、こうして再び大地と森と空の下に、復活することができたのじゃ！！』

グオオオオン！！

竜？は雄たけびを上げた。天に向かって息を吐けば、それは青い炎

のブレスとなって辺りの温度を上昇させた。咄嗟にピウニー卿がサティを背に庇い、剣の賢者が身を低くして、背に負った武器に手を掛ける。その様子を見て、むふん…と竜?は笑った。

『心配せずともよい。…我は、そなたらに害を為そうとは思わぬ。』

サティは瞳を凝らした。…自らの内にある魔力に集中し、目の前の竜?の魔力を読んでみようと試みる。竜?の言うとおり、禍々しいものは感じられない。とても猛々しい濃い魔力だが、言い換えれば清浄で力強い。それに…。

「剣に己を閉じ込め…って、どういうこと?」

我に返ったサティの、至極まっとうな質問に、竜?はグオオオオンと再び咆哮を上げた。

そして、呆気に取られている3人に、己の身の上を話し始めたのである。

＊＊＊＊

グラネク山に住まう魔竜はもともと、知性の高い存在だった。オリアーブ王国の建国と同じくらい、古くからグラネク山に住まい、大人しく、人に危害を加える事は無かった…という。そもそも魔物という生き物は、一部にはもともと凶暴なものもいるが、動物と同じで、魔力のバランスを崩しさえしなければ、他の生き物になりふり構わぬ害を加えるようなものではない。魔竜ももちろん例外ではない。そして、知性が高いゆえに、魔力のバランスを崩さぬように生きる術も心得ていた。グラネク山の山頂で、静かに鉱石を食べて生活していたのだ。

だが、ある日、そこに1人の魔法使いが訪ねてきた。
その魔法使いは魔竜が大人しいのをいいことに、この竜に呪いをかけようとした。もちろん魔竜も果敢に応戦し、呪いに抵抗した。だが、最終的には魔法使いが勝利したのだ。なぜならば…。
『彼奴は、我の愛しい眷属達を人質にしたのじゃ…。』
「眷属？」
『いかにも。グラネク山に住まうワイバーンや蛇たち。我が魔力を調え、人に害を為さぬよう、グラネク山の魔力の均衡を守るようにしてやったものどもよ。哀れなその子らは、あの魔法使いによって魔力を乱され人を襲うようになった。人であれ何であれ、襲われて戦うのは摂理じゃ。我も文句は言わぬ。だがな…、それがあの魔法使いによって歪められた摂理だと思うと口惜しゅうて…。』
サティがピウニー卿の服の裾をぎゅ…と掴む。複雑な思いを抱えたピウニー卿は、声を低くした。
「その、呪いとはどういうものなのだ。」
魔竜の話によるとその呪いは、魔力の流れを止めることにより、己の身の魔力の全てを魔竜の意識から切り離す呪いだった。このため、魔竜は自身の魔力を自身で操ることが出来なくなった。
魔竜は「魔」の「竜」だ。魔力と肉体のバランスによって知性を保つ。他の魔物が凶暴化する程度の魔力の乱れならばどうということもないが、魔力そのものの流れが止まれば流石の魔竜の理性も狂った。

魔力のバランスを失った魔物は人を襲う。竜とて、それは同じだ。理性という咎を奪われた魔竜はそれでも、人を襲わぬように己の内で荒れ狂う破壊衝動と戦った。その苦しみは、近隣の村を焼き、旅人を追い払った。最小限の被害に食い止められたのは、魔竜が最後の一線まで己の衝動と戦っていたからだろう。…だが、徐々に疲弊してきた。もう少しで自分の理性は完全に瓦解し、問答無用で国を焼き尽くす竜に成り果てる。そんなときに、ピウニー卿一行がやってきたのだ。

魔竜は歓喜した。

己の苦しみを断ち切る勇敢な人間達がやってきたのだ。これ以上の喜びはなかった。

だが、破壊衝動が収まったわけではない。魔竜とピウニー卿らとの戦いは熾烈を極め、人間の剣は魔竜の血を吸い、人間の身体は魔竜の吐く息で焦げて牙に傷ついた。それでも、最後の決着の付く時が来た。ピウニー卿の剣が魔竜の喉笛を捕らえ、切り裂いたのだ。これで終わる。それぞれの思惑が全く別のものだとしても、戦いに終止符が打たれる。魔竜は安堵して、地面に倒れる。

…しかし、それだけでは終わらなかった。

魔竜の断末魔の咆哮の凄まじさは、己を蝕む呪いを吐き出した。

死の瞬間、その咆哮によってその呪いの楔が吐き出され、周辺の生ける者全てに降りかからんとしたのだ。

いち早くその気配に気付いたのは、ピウニー卿だった。彼は、死の咆哮を上げる魔竜の眼前に剣を構え、竜にも負けぬ雄たけびを上げてその呪いを全て受け止めたのだ。魔竜は死に行く中で、ピウニー

卿の意志に気付いた。この男は、他の人間に…生き物に、自分の上げる咆哮が届かぬように受け止めている。ならば…と、魔竜は、自らの血を吸ったピウニー卿の剣へと己の魔力を全て注ぎ込んだ。己の肉体の一部と魔力さえあれば生き残ることができる。この勇敢な騎士を死なせるには忍びない。魔竜は最低限の力で生き残り、この哀れな騎士を助けようと心に決めた。

耐え切れぬかと思ったその剣は、魔竜の魔力に耐えた。こうして、魔竜はピウニー卿の剣が吸い込んだ血を自分の肉として、…つまり、ピウニー卿の剣を構成する魔力そのものとなって生き延びたのである。

たった一つだけ、予想外のことを残して。

呪いを全て受け止め死んでしまったかと思ったピウニー卿は生きていた。死なば、己と同じように剣に取り込み何らかの機会を与えてやろうと思ったのだが、予想外に、元気に生きていた。

…ネズミの姿で。

『そこで、我は己の姿をネズミの姿に合うように変化させて、この男の側におったのじゃ。』

「え。」

魔竜はピウニー卿の剣に浸み込んだ血に姿を変えた。そしてその血は剣を構成する素材そのものに溶け込んでいく。血を使って己の姿を戻すには、己の名を知っている人間に呼び戻される必要がある。魔竜の名前は古の魔法語だ。名前そのものが魔竜を留める力で、術式となる。

『剣が無いと困るだろうと思ってな。…サティよ、お主に出会い、その呪いが中途半端に解けたのには驚いたぞ？…おかげで、剣の大きさを調整するのが大変だったが、なかなかに上手くできておっただろう。』

「中途半端…？」…と剣の賢者が表情を動かした。サティは久々に呪いを解いたきっかけを思い出して、いたたまれない気分になる。

1人、心が落ち着かない人間が居た。

くかか…と笑う魔竜の言葉に、ピウニー卿は愕然としていた。側に居た…というのはどういうことなのか。この話が本当であれば、今までずっとサティと2人で会話してきた…というより、独り言とかも全部筒抜けだった…ということか。ああ、そういえば人参のグラッセのことを知っていたし、そうなれば、あんなことやこんなことまで知って…いるのか…！？

ピウニー卿の魂が抜けかかった。

『安心せい、ピウニー。そなたのプライベート的なところは、我は見ておらぬ。』

「プライベート的な？」

サティがすぐ隣のピウニー卿を見上げる。

ピウニー卿の魂は抜けていた。

『だから見ておらんというのに。』

＊＊＊＊

「それにしても…私は一体何ということを…。」

魔竜の性格はともかくとして、邪悪な存在ではない竜を討伐してしまった…というのは、ピウニー卿に衝撃を与えたようだった。確かに、国の凶悪化した魔物を討伐する任に着いてはいたが、元来正義感の強い男である。害為す魔物は倒してきたが、そうではない魔物には手を出さないように徹底していた。魔竜が呪いによって暴れていたとはいえ、邪悪な存在ではなかったことに強い罪悪感を覚える。魔竜はそんなピウニー卿に、グルル…と吐息を吐いた。

『気に病むな。ピウニー。そなたは我を救ってくれたのじゃ。そなたらが我を倒さなければ、我は人であろうと眷属であろうと、命果てるまで見境無く襲い、燃やし尽くしておったじゃろう。』

「しかし…私のせいで、そのような姿になってしまったのではないか？」

『身体が小さいことか？』

魔竜の金色の瞳が細まった。

『ピウニーに相見えたのが我の本性だが、我は魔力を取り戻しさえすれば大きさはいくらでも変えられるわ。幾ばくかの休息は必要だが、剣より復活した今ならばそれほど経たぬ内に戻れる。そなたとて、姿かたちが変わってしまっておるのじゃ。ピウニーよ、もし我に赦しを請いたいというのならば、我らをこのようにした魔法使いを探せ。恨みを晴らし、この炎で骨まで焼き尽くしてくれようぞ！』

魔竜はそういって、グオオオオオオオオオオ！…と一際大きな咆哮を上げた。
…魔竜に呪いをかけた魔法使い…。一体誰が何の目的でそのようなことを。それに魔竜の言うことが本当であれば、魔竜の魔力を断絶させた呪いが、ピウニー卿の姿を変えた…ということになる。魔物の理性を狂わせて、人間の姿形を獣に変える呪い。魔力というのは感情や自分の力に密接に関係していて、その関係性はいまだに完全に解けてはいない。…魔力の流れを止めるだけでなく、人としての意識下から切り離す…。人の姿を維持できなくなる…？　これは自分達の呪いを解く鍵になるかもしれない。悶々とサティが考え込んでいたが、それを払拭するように剣の賢者が口を挟んだ。

「ああん？…てぇことは、魔竜とピウニーは和解した、ってことになるのかい？」

『それもよかろう。人の子の友ができるというのも、悪くない。』

まんざらでもなさそうな魔竜はふしゅうと息を吐いた。やがて魔竜を囲む魔力が濃くなり始める。魔竜はバサリと翼を広げて宙に浮いた。巻き起こる風に、その場の3人が眩しげな表情になる。

『ではさらばじゃ、ピウニー卿、サティ、剣の賢者よ。我の炎が必要であれば、この名を唱えよ。』

『ウィロー・ナ・ムラン・イアディ　＝　フロット・フォン・ド・ラーゲ・ベネカ・イェズ・マーレ・マハ・マハジューレ』

『オウィクーブ・オーン・アナクーユ』

魔竜は自らの魔力を呼ぶ名と、その吐息を召喚するための魔法語を唱え、大空へと飛び去って行った。
天を仰いだ剣の賢者が言った。

「長っ」

０２１．プライベート的なって何？（前書き）

※戦闘シーンがあります。

０２１．プライベート的なって何？

ひとしきり語ったあと、天へと飛び去ってしまった魔竜を見送りながら、ピウニー卿はため息をついた。あのように言われても、やはり心の中では割り切れないのだろう。魔竜の飛び去った方向を見つめるピウニー卿の横顔を、サティはそっと伺った。ふわふわの小さなネズミの時とは違い全く可愛くないが、整った横顔は力強くて凛々しい。無造作な無精髭も、硬そうな首筋も、この人が自分とは全く異なる男という生き物なのだということを思い知らされる。

そんな横顔を見ながらサティは考える。…ピウニー卿と魔竜との戦いの様子を、初めて聞いた。魔竜の最後の咆哮を防ぐ為に、自分を犠牲にしようとした正義感の強い騎士。それがピウニー卿。よく考えてみれば、「竜殺しの騎士」という２つ名で国王の信頼も厚い、武家の名門の長子なのだ。…この旅が終われば、この人も再びそういった戦いに戻るのだろうか。そうなれば私も元通り理の賢者の元で弟子生活に戻るし…、そうか、離れることになるのか。一緒にいて当たり前みたいになってたから、そんな事態など考えたことも無かった。…それに、何よりも…。また、己の正義感に従ってこの人は戦いの最中に危険な真似をするのではないだろうか。自分のいないところで？…複雑に絡み合う思いがサティの胸に一気に降りてきて、思わずピウニー卿の腕を掴んだ。

「サティ？」

腕を掴まれたピウニー卿が、我に返ったようにサティを見下ろした。「どうした？」と首を傾げる。どうした…と言われても、上手く言葉に出来るはずがない。困ったようにうつむいたサティは、誤魔化すように全く別のことを答えた。

「…ート、って。」

「ん？」

「プライベートって何？」

「え。」

「魔竜の言ってたプライベート的なって何？」

一瞬、魂がさようならしかけたが、そこはさすがに騎士たるピウニー卿。我に返って首を振る。

「何も無い。そこを蒸し返すな。」

「蒸し返してはいないよ。」

「気にするな。」

「気になる。」

ねえねえと腕を引いて首を傾げてみせる。精悍な顔が慌てふためき、上目遣いのサティに気圧されるように仰け反っている。そんな2人に、こほんと咳払いが聞こえた。

「なあ、あんたら、こんなことしている場合かい？　もうちょっと進めば森の端だ。崖がある。トネリコが生えてるのはその手前くらいだろう。気をつけて行くよ。」

剣の賢者の声に、ピウニー卿とサティは顔を見合わせた。

「そうだ！…早くトネリコの木を見つけるぞ、サティ！」

キィィイイキィィィ…。

話題が逸れたことに安心してピウニー卿がサティを振り返ったそのとき、奇妙な声が聞こえた。ザア…ッ…と再び森の木々が震え、魔竜の魔力とは別種の…今度こそ、明らかに攻撃の意志を持った特殊な魔力の気配がする。ピウニー卿はサティを背に庇い、剣の賢者は自分の愛剣の柄を掴む。

茶色の毛皮に虎のような太い足、顔は醜悪な猿で、揺れる尾は蛇…放つ力はどうみても魔物であろう生き物が、３人の眼前に姿を現した。

「…ヌエ、か。手強いな。」

放つ魔力は雷を呼ぶ…といわれている、珍しい魔物ヌエ。普段は滅多に人の前に姿を現すことの無いその魔物は、いざその魔力が攻撃に回れば脅威だ。そして、どう見ても、眼前の魔物が大人しいとは思えなかった。大きさは馬より一回り大きいほどはあろうか。

「来るぞ…。サティ下がれ。」

「でも、ピウニー…。」

「いいから！」

キイイイイ！！

ピウニー卿がサティを一歩下がらせたと同時、鳴き声を上げてヌエが跳躍した。ピウニー卿は腰の剣の柄を握…。

剣が無い（まさかの）

「……くそっ、魔竜か！あの魔竜か！…私の剣がーーーー！！」

ピウニー卿の咆哮が森の中に響いた。魔竜が復活したことによって、ピウニー卿の剣は跡形も無く、消え失せたのだった。

＊＊＊＊

ピウニー卿はサティの腕を引っ張り身体を木に押し付けるように庇う体勢を深くすると、腰の後ろに装備していた短剣を抜いた。魔力を送れば折れてしまうだろうが、一撃分くらいは保つだろう。一気に引き抜き、眼前に構える。

大きいために動きの鈍いヌエの一発目は逸れる。だが、2発目を狙うヌエは真っ直ぐピウニー卿を見ていて、キキィ…と小さな鳴き声を上げている。ヌエの頭が下がり、蛇の尾がこちらを向く。

キキッ…キイイイイアアアアア！！

跳躍！

…ピウニー卿が一歩踏み出し、ほとんど体当たりの体勢でヌエの前に踊り出る。

「悪く思うなーーーーー！！」

ドーン！

ピウニー卿の短剣が届くよりも前に、ヌエの横腹が衝撃を受けて胴体が吹っ飛んだ。衝撃の源には、登場したときと同じ蹴りの構えを取った、剣の賢者。

「剣無しで何やろうってんだい。ピウニー、これを使いな！…魔法も使える。」

「かたじけない！…サティ、お前は向こうへ。」

剣の賢者は背負った剣の一本を鞘ごとピウニー卿に向かって投げた。それを受け取ると短剣を元に戻し、ピウニー卿はサティを剣の賢者の方へと押しやる。すぐさま鞘から剣を抜いた。

「ピウニ…！」

剣の賢者もピウニー卿の側に来て、サティを背に構える。杖の無い自分がもどかしく、サティは唇を噛んだ。…だが、サティは思い当たって顔を上げる。杖、あるわ。一本、世界で一番扱いにくいヤツが。…自分の魔力に適合させていない他人の杖を使うのは、基本的に過剰なバランスを生むか、まったく力が足りないかのどちらかだ。そもそも、杖に封じているオリジナルの魔法は呪文が分からなければ使えない。が、サティが思いついた杖には、サティも知っている呪文も込められているはずだった。魔力のバランスが心配だが、贅沢は言っていられない。

＜アーイェク・オ・イラウォート・オ・イェート＞

（理を司る賢者の杖よ）

その魔法語を理解した剣の賢者が、ハッと顔を上げてサティを振り返る。

「おいおい、サティ、それは…。」

「…サティ？」

怪訝そうなピウニー卿と、剣の賢者、２人の言葉を無視して、サティは呪文の続きを唱えた。

＜イハシュ・オ・ト・グレン！＞

（緑石より出力せよ！）

サティが首から掛けているグリーンの石が光り、その眼前に現れたのは、ナナカマドの木で出来た理の賢者の杖だ。サティが杖を掴むと、バチ…と小さな魔力が弾ける音がした。チクリと手のひらに痛みが走るが、掴めないほどではない。

「うっわ、師匠の杖、バランスわる。」

「サティ、下がっていろと…。」

「ピウ、私も一応魔法使いの端くれなんだから、バカにしないで。」

…どこかで聞いたことのあるような台詞に、ピウニー卿は眉を潜める。

「…バカになどしておらん。だが、」

「来るよ！…サティ、あんたその杖使う意味、分かってるんだろうね。」

「すみません、2撃目のチャンスを無駄にして。…援護に徹します。」

「聞いてるのかい！」

剣の賢者が構える。…ピウニー卿は、相変わらずサティの様子が気になるようだ。だが、腹を蹴られたヌエが起き上がり、頭を振ってこちらを睨むのを見て、意識をそちらに向ける。

「分かってます。」

剣の賢者の言葉に、サティは頷いた。師匠の杖のバランスが悪いのは…

キィイイイイイ！！

起き上がったヌエが跳躍する…と思った瞬間、天に向かって吼えた。剣の賢者とピウニー卿が地面を蹴り、それに重なるようにサティが呪文を唱える。

＜オグウィーブ・ネツァナク・オ・アーラク・ウォハーマ！＞

（魔力が生み出す力より完全なる防御！）

バチバチ…と、指が焼け付く。唱えたのは魔力に対する完全防御だ。座標はピウニー卿と剣の賢者、そして自分。サティは自分の身体から魔力が吸い取られるように一気に無くなるのを感じる…不味いな、

と思った瞬間、ものすごい脱力感が身体を襲った。師匠の杖のバランスが悪いのは、サティの魔力を超える…国でも最も上質の魔力に適合した杖だからだ。下手に使ったら魔力が一気に放出されて、さらに体力が魔力に置換される。自分の魔力が完全に戻っているならまだしも、3分の1しか使えないサティにとって、この杖を使うということは確実に体力を削られることを意味する。だが、それを悟られないように、サティは杖で身体を支えた。

ヌエの咆哮は、魔力の雷を呼んだ。細かい雷の矢が無差別に降り注ぎ、周辺のいくつかの木が音を立てて割れる。だが、3人の身体は無傷だ。魔法の効果を受け、剣を構えた2人は雷を無視して一気にヌエに距離を詰めた。剣の賢者は前足の付け根を、ピウニー卿は身体を低くし喉下を狙う。ヌエは身体をよじり、ピウニー卿の斬撃をかわしたが、剣の賢者の一撃が腹を掠め、ピウニー卿は避けたヌエの動きに合わせてさらに斜めに踏み込んで身体ごと剣を押し付けた。

ギイイイイアアアアア！

耳を塞ぎたくなるような鳴き声。ヌエは自分の身体にピウニー卿の剣を刺したまま、頭を振り上げた。ピウニー卿は剣から手を離さない。振上げられるままに身体を翻し、ヌエの背に掴まると、刺さった剣に魔力を込める。剣の賢者はヌエの後ろ足を斬り付けると、再び剣を構え直した。

後ろ足と肩を傷めてガクンと揺れたヌエは、キキィィィ…と涎を垂らしながら…、

…サティを、見た。

再び跳躍！

「サティ！」

「…きゃ…！」

急に大きく揺れたヌエの背で、突きたてたままの剣を握ってピウニー卿は身体を支える。思い切り剣を引いてダメージを与え、ヌエの突進のスピードが落ちたことが幸いした。バランスを崩して後ろに倒れたサティは、襲い掛かってくるヌエに向かって杖を横に倒して突き出し、防御の構えを取る。＜オグウィーブ！＞（防御を！）…必死に放った呪文は短いが、杖の方針によって、込められる魔力と威力は最大級だ。防御の魔力に弾かれて、ヌエが後ろに大きく弾き跳ばされる。

「ピウニー、耳の後ろが急所だ、そこを狙いな！」

剣の賢者は叫びながら倒れたサティの下に駆け寄り、その身体を庇った。剣に掴まり揺れを堪えたピウニー卿はもう片方の手で短剣を抜き、…ヌエの耳元に向かってそれを突き立て…短剣が崩れ去るほどの魔力をそこに込めた。

０２２．頬に触れた優しい温もり

キィィィキィッィィ！！

ヌエの放つ鳴き声の様相が変わった。恐らく最期の叫び声を上げながら、ヌエは走り始めた。

「やったか…ピウニー？…おい、ピウニー？　どこだ、…待て、そっちは…」

剣の賢者の表情が曇る。ヌエの背にさきほどまで見えていたピウニー卿が…居ない。それに気付いた瞬間、剣の賢者の脇を小さな生き物が飛び出した。

「ピウニー！」

「サティ、ダメだ、来るな！」

来るなって言われて誰が躊躇うか、バカピウニー！
サティは、トン…と杖を踏むと、呪文を唱えた。魔力の枯渇など、かまってはいられない。

＜エボートトゥ・イラウーフ・オ・アダァーラ・サティ！＞
（サティの身体よ、重力から離れ跳躍せよ！）

猫の小さな身体がさらに軽くなり、まっすぐに目的の方向へと跳躍する。目指す方向には、ヌエの身体から落下するピウニー卿だ。

ぱく！

跳躍したサティは、小さなネズミの身体を見事キャッチする。眼下には落下していくヌエの身体。重いヌエの身体は刺さった剣と共にすごいスピードで落下していき、あっというまに崖下へと見えなくなった。

…崖下。

崖下？

「サ…サティ…！」

「……～～～～！。」

落ちる…。完全に落ちる。いや、もう落ちてる。ゆっくり落ちてる。魔法の力で軽くなっているため、ゆっくり…だけど確実に落ちてる。…やばいやばいやばいやばいやばい、岸に！　岸に到達しなければ！…サティがピウニー卿を咥えたまま、じたばたと（猫だが）犬かきに挑戦した。だが、とても岸には到達できない程度に…落ちていく。ああ、これは…落ちる。全員が認識した、そのときだった。

グオオオオオオオオオオオオオン！！

巻き起こる突風、満ちた魔力。

比喩表現ではなく地形的な意味で、崖っぷちの剣の賢者の眼前を何かが横切った。この咆哮、この魔力は。

がしっ！

「…魔竜か？」

剣の賢者が眩しげに瞳を細めて、その魔力の源を見定める。剣の賢者の側に降り立ったそれは、前足で掴んだ何かを、よいしょ…と地面に置いてこう言い放った。

『いかにも、我はグラネク山の魔の竜。ウィロー・ナ・ムラン・イアディ＝マハ・マハジューレ！』

先ほど聞いたばかりのくだりが再び繰り返される中、足元では、金色のネズミとセピア色の猫が毛皮を膨らませてゼエハアと息をしていた。

それを見ながら剣の賢者が思わず言った。

「戻ってくるの早っ！」

…いや、ありがたいけど！

＊＊＊＊

「…魔、魔竜、助かった。礼を言う。」

魔竜はやはり狼程度の大きさだった。魔竜はふしゅうと鼻息を吐く。ニマリと瞳を細くした。

『礼には及ばぬ。山へ帰ろうかと思ったのじゃが、伝え忘れたことがあってな。サティは大丈夫か？』

「サティ！」

ふんぞり返った魔竜の言葉はほぼ聞かず、ピウニー卿はぐったりとしているサティの側に駆け寄った。その顔の毛皮にそっと手を埋めて撫でてやる。

「サティ、大丈夫か？」

「う、ん…大丈夫。」

「…理のじーさんの杖みたいな、変態杖使うからだよ、ったく…。それにしても、あー…本当に猫とネズミになるんだね。可愛いもんだ。」

弱々しく返事をしたサティの背を、剣の賢者が撫でる。こげ茶色の丸い瞳で剣の賢者を見上げるピウニー卿に、剣の賢者は頷いた。

「魔力使いすぎたんだよ。家で少し休んで行きな。ピウニー、あんたの剣もどうにかしないとね。」

「しかし、杖の賢者のところに行かねば。」

「ああ、それなら…。」

「ピウ…？」

剣の賢者が何かを言いかけたが、自分を呼ぶ弱々しい切なげな声にピウニー卿は顔を摺り寄せた。

「どうしたサティ。」

「…を。」

「なんだ？」

「ヌエが雷落としたときにトネリコ割れたからそれを…。」

「ああ、分かった…おい、サティ、大丈夫か？　サティ？」

グリーンの瞳を閉じて、耳がしょんぼりと寝てしまったサティをそっと揺する。気を失ってしまったようだ。ピウニー卿はサティの口元をぽんぽん…と小さく叩いて、剣の賢者を振り返った。

「剣の賢者殿…。」

「ああ、心得た。ちょっと待ってな。」

剣の賢者は立ち上がり、先ほどまで自分達が戦っていたところへと去っていった。それを見送りながら、ピウニー卿はサティの喉元のふわふわした毛皮を撫でている。

『ところで、我の話をしてもよいか？』

魔竜は竜ゆえに、空気が読めなかった。

＊＊＊＊

「あんた！…今帰ったよ！」

「…！」

サティの身体を抱え、ピウニー卿を肩に乗せた剣の賢者は真っ直ぐに杖の賢者の館に帰っていった。途中、シャドウメアを拾い、魔竜を連れての登場にも相変わらず杖の賢者は無表情だ。剣の賢者は魔竜の前足にサティを預け、肩のピウニー卿を摘んでその上に置くと、杖の賢者へと抱きついた。杖の賢者は剣の賢者を抱き寄せ、くるくる巻いた亜麻色の髪を愛しげに撫でている。

「…え？」

その様子にピウニー卿の髭がピーンと張った。確か、サティが「杖の賢者は奥方がいる」と言っていなかっただろうか。…ということは、

「もう知ってると思うけど、あたしの旦那の杖の賢者だよ。」

剣の賢者は、幸せそうに笑った。

＊＊＊＊

シーツを掛けられてすこやかに眠っている猫の口元に、ネズミが顔を寄せている。
次の瞬間、ピウニー卿の目の前に、人の姿に戻り、長い睫を伏せて眠るサティの顔があった。

あれからサティはずっと眠っている。体力が落ちているだけだ、少し眠ればすぐに回復する、心配ないと剣の賢者は言っていたが、それでもピウニー卿は心配で目が離せずにいた。どのみちネズミの姿で出来ることは少ない。人間に戻ることが出来るまで側に居ていいと言われたので、遠慮なくサティの側に居た。眠っているサティの

顔を見ているのは猫であっても飽きなかったし、柔らかな毛皮に触れていれば、生きていることを実感できて安心する。

そして、今、ピウニー卿は眠っているサティを人の姿に戻した。

人の姿に戻った瞬間は唇が触れ合うほど近い。今はピウニー卿も人の姿を為している。少し顔をずらせば、恐らくそのまま触れることが出来るだろう。今ならば、手を伸ばせば肩を包み込むこともできる。髪を梳くことも、その細い身体を自分の胸に抱き寄せることも。

ピウニー卿はとうの昔から、自分の気持ちを自覚していた。

彼とて年端もいかぬ若者…というわけではないのだ。何も身に着けていない女が現れても、激しく欲情することなどは無い。最初から自分の心がこうも浮つくのは、この小柄で、生意気で、そのくせ無防備な表情を見せる情の厚い可愛い猫が相手だからだ。サティと共に過ごすようになってから、その肌に口付けたいと思ったことは1度や2度では無い。幾度か抱き寄せたこともあるが、戸惑ったような付かず離れずの態度を取るサティがもどかしく、騎士としての矜持と男の理性がその先に進むことを戒めた。

だが、ピウニー卿とて男だ。愛しい女が裸で抱きついてくればどうなるか。他の男に触れられれば嫉妬もする。その頬を撫でたい、唇に触れたい、抱き寄せたい…と思うのは当たり前のことだった。だからこそ、ピウニー卿は人の姿に戻るときはいつもサティに、シーツで身体を巻いてからにするよう念を押していた。布越しに伝わる身体の曲線だけでも危ういのに、ああ何度も裸で抱きついてこられると、いつ自分の理性が飛ぶか分からない。

サティが過剰な魔力を使って無茶をしたのはピウニー卿のためだ。ヌエから振り落とされた小さなネズミを助けるため。ピウニー卿は

心底、早く人間の姿に戻りたかった。戻ればサティを守ってやれる。サティを抱き寄せて、この腕で運ぶことができるのに。…もっとも、サティは守られるだけでよしとする女性ではないだろう。だが、そういうところもピウニー卿を惹きつけて止まない。サティを守りたいと思う反面、彼女の魔法を信頼して共に行動することに喜びを感じてもいた。

「サティ。」

小さく名前を呼んでみる。ピウニー卿はサティの傍らに肘を付き、セピア色の髪をそっと梳いた。しばらくそうしていたが、やがて軽く息を吐いて身体を起こした。サティの身体に体重を掛けないようにそっと近づき、遠慮がちに頬に口付けを落とす。口付けた箇所を指で撫ぜると肩まで落ちていたシーツを掛けてやり、寝台から降りた。杖の賢者に借り受けた服を着て身を調えると、静かに部屋を後にする。

……。

パタン…と閉じた扉の音を確認して、サティはそっと瞳を開いた。

自分はどうやら体力を使いすぎて、眠っていたようだ。…自分の魔力を大幅に超過して体力を使い、そのまま倒れてしまうことは、魔法を使い始めた頃によくあった。

気が付くと…自分は人間に戻っているようだった。意識はあるが身体の自由が利かないのは、恐らく体力がまだ完全に戻っていないからだろう。

先ほど、ピウニー卿の低い声が耳をくすぐったのを思い出した。名

前を呼ばれたときから、…サティは起きていたのだ。ピウニー卿の、小さいけれど熱い声になんとなく瞼を開くことができず、眠ったフリをしてしまった。

ピウニー卿の手が髪を一筋梳くたびに指が耳と首筋を心地よく滑っていく感触と、髪を梳く手が止まってサティの頬に無精髭と熱い唇が触れた温度。たったそれだけのことなのに胸が疼く。

サティは枕に顔を埋めた。

自分はきっと体力が落ちて弱気になっているのだ。
そうでなければ、頬に触れた優しい温もりが名残惜しくて切なくて、涙が出そうな理由が分からない。

＊＊＊＊

ピウニー卿が居間に戻ると、魔竜の身体を検分していた剣の賢者が振り向いた。

杖の賢者と剣の賢者が夫婦だったというのを知ったのは、こちらに戻ってきてからだ。理の賢者は当然知っているだろうから、サティも同様だろう。剣の賢者には確か弟子があったはずだ。弟子には、以前の剣の賢者の館を守らせ、自分は杖の賢者の館で暮らしているということだった。こちらの館にも自分専用の鍛冶場を作っている。

「やあピウニー、休めたかい？」

「何もせずに、申し訳ない。それに、借り受けた剣はヌエと共に崖に落ちてしまいました…。」

剣の賢者はピウニー卿の神妙な言葉を聞いて、大きく笑った。

「なに、あれはいいんだよ。そんなことよりも、あんたらが無事でよかった。ああ…それにしても、ネズミの姿も可愛かったのに残念さね。…サティは？」

「まだ眠っています。剣の賢者殿。頼みがあります。」

ピウニー卿は剣の賢者の側に来ると、深く、騎士の一礼を取る。剣の賢者は心得たように、頷いた。

「…剣を作って欲しい、ってんだろ？」

「ええ。」

「顔をあげな。心配しなくってもかまわない。…あたしが作る剣は、生涯保証付きなんだよ。あんたに頼まれなくても、ちゃんと作ってやるさ。」

「かたじけない…。」

「その代わりさ、今度はちーっと実験させてもらおうかと思っててね。」

「実験？」

『我の鱗で刀身を造り、我の炎で鍛えるのじゃ。』

ピウニー卿の一言には、魔竜が答えた。魔竜が戻ってきた用件…というのは、ピウニー卿の剣を紛失してしまったことだという。剣の

賢者に、自分の鱗を使ってピウニー卿の剣を作ってみよ…という提案をするために戻ってきたのだ。もちろん断る理由など無い剣の賢者はそれを受け、魔竜の鱗を調べていた。

「そ。…ついでに、魔竜の牙で柄を作り、その血を魔力として注ぐ。…マハ・マハジューレの剣が出来るってわけさ。」

竜の鱗で剣を作る…？そんなことが出来るのだろうか。
その疑問をピウニー卿が口にすると、魔竜はふふん…と息を吐いた。

『我の鱗の一部はグラネク山の黒鋼石を取り込んで出来ておるのじゃ。だから黒光しておるだろう。合金を作るには申し分ない素材ぞ？』

「それはありがたい…が、牙は？　血は？…己を傷つけるような真似をするな。」

ピウニー卿のその言葉に、魔竜は再びふしゅふしゅ…と息を吐いた。どうやら笑ったようだ。

『問題ないぞ。…それにほれ、もう抜いてある。』

魔竜は何故か自慢げにテーブルの上を顎で指した。そこには竜の牙と瓶に入った数滴の血が置かれている。すぐ側には綺麗な黒い艶の丸い板のようなものがあり、これが竜の鱗であろうことはすぐ知れた。鱗はどうやって剥いだのだろうか。痛くは無かったのだろうか。ピウニー卿が魔竜にちらりと視線を向けると、その顔は竜であるために読めないが、得意げに鼻息を吐いた。

『抜いたのは親不知じゃから心配ないわ。…ま、さっき外に転がっ

ている石を喰らったときに折れただけじゃがな。』

ああ、竜にも親不知があるのか…。どこで役に立つか分からない豆知識をピウニー卿は得た。

＊＊＊＊

杖と剣の2人の賢者が住まう館を伺う、1人の騎士がいた。すこし垂れ目気味の甘い瞳。蜂蜜色の髪の毛。軽薄そうなその顔には、目的のものを見つけた喜びに小さく笑みを刷いていた。いままで不確定だったものが、確定に変わる喜び。自らの予測は外れていなかった。むしろ、正しかったのだろう。

「思ったとおりです。きっと本物でしょうね。」

騎士は1人、にっこりと笑った。

「竜殺しの騎士、ピウニーア・アルザス殿。」

【小話】　ヴィルレー公爵の場合

「やあ、ヴィルレー公爵。今日は授業が無かったはずだけれど？」

「ジョシュ殿下。お体の調子はよいのですか？」

「うん。今日は随分いいんだ。」

ヴィルレー公爵。アンヘル・ヴィルレーは、国王の用で王宮に出向いていた。王宮まで来たのなら、ついでに王子のところにも寄ってやってくれと国王に請われ、ジョシュの部屋へと向かう途中、中庭に面した渡り廊下で本人と鉢合わせたのだ。ジョシュの後ろには、ペルセニーアが控えている。

「陛下のところに寄っておりました。殿下にお会いできる許可を得まして、こうして。」

「許可？父上が？」

…ジョシュは苦笑して、困ったように頷いた。

国王はあまりジョシュに会おうとはしない。この身体の弱い王子をどう扱っていいのか、分からないのだろう。有能であるのに身体が弱いため重用することもできず、剣や魔法を持たせてやることもできない。国王という人間が王太子という人間に与えることの出来る何もかもを、ジョシュに与えることができない。それを国王は苦悩しているようだった。それならば、ただ親の愛情を与えればいいものを…。アンヘルは、国王がこの聡明な王太子を誰よりも大切に思っていることを知っているが、ジョシュは国王と会えないことを誤

解しているようだった。王族という家族に、愛情の行き違いやすれ違いが起こるのはよくある話だ。

ジョシュは苦笑を、穏やかな微笑みに変えてアンヘルを見上げた。

「よければお茶にしよう。セラフィーナは元気？」

「ええ。また連れてきましょう。」

「是非そうして。ペルセ、君も一緒に休憩しよう。」

主の邪魔をしないように静かに控えていたペルセニーアをジョシュは振り返り、一緒に来るように促した。ジョシュの笑顔を受けて、ペルセニーアは一礼した。

＊＊＊＊

「サティは元気だろうか。」

ジョシュの部屋で軽く話をしたあと、アンヘルは部屋を辞してペルセニーアと共に廊下を歩いていた。丁度、ペルセニーアの交代の時間に当たったので、アンヘルが誘って並んで王宮を歩いていたのだ。

「セラフィーナが寂しがっている。」

アンヘルは小さく笑って、ペルセニーアを伺った。アンヘルの笑顔に答えるように、ペルセニーアも頷いた。

「先日、杖の賢者殿から連絡が。」

「ほう、それは本当かい？」

「ええ。サティが到着した、と。」

「そうか。それはよかった。」

ペルセニーアの実家であるアルザス家に、先日手紙が届いたという。差し出し人は、剣の賢者と杖の賢者の連名。サティは賢者に無事に会うことが出来たようだった。

それを聞いたアンヘルは端整な顔を嬉しそうに崩し、何度か頷く。

ヴィルレー公爵家で一晩預かった猫のサティは、あれからアルザス家の保護の下、無事に旅に出たようだった。理の賢者の弟子であるという猫に、どのような旅路を用意したのか…とか、なぜ頑なにアルザス家がサティの世話をしようとしているか…など、聞いてみたいことは多くあったが、アンヘルはその事情をほとんど聞かなかった。ペルセニーアは何かを伏せているようであり、アンヘル自身もそれを察したが、それは恐らくペルセニーアの個人的なところにも抵触するだろうと思ったからだ。いつか話して欲しいと思いながらも、今はまだ、踏み込めるほどの仲ではない。

ただ、ペルセニーアはセラフィーナが寂しがっている…という話を聞いて、気を使ったようだ。確かに、サティは無事だと知れば、自分の娘は喜ぶに違いない。

「セラフィーナ嬢に、サティは無事です…と、お伝えください。」

「ああ。…きっと喜ぶだろう。…あ。」

アンヘルが突然何かを思い出したように、コホンと咳払いした。足を止める。すると、ペルセニーアもつられた様に足を止めた。

「もしよかったら、…その、貴女から話して聞かせてやってくれないだろうか。」

「え？」

思いがけない言葉を聞いたように、ペルセニーアが首をかしげた。

「…セラフィーナのことなんだが。」

「セラフィーナ嬢が何か？」

「もうすぐその…、あの子の誕生日でね。」

「まあ、おめでとうございます。」

「ああ、ありがとう。…それで、毎年家人だけで祝いをしていたのだが。」

「ええ。」

「その…。」

いつも落ち着いているアンヘルだったが、今は照れたような表情を浮かべてペルセニーアに向き合った。

「今年は…貴女にも来てもらいたいのだが。」

「私に…ですか？」

「ああ。ダメだろうか。」

ペルセニーアが、アンヘルのことを見つめている。
濃紺の騎士服に、黒い飾り紐は黒翼騎士団の証だ。金茶色の髪は緩くまとめて前に垂らしていた。

少しの間、2人の視線が絡んだ。それほど間を置かず、ペルセニーアの顔が綻ぶ。普段は凛々しい振る舞いと表情で、女性ながら侍女達にもひそかな人気のペルセニーアだが、このように笑うと、女性らしいとても柔らかな雰囲気になる。凛々しい表情からこの笑顔に移り変わる瞬間を見るのが、アンヘルはとても好きだった。

妻に先立たれて6年になる。公爵家の長子として決められた婚約者、定められた相手ではあった。燃えるように求める感情は無かったが、妻として誠実に愛して子を生した人だ。その妻に死なれてからというもの、いまだ若く紳士的な容姿も手伝って、ヴィルレー公アンヘルの元にはひっきりなしに縁談の話が沸いている。だが、そのどれもがアンヘルにとってはわずらわしいだけだった。どの縁談も、アンヘルの公爵という地位だけを求めている人間達にほかならない。それは貴族の社会における振る舞いとして、間違っているわけではないだろう。…だが、公爵だというだけで、望まない婚姻を押し付けられるくらいならこのまま独身でいたほうが気が休まる。

誰か特別に思いを寄せた相手がいるかというと、それも無かった。互いに定められた相手を愛することしか許されなかった妻を差し置いて、妻が死んだからといって、自由に誰かを求めることが後ろめたいという気持ちもあったのだ。誰かを愛するなどという感情は諦めるべきなのだろう、そう思っていた。

だが。

「喜んで、お伺いします。」

ペルセニーアが、アンヘルに向けた柔らかな笑顔をいつもの慎ましい遠慮がちな表情に戻して、礼儀正しく頷いた。それがアンヘルには名残惜しい。

「ありがとう、フィーナも喜ぶ。」

彼女と親しく言葉を交わすようになってから、アンヘルの心に暖かく灯る小さな光。それはまだ、誰にも言えぬほどの小さなものだった。遠く若い時分に公爵家の長子として諦めていた感情、後ろめたさから仕舞い込んでいた気持ちの類だ。アンヘルには想像できる。そう遠くない未来、この暖かさはやがて大きく心を満たすようになるだろう。今はまだ、その笑顔が自分にではなくセラフィーナに向けられるものだとしても構わない。いつか、その笑顔が自分にも…、向けられるようになってくれるだろうか。そして、自分はそれを求めてもよいだろうか。

騎士団の詰め所に足を向けるペルセニーアと、王宮の正面へと向かうアンヘルはここでお別れだ。

「ペルセ、貴女が来てくれると、私も嬉しい。」

「え？」

「ではここで、ペルセニーア。」

アンヘルは見事な一礼を施した。慌てたようにペルセニーアも騎士の礼を取る。
王宮の門へと歩みを進めながら、さりげなく、ペルセニーアを愛称で呼ぶことに成功したアンヘルは自分の顔が緩むのを自覚した。ペルセニーアが来ると知れば娘は喜ぶだろう。だがそれ以上に、アンヘル自身も楽しみなのだ。

そんなアンヘルの後姿をしばらく見送っていたペルセニーアが、ほんの僅かに頬を染めてうつむいた。

［小話］　ヴィルレー公爵の場合（後書き）

次も小話になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9584w/

ピウニー卿の冒険！

2011年10月13日20時36分発行